



山
王
廃
寺

~平成19年度調査報告~

2009. 2
前橋市教育委員会



南上空から山王庵寺伽藍地を望む

卷頭図版 2



1. 金堂調査区周辺俯瞰（上空から。上が北）



2. 金堂基壇の状況（I2トレンチ。北から）



1. 金堂基壇北側断ち割り（版築）の状況（12トレンチ西壁。東から）



2. 金堂基壇北側断ち割り（版築）の状況（13トレンチ西壁。北東から）



I式軒丸瓦（単弁八弁蓮華文）と
Ig式軒平瓦（素文）の組み合わせ



IV A式軒丸瓦（複弁七弁蓮華文）と
II KB式軒平瓦（三重弧文）の組み合わせ

はじめに

山王庵寺がある総社・元総社地区は、宝塔山古墳に代表される総社古墳群をはじめとして国府、国分僧寺、国分尼寺などの諸施設が立ち並ぶ古墳時代から律令制の中枢地域といえます。

今回、報告書を上梓する山王庵寺は、大正年間に五重塔の塔心礎が発見され、昭和3年に国史跡に指定されました。また、昭和56年度の調査で、「放光寺」とヘラ書きされた瓦が出土しました。一片の文字瓦の発見により特別史跡山上碑、上野国交替実録帳にてくる「放光寺」と山王庵寺が見事に一致しました。

また、伽藍配置についても東に塔、西に金堂が並ぶ、奈良斑鳩法起寺式の様式を採用したものと推定されています。出土品には、全国的にも稀有な石製鶴尾や根巻石をはじめ、綠釉陶器セット、銅椀、建物の屋根に葺かれた多量の瓦が発見されています。さらに、平成9・11年度には、塑像をはじめ壁画や天蓋、須弥山など塔本塑像を構成していた破片が3,000点以上も発見されました。これらの塑像はその種類、内容から法隆寺の塔本塑像に匹敵することが判明し、山王庵寺の歴史的価値を再認識する資料となりました。

しかし、古代東国を代表する山王庵寺については、その詳細な実態が把握できていない状態です。この問題を解決し、後世にわたり保存・活用するため基礎的な資料を得るために文化庁、群馬県教育委員会の指導を受け「山王庵寺等調査委員会」を平成12年に発足させました。毎年検討会を開催し、平成18年度から5カ年計画で継続的な確認調査を行うことになりました。

今回、報告を行う第2年次の調査は、前年に引き続き回廊の発見や主要建物の範囲確定に努めました。幸いにも、今回の調査によって東西の回廊幅を確定でき、金堂の版築範囲の拡大を突き止めることができました。また、平成20年3月28日には史跡の名称変更と追加指定について官報告示となりました。従来の「山王塔跡」から「山王庵寺跡」へと名称変更され、指定面積も214.86m²から8,277.25m²へ拡大となりました。

最後に、本事業の推進にあたり、国・県・市の関係各位のご理解とご協力に対して深く感謝する次第です。また、地元の総社町山王自治会はじめ土地所有者の皆さんからも惜しみない協力をいただくことができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成21年2月

前橋市教育委員会

教育長 中澤充裕

例　　言

1. 本報告書は、『總社・元總社地区の古代遺跡整備に伴う山王庵寺範囲内容確認調査計画書』に基づき、5カ年の調査計画（平成18～22年度）の2年次調査として、平成19年度に実施した発掘調査の報告書である。
2. 遺跡は群馬県前橋市総社町総社2408番地ほかに所在する。
3. 発掘調査は、山王庵寺等調査委員会の指導のもと前橋市教育委員会が実施した。調査の要項は以下のとおりである。
 - ①発　掘　調　査　期　間　　平成19年9月11日～平成19年12月26日
 - ②整理・報告書作成期間　　平成20年1月4日～平成21年1月16日
 - ③調査組織（平成19・20年度）
　　山王庵寺等調査委員会
 - (1) 委員会
　　　指　導　坂井秀弥（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）、右島和夫○（群馬県教育委員会文化課文化財主監）、郡　和良●（群馬県教育委員会文化財保護課長）
　　　顧　問　中澤充裕（前橋市教育委員会教育長）
　　　委　員　長　松島榮治（前橋市文化財調査委員）
　　　副委員長　阿部義平（国立歴史民俗博物館教授）
　　　委　員　近藤義雄○（前かみつけの里博物館長）、須田　勉（国士館大学文学部教授）、阿久津宗二（前橋市文化財調査委員）、梅澤重昭（同）、井上唯雄（同）、右島和夫●（専修大学文学部講師）
　　　幹　事　飯島義雄○（群馬県教育委員会文化課文化財活用グループG.L.）、松村和夫（同指導主事）、深沢敦仁●（群馬県教育委員会文化財保護課指導主事）、砂川次郎○（前橋市教育委員会管理部長）、依田三次郎●（同）、沼添輝彦（同総務課長）、栗原和彦、駒倉秀一〇、篠田　薰●
 - (2) 調査部会
　　　幹　事　松田　猛（群馬県教育委員会文化課埋蔵文化財グループG.L.）、田中広明（埼玉県埋蔵文化財調査事業団主査）、出浦　崇（伊勢崎市教育部文化財保護課埋蔵文化財担当主査）
 - (3) 事務局（担当課　前橋市教育委員会文化財保護課）
　　　課　長　駒倉秀一〇、篠田　薰●　　文化財整備指導員　栗原和彦
　　　課長補佐　小島純一（兼文化財保護係長）、前原　豊（兼埋蔵文化財係長）
　　　係　員　山下成信●、梅澤克典〇、近藤雅順〇、岩丸辰久●、神宮　聰、池田史人、綿貫綾子
　　　（○……19年度、●……20年度。職名は19年度。）
 - ④発　掘　・　理　担　当　者　　池田史人、綿貫綾子
4. 本書の編集は池田・綿貫が行った。原稿の執筆分担は下記のとおりである。

I・IV・V・VII…池田	II・III・VII…綿貫	VI…栗原和彦
---------------	---------------	---------
5. 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

石原義夫、岩木　操、大澤俊夫、岸フクエ、齊藤亜寿、須田博治、高澤京子、角田　恒、徳江　基、渡木秋子、中澤光江、中島大輔、平林しのぶ、星野和子、湯浅たま江、湯浅道子
6. 発掘調査にあたり、加藤明美氏・阿久津喜氏・都丸惟之助氏・都丸甲子郎氏・都丸武弘氏・阿久津勝一氏・阿久津勝氏の土地を借用した。また、総社町山王自治会および同会長・岡口省造氏の全面的な協力があった。
7. 調査および報告書作成にあたっては下記の諸機関・諸氏の御教示・御指導・御協力があった。

文化庁記念物課、群馬県教育委員会文化課、群馬県立歴史博物館、師群馬県埋蔵文化財調査事業団
阿久津宗二、阿部義平、飯島義雄、石川克博、出浦　崇、井上唯雄、岡部　央、岡本東三、朽津信明、郡　和良、近藤義雄、齊木一敏、鈴木雅浩、坂井秀弥、澤村　仁、須田　勉、高井佳弘、田中広明、田辺征夫、玉田芳英、土肥　孝、富沢敏弘、南雲芳昭、原田昌幸、深沢敦仁、松島榮治、松田誠一郎、松田　猛、右島和夫、渡辺丈彦
8. 発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1. 掘図中に使用した北は、座標北である。
2. 掘図に国土交通省国土地理院発行の1:200,000地形図(宇都宮、長野)、1:50,000地形図(前橋)を使用した。
3. 本道路の略称は、19A135である。略称の後に枝番を付し、トレンチ番号を示した。本文中では、トレンチの略称としてTを用いた。
4. 道構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

H…古墳～奈良・平安時代の堅穴住居跡　B…建物跡　W…溝跡
D…土坑　P…ピット・柱穴・貯蔵穴
5. 道構・遺物の実測図の縮尺は、次のとおりである。

道構　全体図・道構配置図…1:100、1:150、1:200、1:300、1:400、1:500などを適宜用いた
道構断面図…1:60　　住居跡、溝跡、柱穴…1:60　　竪…1:30
遺物　土器…1/3・1/4　　鉄製品…2/3　　瓦…1/2・1/4・1/5・1/6を適宜用いた。
6. 計測値については、()は現存値、[]は復元値を表す。
7. 遺物観察表については、以下のとおり記述した。
 - ①層位は道構出土の場合、「床直」・「底面」：道構底面より10cm未満の層位からの検出、「覆土」：底面より10cm以上の層位からの検出の2段階に分けた。
 - ②口径、器高の単位はcmである。現存値を()、復元値を[]で示した。
 - ③胎土は、細粒(0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名等を記載した。
 - ④焼成は、基本的に極良・良好・不良の三段階とした。ただし、須恵器について酸化焰焼成によるものは「酸化焰」と記載した。
 - ⑤色調は土器外面で観察し、色名は『新版標準土色帳』(小山・竹原1967)によった。
8. 土層注記中に使用した略号は下記のとおりである。

B……ブロックの略　C・FP……As-CやHr-FPなどの白色軽石粒
9. 報告書作成時に変更した道構名は、下記のとおりである。

18トレンチD-1→D-21　　19トレンチW-1→D-1～5
10. 道構平面図の-----は推定線を表し、- - - - -は堅微面の範囲を表す。
11. スクリーントーンの使用は、次のとおりである。

道構平面図　版築…、　粘土分布…　炭化物分布…　灰分布…
道構断面図　構築面…　版築…
遺物実測図　須恵器断面…　煤付着…
12. 遺物写真中に付した番号は掘図(Fig.)番号に対応している。
13. 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B (浅間B軽石：供給火山・浅間山、1108年)
Hr-FP (榛名二ヶ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、6世紀中葉)
Hr-FA (榛名二ヶ岳洪川テフラ：供給火山・榛名山、6世紀初頭)
As-C (浅間C軽石：供給火山・浅間山、4世紀前半)

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	4
1 遺跡の立地.....	4
2 歴史的環境.....	4
III 調査方法と経過	7
1 調査方法.....	7
2 調査経過.....	9
IV 基本層序	10
V 伽藍の調査	13
1 金 堂.....	13
2 回 廊.....	21
3 寺 城.....	28
4 その他の伽藍関連遺構.....	31
VI 出 土 瓦	36
1 軒瓦の分類.....	36
2 今年度調査の出土瓦.....	40
VII その他の遺構と出土遺物	68
1 積穴式住居跡と出土遺物.....	68
2 その他の出土遺物.....	79
VIII ま と め	91
1 成果と課題.....	91
2 伽藍の検討.....	92
3 結語：今後の課題.....	94

挿図目次

Fig. 1 山王庵寺位置図	2	Fig.30 平瓦	51
Fig. 2 推定伽藍配置と過年度調査	3	Fig.31 道具瓦など	53
Fig. 3 周辺遺跡	6	Fig.32 篦目瓦	54
Fig. 4 2m小グリッドの呼称	7	Fig.33 文字瓦 1	56
Fig. 5 グリッド設定図と平成19年度調査区	8	Fig.34 文字瓦 2	58
Fig. 6 基本層序模式図と各トレンチ土層柱状図	10	Fig.35 絵画風の篦描痕など	59
Fig. 7 平成19年度主要伽藍調査全体図	11・12	Fig.36 H-16号住居跡	68
Fig. 8 金堂版築土層断面図	14	Fig.37 H-17号住居跡	68
Fig. 9 金堂周辺構配図	15・16	Fig.38 H-17号住居跡出土遺物	69
Fig.10 12トレンチD-14号土坑断面図	17	Fig.39 H-18・22号住居跡	70
Fig.11 17トレンチ金堂版築土層断面図	19	Fig.40 H-18・22号住居跡出土遺物(1)	71
Fig.12 17トレンチP-1・2号柱穴	19	Fig.41 H-18・22号住居跡出土遺物(2)	72
Fig.13 西面回廊周辺構配図	22	Fig.42 H-19号住居跡・出土遺物	73
Fig.14 西面回廊調査区断面図	23	Fig.43 H-21号住居跡	74
Fig.15 17トレンチB-3号建物跡・19トレンチ 版築土層断面図	25	Fig.44 H-21号住居跡出土遺物	75
Fig.16 南面回廊推定地構配図	26	Fig.45 H-23号住居跡・出土遺物	75
Fig.17 19トレンチP-1号柱穴	27	Fig.46 H-24号住居跡・出土遺物	76
Fig.18 寺域北側構配図	29	Fig.47 H-25号住居跡・出土遺物	77
Fig.19 10・11・20トレンチ全体図・11トレンチ W-1号溝断面図	30	Fig.48 H-26号住居跡・出土遺物	78
Fig.20 18トレンチ平面図・B-2号建物跡 版築土層断面図	32	Fig.49 H-27号住居跡	78
Fig.21 19トレンチ構配図・D-1～4号 土坑(瓦溜り)・平・断面図	33	Fig.50 H-28号住居跡	79
Fig.22 瓦溜り遺物分布図と出土遺物	34	Fig.51 H-29号住居跡出土遺物	79
Fig.23 軒丸瓦分類図	37	Fig.52 溝跡・土坑・グリッドなど出土土器	80
Fig.24 軒平瓦分類図	39	Fig.53 19トレンチ瓦溜り出土土器(D-1・2)	81
Fig.25 軒丸瓦 1	41	Fig.54 19トレンチ瓦溜り出土土器(D-2)	82
Fig.26 軒丸瓦 2	43	Fig.55 19トレンチ瓦溜り出土土器(D-2・5)	83
Fig.27 軒平瓦 1	45	Fig.56 土製品・石製品など	86
Fig.28 軒平瓦 2	47	Fig.57 鋳製・铸造関連遺物	88
Fig.29 丸瓦	49	Fig.58 金銅製品	89

表 目 次

Tab. 1 これまでの調査経過	1	Tab.10 H-17号住居跡出土遺物観察表	69
Tab. 2 調査区の面積と調査目的	7	Tab.11 H-18・22号住居跡出土遺物観察表	72
Tab. 3 平成19年度検出遺構の概要	9	Tab.12 H-19号住居跡出土遺物観察表	73
Tab. 4 金堂基壇の版築土層	20	Tab.13 H-21号住居跡出土遺物観察表	75
Tab. 5 平成19年度調査出土軒瓦分類集計表	48	Tab.14 H-23号住居跡出土遺物観察表	76
Tab. 6 文字瓦一覧	60	Tab.15 H-24号住居跡出土遺物観察表	77
Tab. 7 絵画風の篦描痕など	61	Tab.16 H-25号住居跡出土遺物観察表	77
Tab. 8 出土軒丸瓦集計表(1974～99年)	66	Tab.17 H-26号住居跡出土遺物観察表	78
Tab. 9 出土軒平瓦集計表(1974～99年)	67	Tab.18 H-29号住居跡出土遺物観察表	79

Tab.19 溝跡・土坑・グリッドなど出土土器 観察表	84	Tab.22 製鉄・鋳造関連遺物観察表	89・90
Tab.20 19トレンチ瓦溜り出土土器観察表	84・85	Tab.23 金属製品観察表	90
Tab.21 土製品・石製品など観察表	87		

図版目次

巻頭図版 1	南上空から山王庵寺伽藍地を望む	2	金堂基壇東側断ち割り（版築）の状況	
2—1	金堂調査区周辺俯瞰	4—上	I式軒丸瓦とIg式軒平瓦の組合せ	
2	金堂基壇の状況	4—下	IV A式軒丸瓦とII KB式軒平瓦の組み合わせ	
3—1	金堂基壇北側断ち割り（版築）の状況	7	B—3号建物跡版築面全景（17T・北から）	
（全景）		西面回廊	PL. 7—1	15トレンチ調査区全景（東から）
PL. 1	北上空から伽藍地を望む		2	回廊礎石据付跡1（15T・北から）
（遺構）			3	回廊礎石据付跡2（15T・北から）
金堂跡			4	15トレンチ北壁断面（南東から）
PL. 2—1	12トレンチ調査区全景（南西から）		5	回廊版築断面（15T・南東から）
2	6次調査区検出状況（12T・東から）		6	D—1号土坑遺物出土状況（15T・北から）
3	白色粘土版築周辺状況（12T・北東から）		7	D—2・4号土坑遺物出土状況（15T・東から）
4	金堂版築断ち割り状況（12T西壁・南東から）	PL. 8—1	18トレンチ調査区全景（東から）	
5	金堂版築断面（12T西壁・東から）		2	18トレンチ回廊跡全景（西から）
PL. 3—1	金堂版築断面（12T攢乱部・西から）		3	回廊礎石据付跡3（18T・南から）
2	黒色土版築断面（12T東壁・南西から）		4	回廊礎石据付跡4（18T・南から）
3	黒色土版築東限部断面（12T南壁・北から）		5	B—2号建物跡版築断面（18T・南から）
4	D—14号土坑全景（12T・北から）		6	B—2号建物跡南限部分断面（18T・南から）
5	D—14号土坑断面（12T西壁・東から）	南面回廊推定地	PL. 9—1	19トレンチ調査区全景（上空から、上が北）
PL. 4—1	13トレンチ調査区全景（東から）		2	19トレンチ版築土層残存状況（南から）
2	金堂版築断ち割り状況（13T・西から）		3	版築状土層断面（19T・西から）
3	金堂版築掘り込み部断面（13T・北から）		4	版築状土層断面接写（19T・西から）
4	金堂版築周辺の瓦出土状況（13T・北西から）		5	19トレンチP—1号柱穴全景（西から）
5	D—16・17号土坑全景（12T・北から）	PL. 10—1	19トレンチ瓦溜り遺物出土状況全景（北から）	
PL. 5—1	14トレンチ調査区全景（北から）		2	瓦溜り遺物出土状況（北西から）
2	金堂版築断面（14T西壁・南東から）		3	Ⅹ式軒丸瓦の出土状況
3	金堂版築掘り込み部断面（14T西壁・東から）		4	瓦溜り底面の遺物出土状況（西から）
4	14トレンチ西壁断面（北東から）		5	瓦溜り完掘状況全景（北西から）
PL. 6—1	金堂版築周辺の瓦出土状況（14T・北から）	豊穴住居跡	PL. 11—1	10トレンチ調査区全景（北から）
2	D—8・9号土坑全景（14T・北から）		2	H—16・23号住居跡全景（南西から）
3	17トレンチ調査区全景（北から）			
4	金堂黒色土版築断面（17T西壁・東から）			
5	B—3号建物跡版築断面（17T西壁・東から）			
6	B—3号建物跡版築断面接写（17T西壁・東から）			

- 3 H-17号住居跡全景（西から）
 - 4 H-18号住居跡遺物・炭化材出土状況(西から)
 - PL. 12-1 H-18号住居跡壁面補強材出土状況（西から）
 - 2 H-18・22号住居跡竈（西から）
 - 3 H-19号住居跡全景（西から）
 - 4 H-19号住居跡遺物出土状況（西から）
 - 5 H-21号住居跡全景（西から）
 - 6 H-21号住居跡竈（西から）
 - 7 11トレンチ調査区全景（北から）
 - PL. 13-1 H-24号住居跡全景（西から）
 - 2 H-24号住居跡竈（西から）
 - 3 20トレンチ調査区全景（南から）
 - 4 H-25号住居跡全景（東から）
 - 5 H-26号住居跡全景（西から）
 - 6 H-25・26号住居跡断面（西から）
 - 7 H-27号住居跡全景（東から）
- (遺物)
- 瓦類
- PL. 14 平成19年度調査出土軒丸瓦 1
 - PL. 15 平成19年度調査出土軒丸瓦 2
 - PL. 16 平成19年度調査出土軒平瓦 1
 - PL. 17 平成19年度調査出土軒平瓦 2 (28-8・9・10)・丸瓦 (29-4)・平瓦 (30-1)
 - PL. 18 平成19年度調査出土平瓦
 - PL. 19 鬼瓦 (31-1)・縦目瓦 (32-2)・文字瓦
 - PL. 20 文字瓦など
 - PL. 21 窓描きなど
- 出土土器類
- PL. 22 H-17・18・19・21・23号住居跡出土土器
 - PL. 23 11・14・15・19トレンチ出土土器
 - PL. 24 19トレンチ出土土器・切石

I 調査に至る経緯

山王庵寺は7世紀後半の創建と考えられる古代寺院である。その存在は大正年間、塔心礎が偶然発見されたことにより明らかとなった。これを嚆矢としその後、2体の石製鶴尾や七弁の蓮華紋をかたどった根巻石などの精巧な石造品をはじめ塑像、綠釉陶器のセットや佐波理椀、金銅製飾り金具、堂宇に葺かれた大量の瓦などが耕作や工事の際に続々と発見された。

山王庵寺における最初の調査は、大正10年の福島武雄氏による塔心礎の調査である。塔心礎のある日枝神社境内は昭和3年に「山王塔跡」として国の史跡に指定された。その後、昭和49年から56年にかけ7次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査では、とくに6次調査での金堂の検出および「放光寺」梵書の平瓦の出土が注目される。この瓦の出土により、山王庵寺は「山ノ上碑」や「上野交替実録」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。また、平成9~11年にも山王庵寺周辺の下水道敷設に伴い調査が行われ、このときには土坑から大量の塑像が出土している。これらの発見や調査、研究により、山王庵寺の歴史的価値が広く認められることとなった。

Tab.1 これまでの調査経過

年度	調査名	調査目的(原印)/面積(m ²)	調査概要	文献
S49 (1974)	第1次調査	寺域の確認	塔の北約110mで擬柱建物跡(4次調査で僧房もしくは食堂とされる)の一部を検出。	前橋市教委 1975
S50 (1975)	第2次調査	塔北東側施設の確認	寺院通道路は検出されなかつた。寺院創建以前(6世紀代)を主体とする堅式柱住跡群が検討された。	前橋市教委 1976
S51 (1976)	第3次調査	2次調査の續続(塔北東側施設の確認)	塔の東側から伽藍に連なるとみられる礎石建物(礎石群B)がほか、世時以降とみられる礎石群Aが検出された。	前橋市教委 1977
S52 (1977)	第4次調査	1次調査で検出された擬柱建物跡の調査	町丁約16間、梁行3間の擬柱建物跡であることが判明。僧房もしくは食堂と推定された。建物の南側には円筒輪軸を用いた施設跡が検出された。	前橋市教委 1978
S53 (1978)	第5次調査	4次調査の續続(擬柱建物跡の追調査)	擬柱建物跡の南側から6種類の擬柱建物跡を検出。うち5種は柱軸跡で、1種は柱頭跡であることが確認された。また、この建物の西側から16種類の擬柱建物跡が確認された。塔院通に先行する建物であると考えられた。	前橋市教委 1979
S54 (1979)	第6次調査	塔周辺(北・西側)の追調査	塔西側から基礎建物跡(金堂と推定)、東西16.6m・南北11.7m ² が検出され、法起寺式の施設配置であることが判明した。出土遺物では、「放光寺」梵書の平瓦が出土し、山王庵寺が「山ノ上碑」や「上野交替実録」にみられる「放光寺」である可能性が浮上した。	前橋市教委 1980
S56 (1981)	第7次調査	金堂の規模の確認、回廊の確認	塔の基部について11.4mの範囲で柱頭跡を検出。南北平洋室と當寺御宝の出土した。金堂の規模・回廊については判明しなかつた。	前橋市教委 1982
H9 山王庵寺等 (1997)	1通路	(下水管理設に伴う調査)	金堂・講堂基壇より南側の築跡と測定される築堤土、さらに多量の埴輪が出土した瓦類なりを確認。講堂は金堂・塔の北30mから検出され、東西30m、南北22m以上の面積が推定された。金堂については東西4m、南北22mを超える面積になることが判明した。	前原1998
H10 山王庵寺等 (1998)	1通路	(下水管理設に伴う調査)	寺院通の通槽は検出されなかつた。	
H11 山王庵寺等 (1999)	IV、V道跡	(下水管理設に伴う調査)	平成9年1月検出された帶田出土土器を調査し、多くの丸に混じり女性像や寺院の面影など(8×11度角)、8件の帶田器が出土した。松田川の河床段階の分析により、8件は第2回土器群の作陶器、8件は第3回土器群の作陶器であることを確認。また、講堂南側の面影を検出。3次調査の「礎石群B」がこれにつながる東面面影であることが判明した。寺院通にて北側を区画する可能性がある通槽を検出した。遺物は瓦類織籠・系縄瓦など	前橋市埋文 2000
H18 範囲内確認 (2006)	講堂・回廊東側・寺域北側の確認	講堂・回廊東側・寺域北側の確認	講堂の東側面積が東西31.0m、南北24.5mであることを確認。また、講堂南側の面影を検出。3次調査の「礎石群B」がこれにつながる東面面影であることが判明した。寺院通にて北側を区画する可能性がある通槽を検出した。遺物は瓦類織籠・系縄瓦など	前橋市教委 2007

前橋市教育委員会では平成12年度に、これらの調査成果を受け山王庵寺および関連遺跡を調査し、保存と整備の方策を立てることを目的に「山王庵寺等調査委員会」を設置した。以降、17年度まで計6回にわたり、文化庁・県教育委員会の指導や専門家・学識経験者等の協力を得て委員会を開催し、既出資料の集約、調査から保存・整備までの基本構想、確認調査計画の策定などを行った。平成16年度の委員会では、「山王庵寺範囲内確認調査計画」が審議され、これに基づき平成18年度より5ヵ年計画の調査が実施されることになった。

18年度は、①講堂範囲の確定、②回廊東側の確認、③寺域北限の確認を調査目的とし、9ヶ所にトレンチを設定し、674m²を調査した。この調査では、講堂範囲が東西31.0m、南北24.5mであることが確認され、回廊については、講堂に取り付く北面回廊東側および東面回廊が明らかとなるなどの成果があった。なお、調査終了後の平成19年度に、史跡の追加指定と名称変更を申請し、平成20年3月28日付けで官報公示された。この結果、史跡名称は「山王庵寺跡」となり、指定面積は8,277.25m²に拡大した。

I 調査に至る経緯

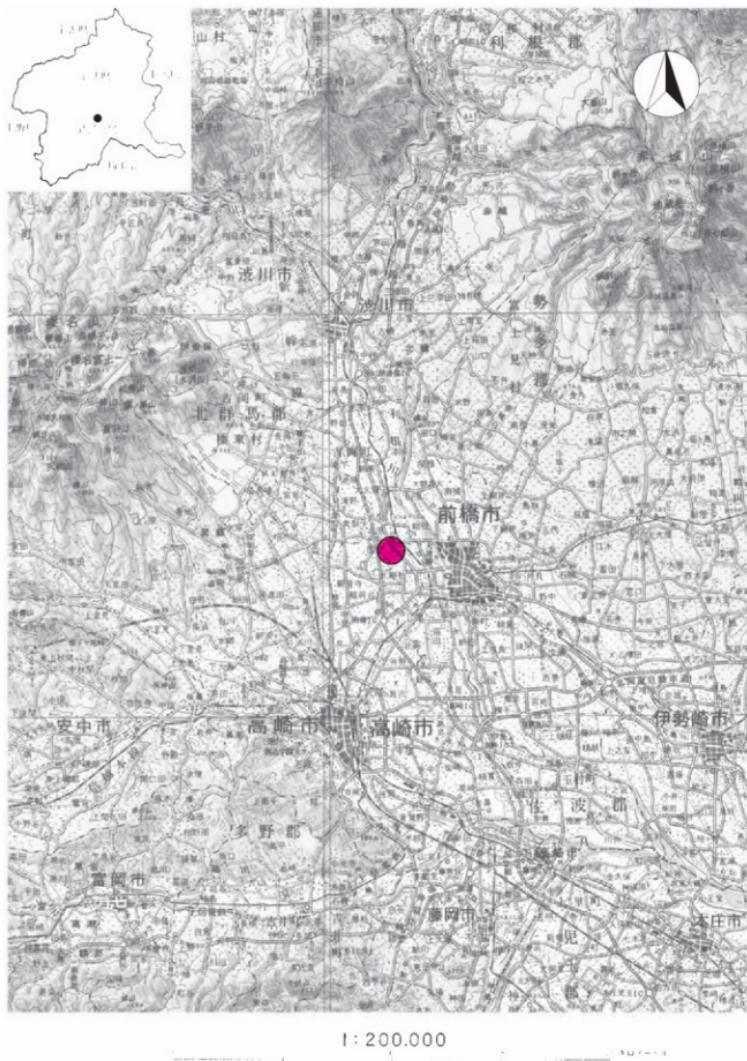


Fig. 1 山王庵寺位置図

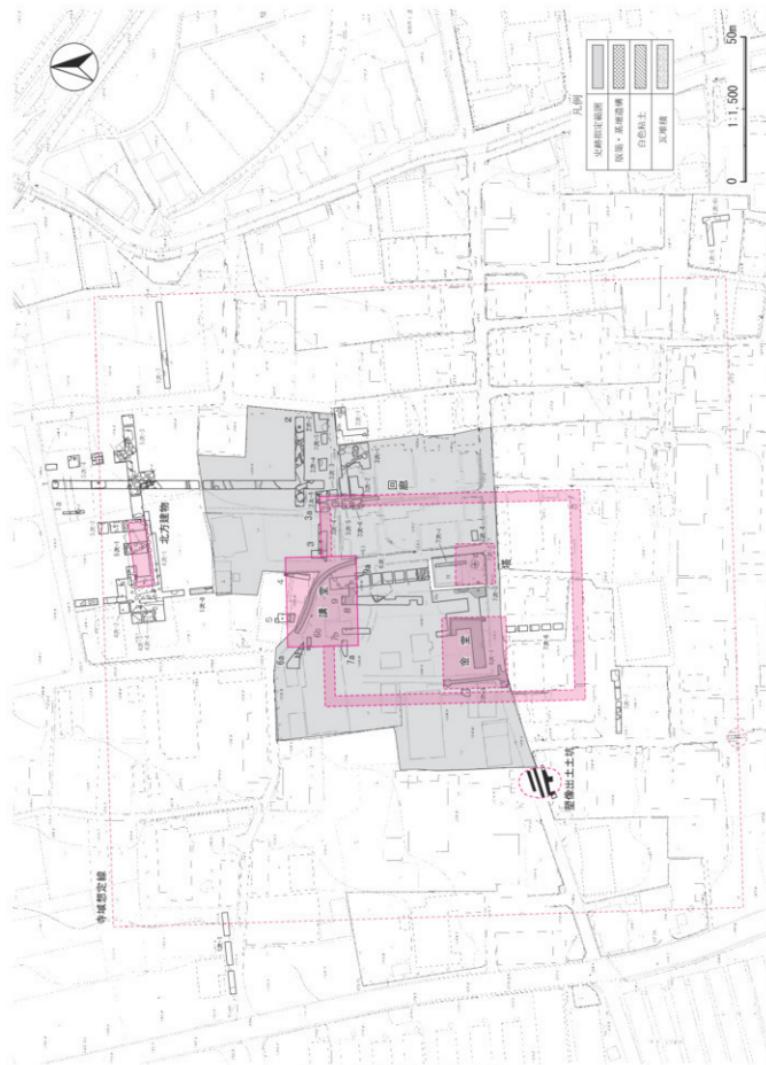


Fig. 2 推定伽藍配置と過年度調査

II 遺跡の立地と環境

平成19年2月23日の調査委員会において、18年度の調査報告とともに19年度の調査計画が協議された。これにより19年度調査では、①金堂範囲の確認、②西・南面回廊の確認、③寺域の確認を目的として10ヶ所にトレーンチを設定し、計405mあまりを調査することとなった。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

山王庵寺は、前橋市街地の西方、利根川を挟んで約4kmの地点、総社町総社2408番地ほかに所在する(Fig. 1)。前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾を経て関東平野を望むところに位置する。地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という4つの地域に分けられる。前橋台地は、約24,000年前の浅間山爆発によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層(水成)から成り立っている。前橋台地の東部は広瀬川低地帯と直線的な崖で区切られていて、台地の中央には現利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。

遺跡地は、この相馬ヶ原扇状地から前橋台地への移行地帯に位置し、標高は127~130m付近にある。遺跡地北東縁には八幡川が、西侧約300mには牛池川が自然地形に沿って北西から南東に向かって流下している。遺跡は両河川に挟まれた東西幅約600mの微高地にあり、これらの河川との比高差は3~5mを測る。遺跡周辺の微地形は北西から南東へ向かって緩やかに傾斜する。

現在、遺跡地周辺には、西へ約0.6kmの地点に関越自動車が南北に走り、南側には国道17号が、東側にはJ R上越線が走る。遺跡地東側には八幡川を隔てて吉岡バイパス(通称産業道路)が南北に走り、この道路沿いには大規模小売店やオフィスビルの進出が著しい。ただ、幹線道路から少し外れた本遺跡地は、周囲に田畠が広がり、住宅地には古くから残る養蚕農家が立ち並ぶという静かで落ち着いた環境である。

2 歴史的環境

山王庵寺周辺の元總社・総社地区は、古代上野国の中心地として歴史的に重要な役割を果たしてきた場所であり、多数の遺跡が存在する。本遺跡の北東には総社古墳群があり、また南西1.2kmには上野国分寺、その東0.5kmには国分尼寺、さらにその南東側には上野国府推定地がある。以下、各時代の様相について、周辺の遺跡分布から概観してみたい。なお、本文中の遺跡名の前に付した数字は、Fig. 3に対応するものである。

縄文時代 間越自動車道建設に伴い調査された高崎市国分町～北原町にかけての(5)上野国分僧寺・尼寺中間地域(以下、中間地域)では、前期～晚期にわたる遺物が出土し、中期(加曾利E)を主体とする集落跡が検出されている。このほか(9)北原遺跡では中期後半頃の土坑が検出されている。区画整理に伴い近年継続的に調査が行われている(26)元總社苔海遺跡群でも、前期(諸磕b)および中期(加曾利E)の住居跡が検出されている。これら、周辺で確認されている遺構・遺物は前期・中期のものが主体であるが、元總社公民館建設に伴う調査(平成18年度)では、晚期(大洞BC～C2)の住居跡が検出されており、この地域の縄文文化を考えるうえで重要な資料といえる。

弥生時代 弥生時代の調査例は少ない。中間地域では後期集落のほか、方形周溝墓2基が検出されている。(10)下東西遺跡でも後期の住居跡が検出されている。また、当時の稻作の様子を示す(31)日高遺跡があり、水田跡のほか集落・方形周溝墓等が検出されている。

古墳時代 山王庵寺の北から東にかけて總社古墳群がある。この地域の首長墓と考えられ、5世紀末～6世紀末にかけて前方後円墳5基（遠見山古墳・王山古墳・二子山古墳など）が展開し、7世紀には愛宕山古墳（前半）・宝塔山古墳（第3四半期）・蛇穴山古墳（第4四半期）と3基の巨大な方墳が続く。

(14)二子山古墳は全長92mと古墳群中の最大規模を誇るが、この地方では最終段階の前方後円墳の1つである。7世紀最初に出現する(15)愛宕山古墳は巨大な横穴式石室の中に刳抜式家形石棺を安置する。(16)宝塔山古墳では長大な截石積横穴石室の玄室に同じく刳抜式家形石棺が安置される。石棺の脚部は仏教文化の影響といわれる格狭間の手法で飾られている。(17)蛇穴山古墳は最終末の横穴式石室の古墳で、玄室壁面は一枚石で造られ、宝塔山古墳の石室と同様漆喰を塗布した痕が残っている。巨大な方墳という墳形、家形石棺の安置、石室石材の加工技術、漆喰の塗布などこの地方の他の古墳群には見られない特別なもので、中央政権と被葬者との強いつながりが考えられる。また、石材の加工技術では、山王庵寺の石造物の加工技術との共通性も考えられ、古墳の築造と寺院の建立が併行して行われたとも言われている。古墳の被葬者であり、山王庵寺の建立者である上野地方の氏族としては上毛野氏の名がうかびあがってくる。（右島1994・津金沢1983）

これに関連する集落跡関係では中間地域や(6)鳥羽遺跡などを中心に前期～後期の集落形成が見られる。また本遺跡の西側、八幡川の対岸に位置する(30)大屋敷遺跡では後期（6世紀～7世紀）にかけての集落が確認されている。

奈良・平安時代 奈良・平安時代に至ると、上野国府、国分僧寺、国分尼寺の造営と相まって、本地域は古代の政治・経済・文化の中心地としての様相を呈し、周辺一帯は遺跡数・内容において最も充実する。

寺院関連では、(1)本遺跡のほか、(2)上野国分僧寺跡、(3)上野国分尼寺跡がある。国分僧寺は大正15年に国指定史跡となり、発掘調査は昭和55年12月から行われた。調査では、塔跡、金堂跡、築垣、堀等が確認された。国分尼寺の調査では、昭和44・45年に推定中軸線上のトレンチ調査が行われ伽藍配置が推定できるようになった。また、国分僧寺・尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、中間地域では、当時の大規模な集落跡や掘立柱建物跡群が検出されている。

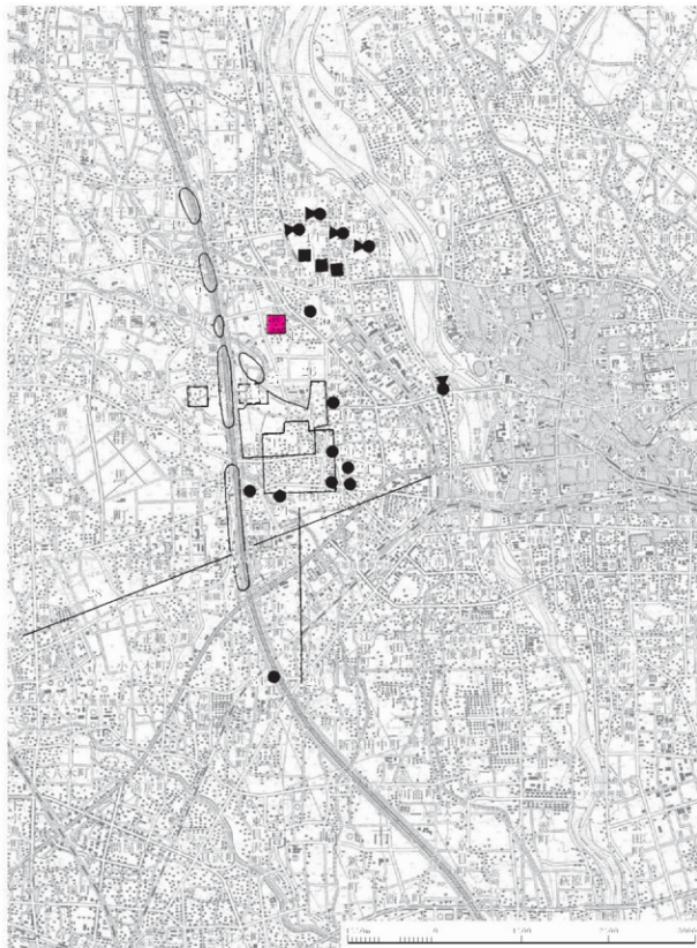
国府に関連する遺跡は、總社神社旧地を中心とする上野国府推定域周辺に広がる。県下最大級の掘立柱建物跡が検出された(23)元総社小学校校庭遺跡や、「國庭」・「曹司」・「國」・「邑崩」等と書かれた墨書き土器や人形が出土した(20)寺田遺跡、律令期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴が検出された元総社宅地遺跡がある。また、大規模な東西方向の溝跡が検出された(19)閑泉橋遺跡や元総社蒼海遺跡群（平成17・18年度の調査）と、南北方向の溝跡が検出された(22)元総社明神V遺跡の調査成果により、国府域の東北外郭線が想定されるに至った。さらに、周辺遺跡からは官衙で用いたと考えられる円面鏡、巡方（腰帯具）、綠釉陶器も出土し、国府について考えるうえで貴重な資料となっている。

また、群馬県や旧群馬町の調査等により、本遺跡から約1.5km南の地点にN-64°E方向の(28)東山道（国府ルート）があることが推定されている。さらに、(29)推定日高道は、日高遺跡で検出された幅約4.5mの道路状遺構を国府方面へ延長したものである。これらは、当時の交通網を物語る重要な遺構である。

この時期、集落も急増し中間地域や鳥羽遺跡、国分境遺跡、中尾遺跡などで大集落の形成が見られる。近年継続的に調査が行われている元総社蒼海遺跡群でも多数の集落跡が調査されている。これらは、国府域およびその周辺一帯に広がる「国府のマチ」として捉えることができる。

中世 永享元年(1429)、上野国守護代の長尾氏によって古代国府跡に築かれた蒼海域は城郭としての機能を有し県内でも最古級に位置づけられる。さらに、県下最初の城下町を形成したと考えられている。この蒼海域の開張りは、国府の堀削と関係が深いと考えられている。

II 道路の立地と環境



1. 山王庵寺
2. 上野国分僧寺跡
3. 上野国分尼寺跡
4. 推定上野国府
5. 上野国分僧寺・尼寺中間地域
6. 鳥羽道路
7. 中尾道路
8. 国境道路
9. 北原道路
10. 下東西道路
11. 稲荷山古墳
12. 大小道山古墳
13. 達見山古墳
14. 二子山古墳
15. 愛宕山古墳
16. 宝塔山古墳
17. 蛇穴山古墳
18. 王山古墳
19. 関泉橋遺跡
20. 寺田遺跡
21. 大友屋敷II・III
22. 元経社明神V遺跡
23. 元経社小学校校庭
24. 天神遺跡
25. 弱勒遺跡II
26. 元経社蒼海道路群
27. 上野国分尼寺北辺道路
28. 推定東山道
29. 推定日高道
30. 大里敷道路
31. 日高道路

Fig. 3 周辺道路

III 調査方法と経過

1 調査方法

平成19年度の発掘調査は、①金堂範囲の確認、②西・南面回廊の確認、③寺域の確認を目的に10ヵ所でトレント調査を行った。総調査面積は405.2m²である（Tab. 2）。調査は、調査方針を定めた「山王庵寺範囲内確認調査計画書」および、これに沿って作成された「調査基準」に基づいて行った。以下、調査方法について要点を記す。

グリッド設定（Fig. 5） 調査区のグリッド設定は以下のとおりである。①単位は4 m四方とする。②国家座標第IX系（旧日本測地系）を用い、X = +44,800、Y = -77,200を基点（X 0、S 0）とする。③東から西へ4 mごとにXの数値が増大し（X157、X158、X159……）、北から南へ4 mごとにSの数値が増大する（S 44、S 45、S 46……）。④各グリッドの呼称基点は北西杭とする。

なお、このグリッド設定は、本遺跡から南に1 kmほど離れた場所で、近年、区画整理に伴い纏続的に調査が行われている元絆社蒼海遺跡群のグリッド設定と共通するものであり、山王グリッド（X 0・S 200）が蒼海遺跡群グリッドの基点（X 0・Y 0）である。

トレント調査 各トレントの設定幅は、掘立柱建物の柱穴間隔を考慮し、原則3 m幅とした。トレント名は、原則として調査順に数字で呼称することとし、18年度からの通し番号とした。

遺構の確認 遺構確認については、基本層I層およびII層直下で行い、その後、山王庵寺遺構面が存在するIII層（Hr-FP-As-C 混土層）を細分しながら確認することとした。遺構の確認にあたって、必要な場合はサブトレントを設定することにし、サブトレントの規模は遺構保護のため必要最小限とした。

測量 遺構平面図については縮尺1/20を原則とし、必要に応じて1/10～1/50の縮尺を適宜使用することとした。また、土層図についても縮尺1/20とし、遺構毎の図面とは別に、グリッド杭のあるトレント壁面すべてを作成することにした。

出土遺物の取り上げ 遺構毎を原則とし、遺構に属さない遺物は4 mグリッド単位で記録を作成し取り上げることとした。なお、状況に応じて4 mグリッドをFig. 4のように4分割し、2 mの小グリッド一括で取り上げた遺物もある。小グリッドの呼称は、北西から反時計回りでA～Dとした。なお現位置を保つ礎石等、施設を構成する遺物については、原則として現状保存することとした。

写真撮影 遺構の写真撮影については、35mmフィルム（モノクロ、カラーリバーサル）およびデジタルデータを常時使用した。また、必要に応じて6×9サイズフィルムを使用した。空中写真撮影には6×6サイズフィルムを使用した。

埋め戻し 調査終了後は、今後の調査と区別できるように石灰を散布してから埋め戻しを行った。

Tab. 2 調査区の面積と調査目的

トレント	調査面積 (m ²)	調査目的
10	93.1	寺城北辺の確認・南北方向の地形確認
11	25.8	寺城北辺の確認
12	48.9	金堂北・東側範囲の確認
13	14.2	金堂南側範囲の確認
14	23.4	金堂北側範囲の確認
15	22.2	西面回廊の確認
17	56.6	金堂南側範囲の確認・南面回廊の確認
18	14.0	西面回廊の確認
19	59.0	南面回廊の確認
20	48.0	寺城南辺の確認
計	405.2	

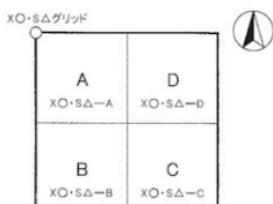


Fig. 4 2 m小グリッドの呼称

III 調査方法と経過

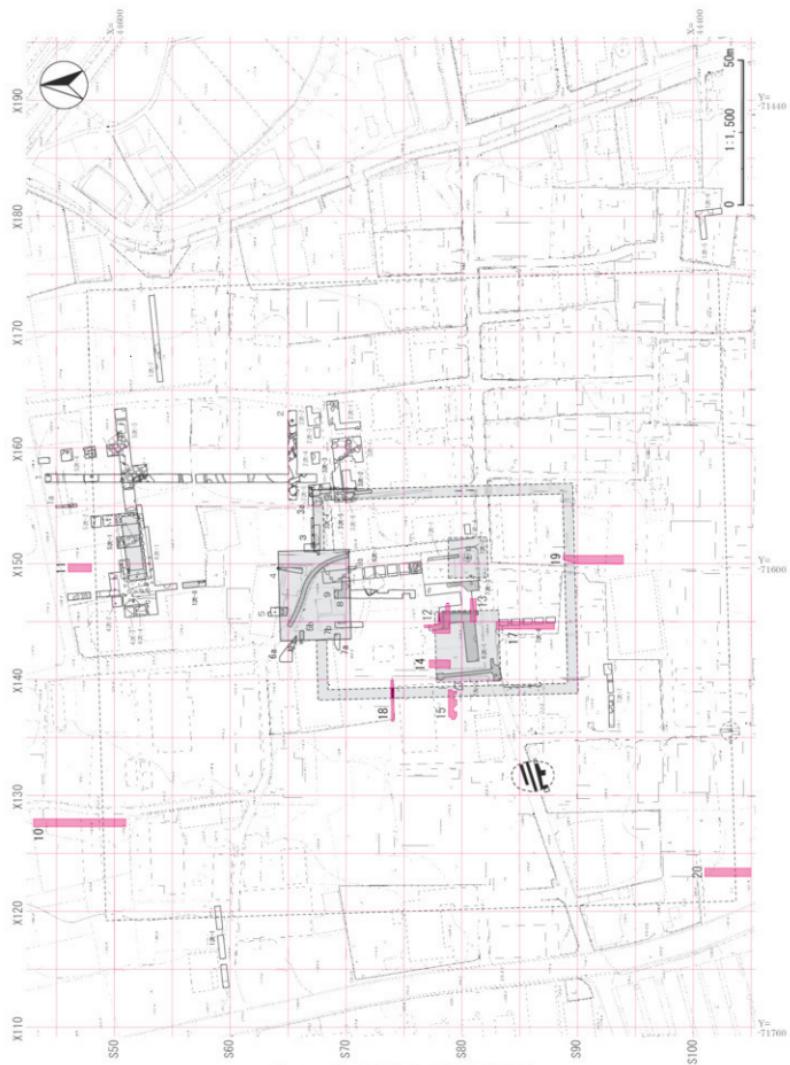


Fig. 5 グリッド設定図と平成19年度調査区

2 調査経過

本年度の調査は9月中旬から開始し、12月下旬に終了した。以下、調査経過を毎月にまとめた。

9月 11日、兩模様の中15トレンチの調査を開始した。個人宅の玄関先のため人力での掘削となつた。統いて13日からは、北側10・11トレンチの表土掘削を重機（バックホー0.25m³）で行った。10トレンチでは50cm程度堆積する表土を剥いた段階で、平安時代の竪穴式住居跡群が確認された。18・19日には19トレンチを小型バックホーで掘削開始。確認面までは約30cmであった。プラン確認の結果、南半部に多数の瓦片・土器類等を作う土坑状の落ち込みが検出された。各トレンチの掘削・遺構確認と平行して、15トレンチの調査を継続した。結果、調査区西側に礎石据付跡（根石）が検出され、出土位置から回廊建物に伴うものと推定された。東側では、平安後期の廃棄土坑群等を検出し、多量の瓦片を取り上げながらの作業となつた。

10月 15トレンチは10日に全景写真撮影を行い、翌11日に埋め戻しを行った。15～16日にかけて12・14・18・20トレンチの掘削を重機（バックホー0.13m³）で行った。金堂調査区12・14トレンチでは約20～30cmの表土下で版築を検出し、これの断ち割り調査を行った。またこの版築層を切る庶施期の整地層および土坑等が検出され、多量の遺物を包含することから調査に時間を要した。西側回廊の18トレンチでは、15トレンチの礎石据付痕につながると思われる根石列を検出した。19トレンチでは瓦溜りの掘り下げを継続し、出土する多量の遺物と格闘する日々が続いた。26日には金堂南側の13・17トレンチの掘削をバックホー（0.25m³）で行い、やはり金堂の版築層が確認できた。これらの作業の合間に見て、10・11トレンチで竪穴式住居跡の掘り下げを中心とした作業を継続した。

11月 主に12・14・17～20トレンチの調査を継続した。20トレンチではプラン確認の結果、住居跡4軒のほか溝跡が検出された。12トレンチでは、版築層が想定より延びたことから調査区の北側と東側を拡張し、調査を行った。この結果、金堂北・東側の範囲を把握することができた。12トレンチ北側拡張部や14トレンチ北半部では、平安時代を中心とする土坑群（廃棄土坑）等が多数検出され、瓦片を中心とする遺物を多数出土することから、調査に時間を要した。また、17トレンチ南側と18トレンチ東側で新たな建物跡がそれぞれ1棟検出され、これの断ち割り調査を行った。11月下旬には主要な調査区について、一部図面・写真を残すほかは、ほぼ作業を終えたため、19日に調査部会、20日に調査委員会（第9回）、さらに23日には、現地説明会を開催した。現地説明会は寒風のなかでの開催となつたが、県内外から355名の見学者があり、成功裡に終わった。また、21日には、ラジコンヘリによる遺跡全景撮影を行った。この後、一時中断していた10・11トレンチの調査を再開し、最終的に住居跡9軒のほか溝跡等を確認し調査を終了した。

12月 最終段階を迎えて、各トレンチでの測量・写真撮影などを中心とした作業が続けられた。19日から18トレンチの埋め戻しを開始し、その後順次ほかの調査区も埋め戻しを行った。25日には最後に残った20トレンチの図面・写真を終え、26日に埋め戻しを行いすべての作業を終了した。

今年度の調査で検出された遺構は、最終的に下表のとおりとなった。

Tab.3 平成19年度検出遺構の概要

トレンチ	寺院施設等の確認	その他の検出遺構			
		住居跡	土坑	溝	ビット
10	—	8	0	2	0
11	溝跡（18年度調査1・1aトレンチで検出されたW-1号溝の西側延長部分）	1	0	1	0
12	金堂（6次調査区を再調査。基礎版築層を検出、北・東側の範囲を確認）	0	4	0	31
13	金堂（6次調査区を再調査。基礎版築層を検出、東側の範囲を確認）	0	3	0	0
14	金堂（基礎版築層を検出、北側の範囲を確認）	0	4	0	3
15	西面回廊（礎石据付痕を検出）	0	7	0	0
16	金堂（南側の整地層の広がりを確認）、建物跡（調査区南側で版築層を検出）	0	1	0	3
17	西面回廊（礎石据付痕を検出）	1	1	0	1
18	西面回廊（礎石据付痕を検出）	0	4	0	2
19	一部に版築層を確認（南面回廊か）、土坑（瓦溜り）	4	0	2	0
20	—	—	—	—	—

IV 基本層序

19年度は、寺域北側の調査（10・11トレンチ）、金堂および西・南側回廊を主とする主要伽藍部の調査（12～19トレンチ）、寺域南側の調査（20トレンチ）を行った。山王庵寺周辺の層序は模式図で示すとおりで、基本的にI～VI層が堆積する。これらの層中にはいわゆる指標テフラが含まれ、II層にAs-B軽石（1,108年、浅間山供給）、III層にはHr-FP軽石（6世紀中葉、榛名山二ツ岳供給）、As-C（4世紀初頭、浅間山供給）が認められ、As-CはIV層に主体的に含まれる。

As-B純堆積層（II層）は、今回調査した場所では見られず、現耕作土やI層中に混入した状況で確認された。III層は古墳後期～奈良・平安時代の遺物包含層であり、山王庵寺の遺物および造構構築面もこの層中にある。ただ、この層の形成要因は様々であったとみられ、形成時期も古墳後期～奈良・平安時代と幅をもつことから、調査区によって遺物の包含状況や混入物に差異がみられる。例えば、金堂周辺の12～14トレンチでIII層としたものは、多量の瓦片を含み、炭化物や焼土粒が混入する。また、10世紀以降の土器片が出土していることから、平安時代後期に形成された層と考えられる。色調や土質にそれほど差異が無いため、一部の調査区で認められる層位を遺跡全体に敷衍することは難しいが、今後、創建～廃絶期に至る過程で形成されたこの層の細分化ができるれば、造構の変遷が捉えやすくなるものと思われる。IV層はAs-C軽石を多量に含む黒色土で、古墳時代前期に形成されたと考えられ、山王庵寺を含む奈良・平安時代の造構調査時の指標（地山）となる層である。V層は、VI層（總社砂層）への漸移層で、上部の黒色土から下にいくにつれ黄褐色土（場所により褐色粘質土）へと漸移する。VI層は總社砂層と呼ばれる基盤層であるが場所により様相が異なり、10トレンチではロームに近い色調・土質で、

ほかの調査区では明褐色もしくは白色に近い明褐色灰土を呈す粘質土である。後者は、堆積時に水の影響を強く受けたものと思われる。各トレンチの土層堆積状況は柱状図のとおりである。

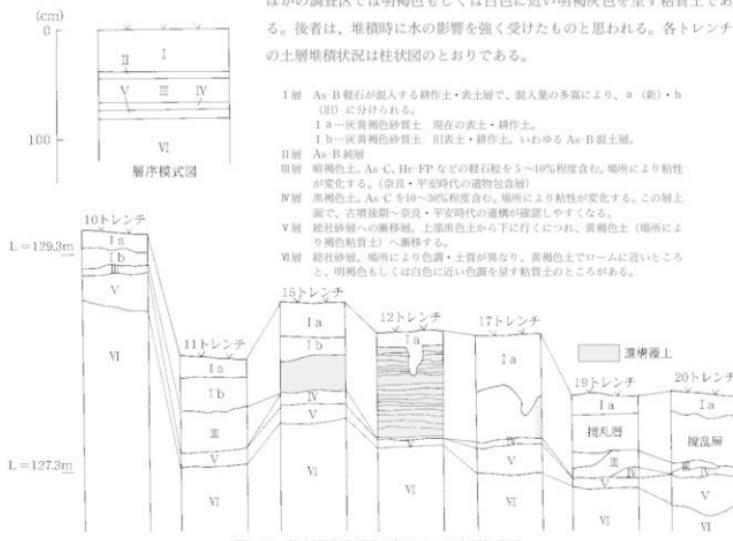


Fig. 6 基本層序模式図と各トレンチ土層柱状図

V 伽藍の調査

1 金 堂

(1) これまでの調査

昭和54年度調査（第5次調査） 昭和54年度の第6次調査（以下、6次）で塔の西側に基壇建物跡が検出された。この調査では、基壇の北・東端が確認され、基壇規模は南北16.6m以上、東西11.7m以上、塔基壇との間隔は、11.4m以上と推測された。この建物跡はその配置から金堂跡と考えられ、東に塔、西に金堂が並ぶ法起寺式伽藍配置をとることが判明した（前橋市教委1980）。

平成9年度調査 平成9年度には下水管の埋設に伴い6次調査区の西側の道路が調査された。この調査でも金堂の版築が確認され、金堂の規模は東西24m以上、南北22m以上になることが推測された（前原1998）。この調査では、北側の範囲が6次調査のものより2m程度広がる結果となった。

(2) 調査の概要

目的 金堂の範囲確認を目的とし、とくに6次と平成9年の調査で金堂基壇北側の範囲が異なることから、これを再確認することを主目的とした。

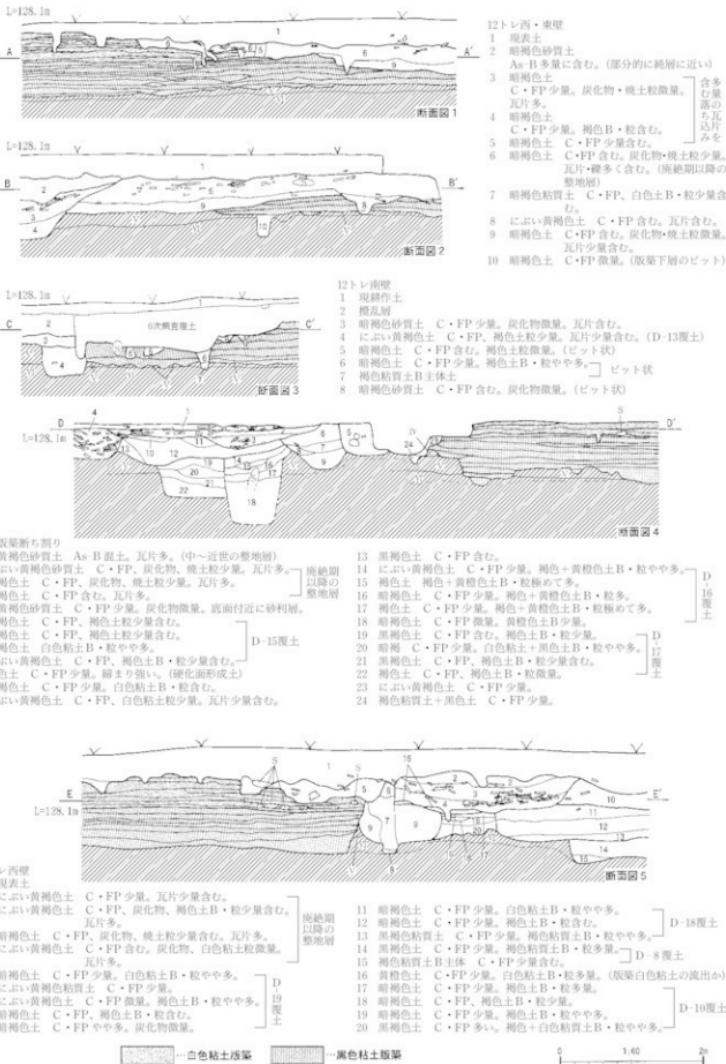
調査区の設定 日枝神社の西側に隣接する場所は、現況、民家の庭と畑になっており6次で調査された場所である。その南には東西の道路、西には平成9年に調査された南北の道路、さらにその西は民家の畠が道路に沿って建っている（Fig.7）。このように金堂周辺は調査可能な場所が限られており、そのなかで4ヶ所に調査区を設定した。まず、北側の範囲を再確認するため、6次調査区と平成9年度調査区の間を調査し（14トレンチ）、さらに6次調査区を再調査することとした（12トレンチ）。12トレンチの調査の結果、東側の範囲についても再確認する必要が生じたため、13トレンチを設定した。また、南側の範囲を確認するため17トレンチを調査した。

遺構 すべての調査区から金堂の基壇に伴う版築土を検出した。調査の結果、基壇規模は東西22.0m、南北16.4m以上と推測され、北側の範囲は6次調査より2.2mほど広がる結果となった。版築層は大きく2つに分かれ、上部に白色粘土、下部に黒色土を用いる。6次調査では金堂基壇について、掘込地業を行わず地山に直接基壇を築いているとしているが、今回、13・14トレンチの調査で掘り込み地業の立ち上がりを確認し、基壇は掘り込み地業を伴うことが判明した。ほかのトレンチの調査状況も勘案すると、掘り込み地業部分は黒色土で版築し、基壇土に白色粘土を使用しているものと思われる。

基壇上面および周囲はかなり削平されており、礎石の据付痕跡など金堂建物に関する遺構は確認できなかった。基壇外装については6次と同様、今回の調査でも基壇周辺から角閃石安山岩の切石片が多数出土しており、これを用いていたことは間違いない。また、一部13トレンチで地覆石の据付痕跡かと思われる掘り込みが、土層断面で確認できた。そのほか、各トレンチからは、建物の造営時に土取りを行ったと思われる土坑や廃絶期以降の土坑・ピット等が検出された。

出土遺物 金堂版築層の周囲からは、建物の廃絶以降、整地のため片付けられたと思われる瓦が多量に出土した。出土瓦はすべて2次的な堆積を示すもので、屋根から落下したような状況での出土はみられなかった。6次調査でも金堂の周囲から同様の瓦の出土状況が報告されており、これらの中に、「放光寺」や「方光」といった文字瓦が含まれていた。今回の調査でも、「方光」と押印された文字瓦が出土している（Fig.34-20）。軒瓦は、軒丸瓦が17点、軒平瓦が5点出土した。軒丸瓦では、山王庵寺では初見となる国分寺B201aと同範の瓦が出土した（Fig.26-19）。また、これらの瓦に混じり10~11世紀代の土器が出土している。

V 伽藍の調査



(3) 各トレンチの状況と検出遺構

①12トレンチ (Fig. 8 ~10, PL. 2・3)

金堂範囲北・東側の確認のため、48.9m²を調査した。調査区の大部分が6次調査区と重複し、この時調査された基壇の状況を再確認することを目的とした。結果、金堂基壇に伴う版築層、これを切る土坑・ピット等が検出された。

金堂基壇 10~20cm程度の表土下で白色粘土版築層を検出し、6次調査で確認されている金堂基壇の北・東縁辺および北東隅部、また、基壇北側の段階と推定された白色粘土の張り出しを再確認した。この張り出し部分にあたる調査区の西壁際で基壇の断ち割りを行ったところ、以下のことが判明した。

①下部の黒色土版築は上部の白色粘土版築より北側に延びる。

②白色粘土の終わりは、金堂建物廃絶期の整地と考えられる瓦片や礫を多量に含む土層（断面図1—6層）によって切られる。

③白色粘土の張り出した部分は段階ではなく、白色粘土が廃絶期の整地による削平を受けずに部分的に残存したものと思われる。

これらの状況から基壇の周囲は、金堂建物廃絶以降に削平・整地されたものと考えられ、本来の基壇北縁は6次で確認されたものより北に延びるものと考えられる。

北側範囲について、白色粘土版築層はS77グリッドラインから南へ3.9mのところまで延びていることが確認できた。黒色土版築層は、さらに北へ2.2mほど伸び（断面図2）、白色粘土の範囲より広がることが分かった。東側範囲についても南壁際で断ち割りを行い、黒色土版築層が白色粘土より伸びている状況が土層断面で確認できた（断面図3）。東側の黒色土層は、X146グリッドラインの東1.0mのところでD-13号土坑で切られ、その東には確認できなかつたため、この範囲に収まるものと考えられる。

版築層は最大で20層、厚さ85cmほど残存している。明確な掘り込み部は確認できなかつたが、下部の版築土は掘り込み地業に伴うものと思われ、地山V層（暗褐色粘土質）まで掘り込んだ後版築を行っている。底面はほぼ平坦だが、遺構外側に向かってわずかに上り傾斜となる。底面のレベルは標高127.5m前後で、その上面から厚さ50cmほど黒色土で版築し、標高128.1m付近で一旦平坦面を形成した後、さらに白色粘土を積み上げている。下部黒色土版築層中からは、若干の瓦片が出土している。

その他の遺構 土坑4基（D-11~14）のほか、小ピットを多数検出した。大部分が版築層を掘り込む遺構であり、瓦片が詰め込まれたような状況で出土していることから、金堂建物廃絶以降の片付け穴と思われる。調査区北側に検出されたD-14号土坑（断面図Fig.10）は、ほかの土坑・ピットとは性格が異なり、しっかりと深い掘り方で、掘立柱穴もしくは土取り跡、堅穴住居跡などの可能性が考えられる。規模は東西80cm以上、南北60cm以上、確認面からの深さ90cm

を測る。時期を示す遺物は出土していないが、覆土に瓦片が混入しないことから創建期もしくは創建以前の可能性が考えられる。上面に純層に近いAs-B輕石層やその下に多量の瓦片を含む層が堆積するが、本遺構と直接的な関係はない。

②13トレンチ (Fig. 8・9, PL. 4)

金堂範囲東側の確認ため、第6次調査区の南壁および6次で基壇の断ち割りを行った部分の検出と土層断面の

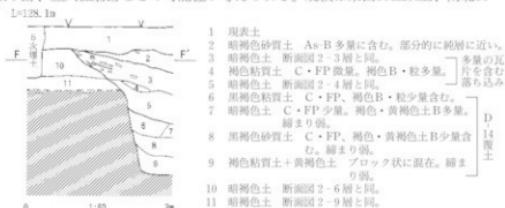


Fig.10 12トレンチ D-14号土坑断面図

V 伽藍の調査

再確認を目的とし、14.2m²を調査した。結果、金堂版築層のほか土坑を3基検出した。

金堂基壇 6次調査で入れた東西方向のサブトレンチで土層断面の確認を行った結果、版築層限部は搅乱されていたものの、地業の掘り込み部が確認できた（断面図4）。旧地表に比較的近いと考えられるⅣ層（As-C 軽石を含む黒色土）が掘り込み面として残存している。ここから深さ50cm程度、VI層（明褐色粘質土）上面まで掘り込んだ後、黒色土で2～3層しきならしをしてから版築を行っている。6次調査では、この底面付近に堆積する軽石混じりの暗褐～黒色土層を地山と考え、この上に直接基壇を築いていると解釈している（前橋市教委1980）が、今回の調査でこの層も上部版築層と一緒にものであることが確認できた。版築層は最大で12層、厚さ85cmほど残存している。掘り込み底面は若干の凹凸がみられるものの標高127.4m前後で、ほぼ平坦である。その上に厚さ60cmほど黒色土で版築し、標高128.1m付近で平坦にしてから、白色粘土を積み上げている。

基壇外装について、版築層限部で黒色土版築層を掘り込む層（断面図4-23・24層）があり、地覆石の据付跡の可能性がある。ただ、調査区が狭いため平面での確認はできなかった。また、他のトレントと同様、版築の周囲には建物廃絶以降に片付けられたと思われる瓦が堆積しており（断面図4-2～3層）、これにより金堂基壇周辺の旧地表面はことごとく削平されているものと思われる。

その他の遺構 土坑を3基検出した（D-15～17）。出土遺物や重複関係からD-15は廃絶期以降、D-16・17は寺院下層の遺構とみられる。D-15号土坑は隅丸方形で、規模は東西90cm、南北85cm、深さ30cmを測る。D-16号土坑は方形で、規模は東西90cm、南北56cm以上、深さ70cm。D-17号土坑は方形で、東西85cm以上、南北35cm以上、深さ50cmを割り、東側をD-16に切られる。D-17は堅穴住居跡の可能性も考えられる。

③14トレント（Fig. 8・9、PL. 5・6）

金堂北側範囲の確認ため、平成9年度に調査された道路部分の調査区の東側に調査区を設定し、23.4m²を調査した。結果、金堂版築層のほか土坑を5基検出した。

金堂基壇 40cmほどの表土下で、白色粘土版築層を検出し、西壁際で南北方向の断ち割りを行った。結果、13トレント同様、掘り込み地業の立ち上がり部が確認できた（断面図5）。版築層は最大14層、厚さ90cmほど残存している。版築の工程は他のトレントと同様で、地山をVI層（明褐色粘質土）まで掘り込んだ後、黒色土で50～60cm程度版築し、上面を平坦にしてから白色粘土を40cm以上積み上げる。掘り込み底面は標高127.3m前後でほぼ平坦、黒色土上面は標高128.1m前後である。掘り込みは、S78グリッドラインの南1.1m付近で立ち上がる。上部の白色粘土層はその立ち上がり付近に掘り込まれた土坑（D-19）によって切られ、その北側には続かない。また、版築土中からは瓦片が数枚出土しており、掘り込み底面付近からも平瓦片が出土している。

基壇上面および周辺はかなり削平が進んでおり、礫石や基壇外装の痕跡等は確認できなかった。基壇の周囲はほかのトレント同様、廃絶期の整地とみられる層が堆積しており（断面図5-2～5層）、これにより基壇周縁および旧地表は削られているものと考えられる。

その他の遺構 土坑状の遺構を5基検出した。これらは、時期的には寺院創建以前の遺構：D-8・9、9世紀頃：D-10、廃絶期（平安時代後期）以降：D-18・19に分かれる。

D-8号土坑は調査区北側から検出され、確認部分で東西170cm以上、南北100cm以上、深さ33cmを測る。D-9・18と重複し、新旧関係はD-9→D-8→D-18の順である。覆土中の遺物は少なく、瓦片は含まない。褐色粘質土層（VI層）を掘り込んでおり創建時の土取り跡、もしくは寺院下層の堅穴住居跡の可能性も考えられる。D-9号土坑は隅丸方形で底面が柱痕状に浅く窪む。東西60cm、南北56cm、深さ60cmを測る。掘り方の形状・向きから、寺院下層の掘立柱穴の可能性が考えられる。D-10号土坑は、北側をD-1、南西部をD-19に切られる。現状で東西175cm以上、南北100cm以上、深さ40cmを測る。覆土中から瓦片に混じり平底の土師器（Fig. 52-3）などが出土しており、時期はこれらの出土遺物から9世紀頃と考えられる。D-18号土坑は出土遺物（Fig. 52-4）や掘り込み面から寺院廃絶期（平安時代後期）の遺構とみられる。規模は東西180cm以上、南北210cm以

上、深さ46cmを測る。D-19号土坑は金堂版築層を切る遺構であるがサブトレンチ壁面での確認のため、詳細は不明である。検出当初、版築時の板模痕の可能性も考えられたが、プランがサブトレンチ内で収束しておりその東側には続かないため、土坑状の遺構として考えた。

④17トレンチ (Fig. 9・11, PL. 6)

金堂南側範囲および金堂南側施設(南面回廊等)の確認ため、56.6m²を調査した。調査区東側部分は、7次調査区と重複する。金堂版築層のほか、柱穴・土坑・建物跡(版築土)などを検出した。

金堂基壇 調査区北側で版築層を検出した。上部の白色粘土層は確認できず、下部の黒色土のみであった。南限部では掘り込みは確認できず、S83グリッドラインの南2.9m付近で版築より新しい層に切られる形で終わっている。版築層底面の状況は他のトレンチと異なり、整地層(7層)上面から版築を行っている。この整地層は、版築層よりさらに南に拡がっており、S84グリッドラインの南2.2m付近まで確認できた。版築層は最大3層、厚さ25cm残存している。版築層底面のレベルは標高127.6m前後、現存する上面のレベルは127.88mである。底面の整地層下の地山はAs-C軽石を含む黒色土(IV層)で、他の調査区より低いレベルにあることから、創建時の金堂周辺の微地形は南側が低かったと考えられる。このことから南側のみに存在する整地層は、寺院地造成時にこれを平らにするために施工されたものとみられる。遺物の出土状況は他の調査区と同様で、廃絶期の整地層(2層)から多量の瓦片が出土している。この層から出土した土器1点を図示した(Fig.50-17)。

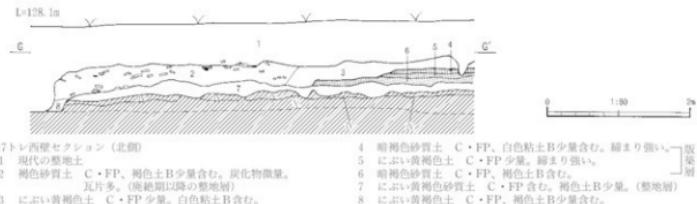


Fig.11 17トレンチ金堂版築土断面図

その他の遺構 調査区北側で柱穴3基(P-1～3)が検出されたほか、南側からは、建物跡(B-3)と土坑(D-1)が検出されている。調査区南側の遺構については、本章第4節で詳述する。

P-1号柱穴は圓丸方形状で北西側が舌状に張り出す。長軸128cm、短軸76cm、深さ100cmを測る。P-2号柱



Fig.12 17トレンチP-1・2号柱穴

V 伽藍の調査

穴は方形状で、長軸108cm、短軸70cm、深さ80cmを測る。P-1・2は重複し、P-2が新しい。いずれも掘り方の形状・向きから、寺院下層の掘立柱柱穴の可能性が考えられる。この場合、P-1の舌状の掘り方は、柱の抜き取り痕と考えられ、埋土後にP-2へ建替えている可能性がある。P-3号柱穴は7次で調査された遺構で、86×86cmの隅丸方形状で、深さ21cmである。底面中央付近が円形に窪む。

(4) 金堂基壇の構造と規模

各トレンチにおける金堂基壇の版築層の確認状況を下表 Tab. 4 にまとめた。

Tab. 4 金堂基壇の版築土層

トレンチ名	位置	版築の限界*	版築の厚さ**		標高 (m)		備 考
			厚さ (cm)	屢数	版築上面***	地山面****	
12トレンチ北	北側	S 77+1.7 (S 77+3.9)	85 (40)	29 (9)	128.44 (128.12)	127.57 (127.94)	上部に白色粘土。下の黒色土版築範囲は白色粘土範囲より広がる。
12トレンチ東	東側	X 146+1.0 (X 145+2.3)	57 (10)	7 (1)	128.2 (128.1)	127.57 (128.1)	上部に白色粘土。下の黒色土版築範囲は白色粘土範囲より広がる。
13トレンチ	東側	X 145+3.3 (X 145+2.6)	85 (20)	12 (3)	128.21 (128.08)	127.34 (128.09)	上部に白色粘土。下の黒色土版築範囲は白色粘土範囲よりわずかに広がる。
14トレンチ	北側	S 78+1.1 (S 78+2.3)	98 (45)	14 (7)	128.45 (128.18)	127.37 (127.93)	上部に白色粘土。下の黒色土とはほぼ同じ範囲。
17トレンチ	南側	S 83+2.9	25	3	127.88	127.63	白色粘土は確認できず。

* 東・西については、Xグリッドライン+○m (東へ)、北・南については、Nグリッドライン+○m (南へ) で表す。下段 () 内は白色粘土。

** 最大値を計測。下段 () 内は白色粘土。

*** 最高値を計測。下段 () 内は黒色土上面の最高値。

**** 最低値を計測。下段 () 内は白色粘土版築下面の最低値。

基壇の構造 各トレンチの調査成果を勘案すると、金堂基壇の構造および基壇築造の工程について以下のことがえる。

- ①創建時の金堂周辺の微地形は南側が低くなってしまっており、基壇築造前に南側に整地を行った。
- ②一部で地山を掘り下げ、全体を標高127.5前後で平坦にしたあと黒色土で厚さ50~60cm程度版築を行った(掘り込み地業)。
- ③黒色土を標高128.0m前後で平坦にした後、その範囲よりひと回り小さい範囲に白色粘土を版築により40cm以上積み上げた(基壇積土)。
- ④基壇外装については、一部13トレンチの断ち割り部分でそれらしき痕跡が認められたが、全体としては削られており不明である。基壇の周囲から角閃石安山岩の切片が出土していることから、これを化粧材として用いていたものと思われる。
- ⑤について、12トレンチの断ち割り部分では、東側・北側とともに下部の黒色土層が上部の白色粘土層より外側に広がることから、掘り込み地業は基壇築成部分より広い範囲に施され、その中に金堂基壇が築成されたと考えたい。
- 規模** 基壇規模については上部白色粘土層の広がりをもとに、東西22.0m、南北16.4m以上と推測される。基壇東側については、一部で基壇外装の痕跡が確認されたことから、6次調査で確認された基壇東縁ラインは生きているものと考えられる。また、西側については平成9年度の調査区で白色粘土層がほぼ終わることが確認されている。これにより、金堂基壇の東西規模はほぼ確定したといえる。基壇北側については、6次で確認された北縁は後世の造作により削られており、本来の北縁はもう少し外側にあったと考えられる。平成9年度調査区と今回の調査で確認された白色粘土層北限のラインをつないだものに近いことが推測される。南側は、平成9年度の調査で確認された白色粘土層の広がり (S 82グリッドラインから南へ0.8m付近まで) が最大であるが、今回17トレンチで確認された地業土の広がりを考えると、基壇はもう少し南側へ広がると考えられる。

2 回廊

(1) これまでの調査

平成18年度調査 講堂東側で北面回廊の北側柱列と思われる礎石据付痕を3ヶ所検出した。また、2・3次調査の検討を行った結果、3次調査（昭和51年度）で検出されていた「礎石群B」が東面回廊となり、北面回廊につながることが分かった。さらに、2次調査で検出されていた川原石が回廊北東隅の根石であることが分かった。これらの成果から回廊は講堂に取り付き、北面回廊は取り付け部から7間目で東面回廊に折れるものと推定された。また、講堂の掘り込み地業から推定される中軸線を中心に、北・東面回廊を西に折り返し、回廊の東西規模を72.6m（242尺）と推定した（前橋市教委2007）。

(2) 調査の概要

目的 西面および南面回廊の検出。

調査区の設定 西面回廊推定ライン上は、ほとんどが住宅地であり、調査可能な場所は非常に限られる。そのなかで住宅の庭先を借りて15トレンチを調査した。また、この住宅の北側には幅2mの里道があり、そこにもう一本トレンチを設定した（18トレンチ）。回廊南側については、推定ラインが決まらないことから南北に長く調査する必要があった。しかし南側も住宅が密集している状況であり、長いトレンチを入れることは不可能であるため、2本のトレンチでそれを捕うこととした。まず、山王庵寺見学者の駐輪場として借用している土地に17トレンチを設定し、金堂南側範囲と併せて調査することとした。また、その南東に位置する宅地内の畑を調査地として選定した（19トレンチ）。

遺構 西面回廊については、設定した15・18トレンチの両方で確認することができた。まず、15トレンチで東西方向に並ぶ礎石据付痕（根石と据付穴）を2ヶ所検出した。つづいて、18トレンチでも同じく東西方向に並ぶ礎石据付痕を2ヶ所検出した。いずれも3.5m間隔で並び、西面回廊築行方向の礎石据付跡を検出したものと思われる。また15トレンチでは、礎石据付痕下に回廊の地業土と思われる版築状の土層が認められた。いずれの調査区でも、遺構上面は削平されているため、基壇や雨落溝の有無は不明である。

南面回廊については、確実な遺構は確認できなかった。ただ、19トレンチで版築状の土層が認められ、位置的にはこれが回廊の地業である可能性も考えられる。また、版築状土層の南側で回廊もしくは中門の廃材を片付けたと思われる土坑群（D-1～4）が検出され、このことからも南面回廊がこの位置であることを思わせた。さらに、17トレンチでも調査区南側で版築土が検出され、この位置にも建物があることが判明した。これも南面回廊の候補となりうる遺構である。

出土遺物 15トレンチの礎石据付痕（P₄）から、須恵器高台付盤が根石に混じり出土している（Fig.52-5）。また調査区東側、回廊と金堂の間にあたる場所から土坑群が検出され、覆土中から大量の瓦が出土した。ただ、この瓦は出土位置を考えると、回廊の瓦というよりは金堂の瓦である可能性が高い。15トレンチからはコンテナバット30箱の瓦が出土している。18トレンチでは、瓦の出土数は極端に少なかった（コンテナバット2箱）。南側回廊推定地の19トレンチでは、おそらく回廊・中門に近接するであろう場所で瓦溜り（D-1～4）が検出され、ここからコンテナバット60箱を超える瓦が出土した。また、瓦に混じり9世紀代を主体とする土器が出土している。

(3) 西面回廊調査区の状況と検出遺構

①15トレンチ（Fig.13・14, PL.7）

西面回廊の確認のため22.2m²を調査した。結果、調査区西側で礎石据付痕を2ヶ所検出した。

回廊礎石据付痕 P₃とP₄が検出され、東西方向に並ぶ。P₃は据付穴と根石からなり、据付穴の規模は東西68cm、南北69cm、深さ10cmを測る。根石は川原石2個が確認された。P₄も同様で、据付穴の規模は東西65cm、南北47cm、深さ15cmを測る。根石は川原石4個が確認された。P₄では、根石とともに須恵器高台付盤が出土している。P₃と

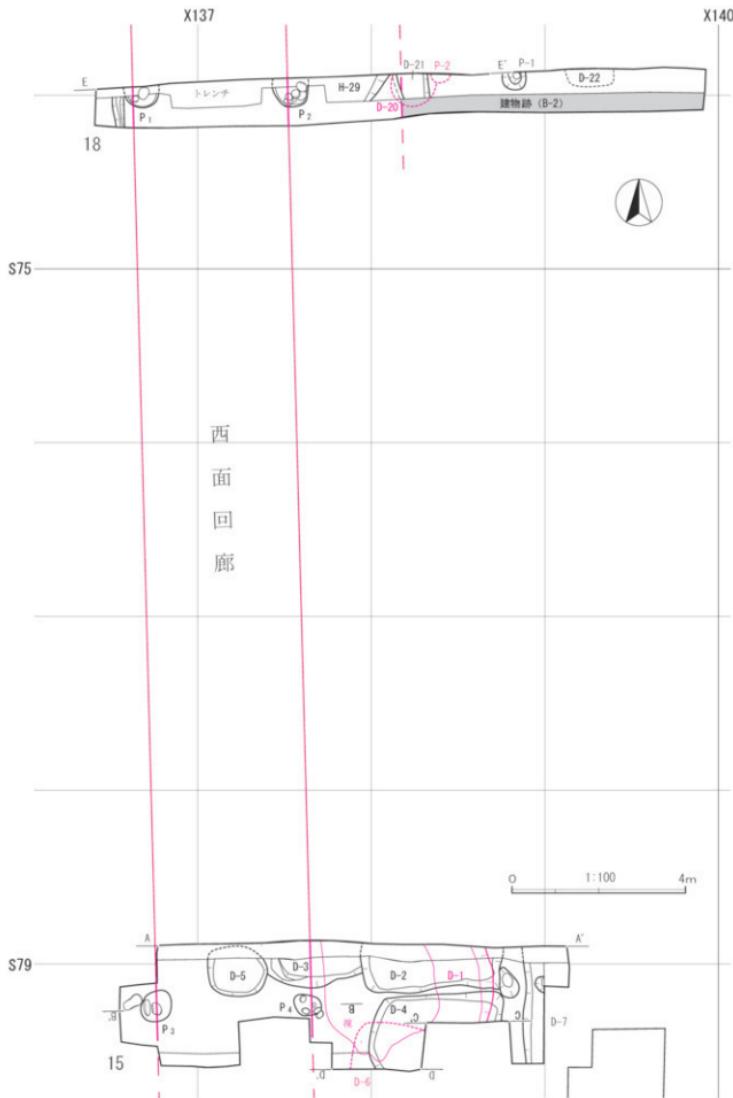


Fig.13 西面回廊周辺遺構配置図

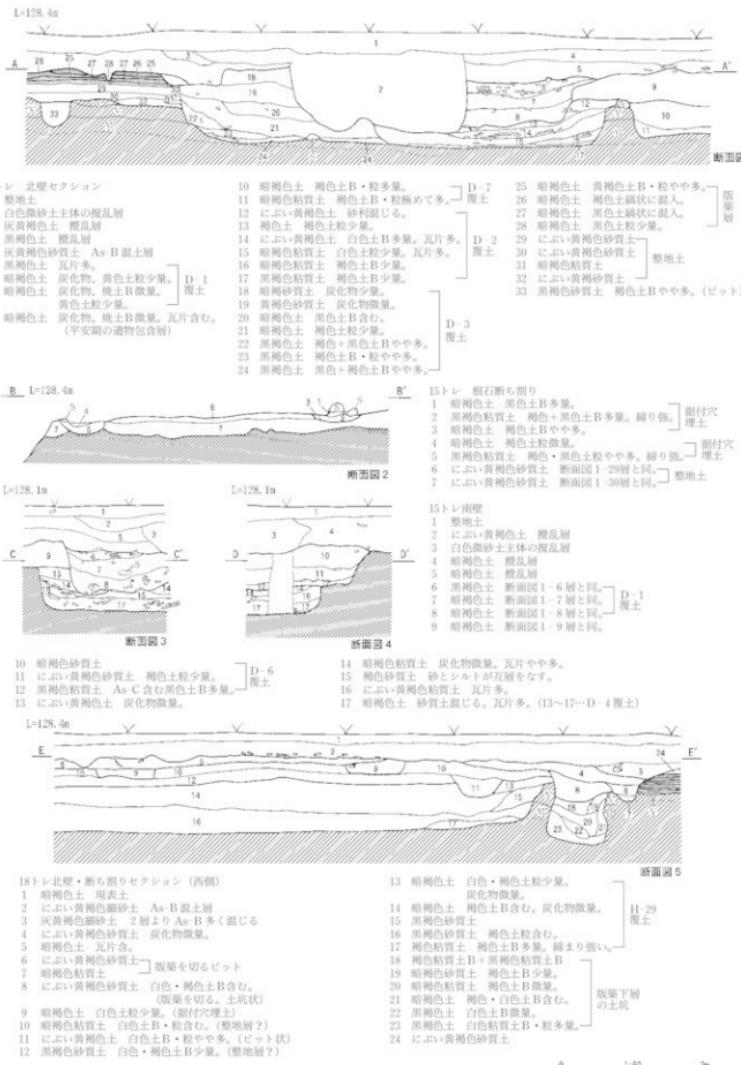


Fig.14 西面回廊調査区断面図

P_4 の柱間寸法は心々間で3.5mを測る。根石上面のレベル（標高）は、最高値で P_3 : 128.32m、 P_4 : 128.19m である。

回廊地業 回廊の地業土と思われる版築層を検出した（Fig.14土層図1）。現状で版築層は4層、厚さ20cm弱が残存している。版築土は暗褐色土を基本として用い、褐色や黒色の粘質土が縞状に混入する。版築土の下にはこれとは異なり、砂質土で単位がやや厚い層がある。版築開始前のしきならし（整地層）と考えられる。整地層下は地山IV層（黒褐色粘質土）で部分的にIV層（As-C軽石を含む黒色土）が残存する。掘り込み部は確認できなかつたものの、検出した版築層は、地山などの状況から掘り込み地業に伴うものと考えられる。この版築層は東側で土坑（D-3）に切られる。

その他の遺構 土坑を7基検出した（D-1～7）。D-1号土坑は東側の立ち上がり部分が検出されたのみで、西側は搅乱坑により壊される。現状で、東西166cm以上、南北180cm以上、深さ60cmを測る。遺物は覆土中および底面付近から夥しい量の瓦が出土した。その中に混じて出土した土器には、輪轆整形・酸化炎焼成によるいわゆる土師質土器小型坏（Fig.52-6～9）や足高の高台がつく椀（10）などがあり、概ね10世紀末から11世紀頃の所産と見られる。D-2号土坑は、D-4号土坑と並列して検出され、同様の規模・掘り方形状を呈する。ともに圓丸方形状で規模はD-2：東西330cm、南北110cm以上、深さ60cm、D-4：東西320cm、南北160cm以上、深さ36cmを測る。底面のレベルはほぼ同じで標高127.4前後である。底面で瓦片を主体とする夥しい量の瓦が出土する状況も類似する（PL.7）。土器については、D-2出土の須恵器坏1点、D-4出土の土師器坏1点を図示した（Fig.52-11・13）。いずれも9世紀代と考えられる。D-3号土坑はD-2に切られるが、現状で方形状、東西250cm以上、南北120cm以上、深さ56cmを測る。出土遺物は瓦片が主体であり、土器は9世紀代の須恵器坏が1点出土している（Fig.52-12）。D-5号土坑は円形で、東西138cm、南北120cm、深さ35cmを測る。覆土中にAs-B軽石が混入することなどから、時期は中世以降とみられる。D-6号土坑は断面のみでの確認となり、規模の詳細は不明である。遺物は瓦片を主体とし、土器はD-1と同じ10世紀末～11世紀頃のものが出土している。D-7号土坑は調査区東端で検出され、東西112cm以上、南北290cm以上、深さ52cmを測る。遺物は瓦も含めてほとんど出土していない。

これらの遺構の性格については以下のように考えられる。D-1・6：廐絶期に瓦等の廃材の片付けを行った廐棄遺構。D-2～4：地山褐色粘質土層（VI層）まで掘り込んでいることから、その土を採取するために掘られ（土取り跡）、その後瓦を廐棄した。D-7：不明。寺院下層の堅穴住居跡の可能性も考えられる。

②18トレンチ（Fig.13・14、PL.8）

西面回廊の確認のため14.0m²を調査した。結果、調査区西側で礎石据付痕を2ヶ所検出した。

回廊礎石据付痕 調査区西側で P_1 と P_2 が検出され、東西方向に並ぶ。 P_1 は据付穴と根石で、根石は川原石が2個残存している。据付穴の規模は、東西8cm、南北48cm以上の円形と推測され、深さは13cm程度である。 P_2 も同じく据付穴と根石で、根石には川原石のほか瓦片も使用されていることが確認された。据付穴の規模は東西82cm、南北65cm以上の円形と推測され、深さは20cm程度である。 P_1 と P_2 は、据付穴の心々で3.5mを測る。根石上面のレベル（標高）は、 P_1 : 128.28m、 P_2 : 128.37mである。

回廊の地業 18トレンチでは回廊の地業について、15トレンチで検出されたような版築層は確認できなかつた。据付穴が掘りこまれる暗褐色土（10層）および黒色土（12層）は回廊造営時の整地土と考えられ、整地土の下は古墳時代の堅穴住居跡（H-29）の覆土となる。

その他の遺構 調査区からは、回廊跡のほかに、建物跡（B-2）、堅穴住居跡1軒（H-29）、土坑3基（D-20～22）、ピット2基（P-1・2）が検出された。B-2号建物跡は、調査区東半部から検出され、建物の版築土が確認された。回廊内の伽藍施設と考えられる。D-21号土坑・P-1号ピットは、B-2版築土の下層にある遺構である（B-2、D-21、P-1については、本章第4節で詳述）。H-29号住居跡は回廊下層の遺構で、

出土遺物から時期は6世紀後半以降と考えられる(Ⅶ章で詳述)。D-20号土坑は、サブトレンチ断面での確認のため詳細は不明だが、B-1号を切る土坑状の落ち込みである。

(4) 南面回廊調査区の状況と検出遺構

① 17トレンチ (Fig.15・16, PL. 6)

金堂の南側範囲確認と併せて南面回廊を確認する目的で調査区を設定し、56.6m²を調査した。回廊と確定できる遺構は検出されなかったが、調査区南側で一部版築土が確認され、建物跡の存在が明らかとなった。なお調査区東側は、7次の調査区と重複する。

B-3号建物跡 検出された遺構は地業跡(版築土)のみで、建物の構造や基壇の有無については不明である。S86グリッドラインの南3.7m付近で版築層は終わり、それより北側には続かない。東・西・南側については、版築層は調査区外へ延びる。規模は版築面積出範囲で、東西3.0m以上、南北4.3m以上である。版築土は、最大5層、厚さ20cm程度残存している(Fig.15)。暗褐色土をベースとし、間に黄褐色土を薄く敷いて接着固めている(厚さ1~2cm程度)。版築土下は、版築開始前に施工された整地層と考えられる。この整地層は版築層より北側へ延びることから、建物周囲の広い範囲を整地している可能性がある。整地層下の地山はIV層およびその上にHr-FA(黄褐色シルト)層の混じる暗褐色土が堆積している。FA層は他の調査区では確認されておらず、これが堆積する理由として地形的に低かったためと考えられる。IV層上面のレベルで比較してみると、本遺構周辺では標高127.4m前後なのに対し、調査区北側では127.6m、金堂調査区(13トレンチ)では127.8mとなることからも寺院地造成前の微地形は北から南に向かい緩傾斜していたことが窺える。版築土下の整地層は、これを平らにするために行われたもので、この上面から版築土を積み上げて基壇を造っていたと推測される。

その他の遺構 調査区南側では、B-1のほか土坑1基を検出した。D-1号土坑は梢円形で、東西132cm以上、南北150cm、深さ27.5cmを測る。覆土中から大量の瓦が出土しており、片付けのための土坑と考えられる。時期は出土遺物から10世紀以降と考えられる。

② 19トレンチ (Fig.15~17, PL. 9・10)

南面回廊の確認のため59.0m²を調査した。調査区北側で一部版築状の土層が確認され、これが回廊の地業土である可能性がある。そのほか調査区南側で瓦溜り(D-1~4)を検出し、ここからは瓦片を主体とする夥しい量の瓦が出土した。

版築状の土層 調査区北側は現代までの擾乱により、ほとんどが地山面(IV・V層)まで削られていた。このな

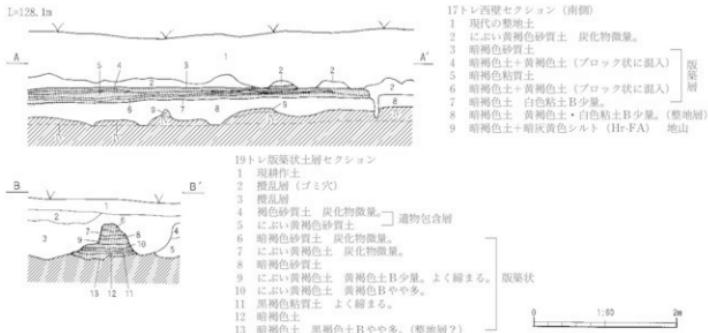


Fig.15 17トレンチB-3号建物跡・19トレンチ版築状土層断面図

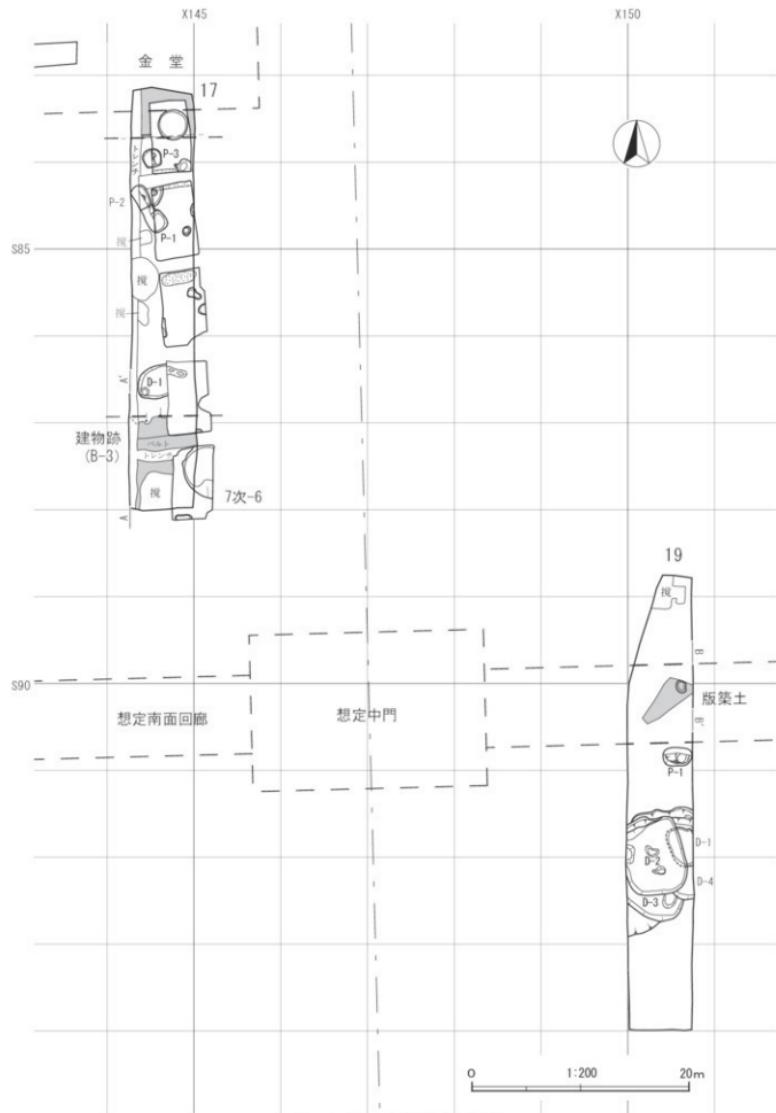


Fig.16 南面回廊推定地遣構配図

かで削平を免れたわずかな場所で、部分的に版築状の土層が残存していた。規模は、残存部で東西2.3m、南北2.1mを測る。版築土は最大8層、厚さ45cmが残存している。版築土は黄褐色土のブロックが混入する暗褐色土を基本に、粘質土や砂質土を互層にしている。だが、他の建物の版築に比べると、①よく選ばれていないような土を使っている、②版築土下の底面が平坦でなく凹凸が多い、③版築土各層の継まりが弱い、など全体的に造りが雑な印象を受ける。

その他の遺構 19トレンチからはその他、瓦溜りと柱穴1基を検出した。瓦溜りは底面掘り方の形状や遺構覆土の堆積状況から、複数回に分けて掘削され瓦が廃棄されたとみられ、底面付近で異なる掘り込みをそれぞれD-1～4号土坑とした（本章第4節で詳述）。調査区中央付近から検出されたP-1号柱穴は、円形の掘り方の西側が舌状に張り出し、全体として梢円形を呈す。規模は東西137cm、南北84cm、深さ77cmを測る。時期は不明だが、掘立柱建物の柱穴と考えられ、舌状のプランは柱抜き取りの痕跡と推測される。

(5) 回廊の規模

今回の調査で西面回廊が確認されたことにより、昨年度の調査と併せ回廊の東西が確定された。ここでは、これまでの調査成果を勘案し、回廊の規模について整理しておきたい。なお、尺度については、昨年度の報告に倣い一尺=30.0cmで換算する。

回廊の東西規模 東面回廊外側～西面回廊外側の規模は79.7m（約266尺）と計測される。なお昨年度、講堂の地業範囲から設定した伽藍中軸線を基準に回廊の東西規模を72.6mと推測した。この推測値より7.1m西側に広がる結果となった。

回廊の南北規模 今回の調査では南面回廊については不確定とせざるをえない。17トレンチのB-3号建物跡、19トレンチの版築土検出地が候補になりうる。仮にB-3が南面回廊になった場合、回廊の南北規模（北面回廊外側～南面回廊外側）は81.6m、19トレンチ版築土の場合は93.6mとなる。^⑩

回廊の建物幅（棟行寸法） 3.5～3.6m（約12尺）と推測される。今回の西面回廊の調査では、礎石据付穴の心々で3.5mという柱間寸法が得られた。なお、東面回廊にあたる3次調査の「礎石群B」では柱間寸法は3.6mとなっており、概ね12尺に復元可能と考えられる。

回廊桁行の柱間寸法 調査では3.0m（10尺）および3.6m（12尺）の数値が得られている。^⑪ Fig.59のとおり、昨年度の北面回廊東側の調査では、桁行の柱間寸法が10尺等間となっており、東面回廊（礎石群B）では12尺である。今回の西面回廊では、桁行方向の柱間は確認されていないが、15トレンチと18トレンチの礎石据付痕の距離は、21.1mとなっており、約70尺の数値が得られる。これは北面回廊の桁行柱間が10尺等間だったことを考えると、10尺×7間分に相当すると考えられる。北西隅の外側柱推定位置～18トレンチの柱位置までは25.3m（約84尺）と推測される。北東側の状況でいえば、北東隅から南へ3間目までは12+14+12尺となり、さらに12+12+12+10尺となって18トレンチの柱位置に到達する蓋然性が高い。

⁽¹⁰⁾ 今回の調査段階では、①19トレンチの版築土のほうが、②17トレンチB-3より南面回廊である蓋然性が高いと考え、各図には①の位置をもとに南面回廊推定ラインを入れた。①の場合、講堂前面のスペース（空間）と金堂・塔前面のスペースが同程度となり、伽藍全体のバランスとしては②の場合より良いと思われる。

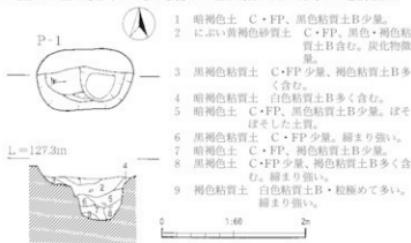


Fig.17 19トレンチ P-1号柱穴

3 寺 域

(1) これまでの調査

昭和の調査 寺域北側では、昭和49・52・53年度に調査が行われている（1・4・5次調査）。1次調査で塔の北約110mで掘立柱建物が検出され、このときは北門跡と考えられた。4次調査で、この建物が桁行9間・梁行3間の東西棟の建物であることが確認され、僧房もしくは食堂とされた。5次調査では、この建物の南北二面に庇がつくことが確認され、さらに周辺からは山王寛寺下層の遺構と考えられる掘立柱建物群が検出されている。

平成9年度調査 塔心礎の南西100mの地点から寺域南辺の墓地跡と推定される版築土が検出された。このときは厚さ30cmの版築層が延長1mにわたって検出されている。

平成18年度調査 寺域の北側を区画する可能性のある溝跡を検出した（W-1号溝跡）。座標東から北に10.5°の振れで東西に走行する。

(2) 調査の概要

目的 寺域北辺および南辺の区画施設等（築地・土塁・溝・柵列など）の確認。とくに寺域北辺では、18年度調査した溝跡（W-1号）の西側延長部の確認。

調査区の設定 寺域北辺については、昨年度W-1を調査した1・1aトレントの西側に位置し、現況畠となっている場所に10・11トレントを設定した。1トレントの西116mの地点に10トレントを設定し、その間に11トレントを設定した。寺域南辺については、平成9年度に版築土が検出された道路の西約47mの地点、現況畠となっている場所に20トレントを設定した。

遺構 10トレントではW-1号溝跡の延長は確認できず、ここまで延びてこないことが判明した。調査区からは、平安時代を主体とする堅穴住居跡が計9軒検出されている。11トレントでは、W-1号溝跡の延長が確認された。そのほか、堅穴住居跡1軒が検出されている。寺域南側の20トレントでは、南辺の区画に関連する遺構は検出されず、堅穴住居跡4軒等が確認された。

今回の調査で10トレントまでW-1が延びていないことが分かり、これが寺域を区画する遺構である可能性は低くなったといえる。また、主要伽藍の傾き（E-1.5°-N）と本遺構の傾き（E-10.5°-N）が異なることもこれを示唆しており、もう少し狭い範囲を区画する遺構の可能性が高い。本遺構の南側で確認されている「北方建物」の傾き（E-8°-N）がこれに近く、この建物と関連する溝跡と推測される。

遺物 瓦の出土は主要伽藍に比べると少なくなり、北側の10トレントでコンテナパット2箱、11トレントで6箱、南側の20トレントでは1箱に満たない。10トレントでは、瓦を窓の構築材や壁の補強材として用いている住居跡が確認された。そのほか、各トレントで住居跡に伴う土器類等が出土した。

(3) 各トレントの状況と検出遺構

①10トレント (Fig.18・19, PL.11)

寺域北辺の調査区である。南北に延長32mのトレントを設定し、93.1mを調査した。南側がW-1号溝跡延長部にあたるが、溝跡は確認されず、ここまで延びないことが判明した。

検出遺構 堅穴住居跡9軒（H-16～23・30）と溝跡2条が検出された。堅穴住居跡の時期は平安時代と推測されるものが7軒（H-16～21）と主体を占め、ほかに古墳時代後期と推測されるものが1軒検出された（詳細については図版参照）。

出土遺物 H-17では、人為的に埋められた土層から瓦片を主体とする遺物が多数出土した。そのなかには完形の平瓦も含まれていた（Fig.30-1）。また、H-18竈付近からは10世紀前半頃の所産と考えられる須恵器壺・椀等の土器がまとめて出土した。またこの住居跡では、壁面の補強材として平瓦片を使用している。



Fig.18 寺城北側造構配置図

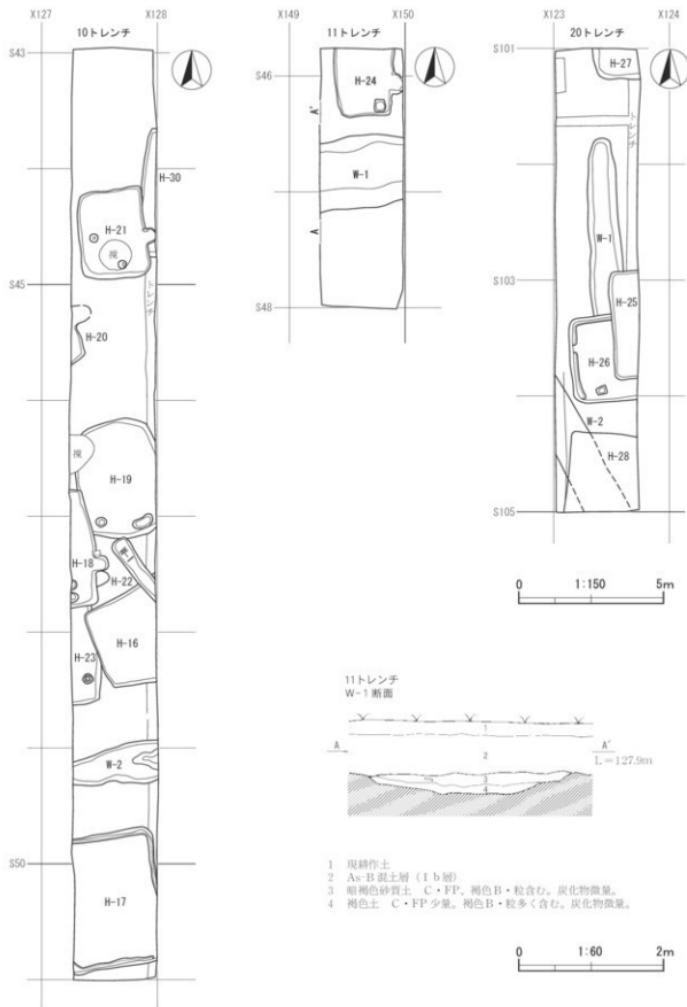


Fig.19 10・11・20トレンチ全体図・11トレンチW-1号断面図

(2) 11トレンチ (Fig.18・19, PL.12・13)

寺域北辺の調査区である。南北に延長9mのトレンチを設定し、25.8m²を調査した。調査区中央付近で、W-1号溝跡の延長が確認された。調査区は全体的に深くまで削平されており、遺構の残存状況は良くなかった。

W-1号溝跡 E-10.5°-Nの傾きで東西に走行する。断面逆台形で、今年度検出部分で確認面からの深さ20cm、上幅2.5mを測る。昨年度の調査と併せると、延長34m以上となる。底面のレベルは127.52mであり、昨年度調査1トレンチ検出部では127.08mであったことから、東に向かって低くなる。遺物は底面から瓦片や土器片等が出士し、うち須恵器高台碗2点を図示した (Fig.52-1・2)。

その他の遺構 堅穴住居跡1軒を検出した (H-24)。時期は出土遺物から9世紀後半と考えられる (VII章参照)。

(3) 20トレンチ (Fig.19, PL.13)

寺域南辺の調査区である。平成9年度に南辺の築地と思われる版築土が検出されている道路の西側47mの地点に、南北16mのトレンチを設定し、48.0m²を調査した。結果、築地跡は確認できず、区間に関連する遺構は検出されなかつた。

遺構 堅穴住居跡4軒 (H-25~28) が検出され、うち2軒は古墳時代後期（6世紀末～7世紀前半）と考えられる。ほか2軒は遺物が少なく時期は不明である。(VII章参照)。そのほか溝跡が2条検出された。W-1号溝跡は、南北 (N-3°-W) に走行する浅い溝で、上幅最大1.1m、深さ20cm程度である。H-25・26と重複し、これに切られる。W-2号溝跡は調査区南側を南北 (N-26°-W) に走行する溝で、断面逆台形、規模は上幅1.4m、深さ40cm程度である。H-28と重複し、これに切られる。

出土遺物 瓦の出土数は非常に少なく、コンテナバット1箱弱であった。堅穴住居跡から出土した遺物も少ない。注目されるのは、北側から製鉄・鋳造に関連する遺物が出土していることである。H-27号住居跡覆土中から、輪羽口・鉄滓が出土しており、また、その周辺のX123・S101グリッド包含層中から、坩堝が出土している (Fig.57-3・4・19)。H-27については南西コーナー部を検出したのみで、大部分は調査区外のため詳細は不明だが、製鉄・鋳造に関連した遺構の可能性も考えられる。

4 その他の伽藍関連遺構

(1) B-2号建物跡 (Fig.13・14・20, PL.8)

概要 西面回廊調査区18トレンチで回廊跡の東側（内側）で検出された建物跡で、掘り込み地業と思われる版築層が確認された。金堂の北16mの地点にあたる。北壁際で断ち割りを行ったところ、西側で掘り込み部が確認できた。地業の東・南・北側の範囲については捉えられなかつた。遺構上面および田地表面は削平されているため、基壇の有無は不明である。礎石の痕跡等も確認できなかつた。回廊側柱からB-2の地業までは2.6mと近接することから、同時期に建っていたと仮定するとB-2は回廊と軒を接するような建物だったことが推測される。この版築層の下層から土坑1基 (D-21)、ピット1基 (P-1) が検出された。

規模 現状で地業の規模は、東西7.0m以上、南北1.0m以上である。

版築 版築層は最大11層・厚さ45cm程度残存している。上面のレベルは最も高いところで標高128.22m、底面は東側がやや落ち込むものの全体を通してほぼ平坦であり、レベルは標高127.80～127.85mで推移する。版築は黒色粘質土 (V層) 上面に構築される。西側の掘り込み部では、IV・V層を掘り込んで地業を行っていることが確認された (断面図2)。版築土には黒色土・暗褐色土・黄褐色土が用いられている。黒色土は粘性が強く、黄褐色土はやや砂質であり、これらが互層状に積み重ねられていた。

版築下層の遺構 版築の断ち割りを行ったサブトレンチ内では、版築層下層から、土坑とピットが1基ずつ検出された。D-21号土坑は掘り込み地業立ち上がり付近で検出され、平面形状は不明、断面は下半部が広がり袋状を呈す。規模は東西64cm、南北56cm以上、深さ70cmを測る。D-21号土坑は西側の立ち上がりが掘り込み地業の

V 伽藍の調査

立ち上がりと重なることから、これらは連続して掘られた可能性がある。また、褐色粘質土層（VI層）を掘り込んでおり、断面形状がこの層位で袋状になることから、この粘質土を探るために掘られた遺構と考えられる。P-1号ビットは円形と推測され、東西55cm、南北38cm以上、深さ27cmの規模である。

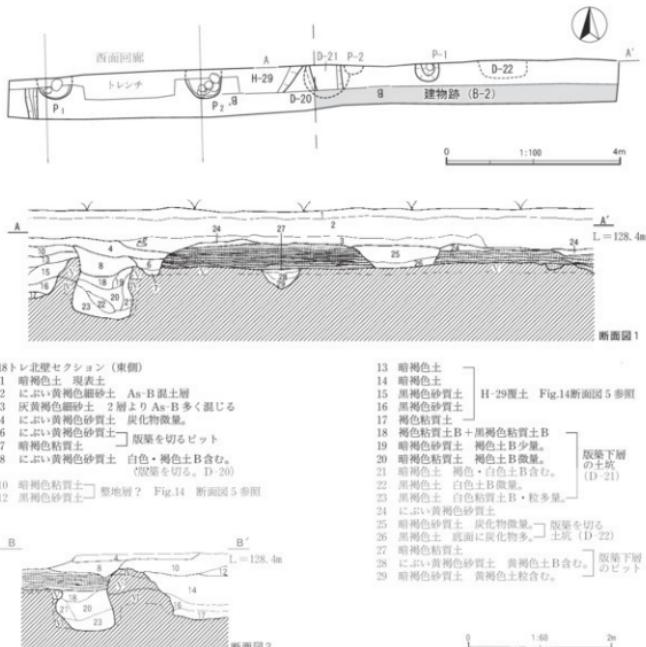


Fig.20 18トレンチ平面図・B-2号建物跡版築土層断面図

(2) 19トレンチ瓦溜り (Fig.21・22、PL. 9・10)

概要 南面回廊検出を目的とした19トレンチで、調査区中央や南から瓦溜りを検出した。北側で検出した版築土からは、南へ約4mの地点である。層位により出土量の多寡はあったが、覆土上層から底面にかけて間断なく瓦が出土した。遺物の出土状況から廃棄遺構とみられる。瓦のほか土器・金属片・切石・灰化物等も出土しており、建物の施材をまとめて廃棄したものと考えられる。最終的にこの瓦溜りからは、コンテナバット67箱分の遺物が出土した。

遺構上面のプランでは一つの遺構として考えられたが、底面まで掘り下げたところ複数の掘り方が認められた。断面でも掘り方ごとに覆土が若干異なり、切り合い関係も認められたため、それぞれに異なる遺構名を付した(D-1～4)。また、ある程度これらが埋まり全体的に窪地になった段階でさらに廃棄が行われており、これをD-5とした。⁽²⁾

これらの遺構ごとに遺物を整理すると Fig.22 のようになり、以下のことが判明した。①D-3・4 から出土した遺物は比較的少ない、②D-1・2 から出土した遺物は、概ね 9 世紀代の所産と考えられる。③上層 D-5 では 9 世紀代の遺物に混じり 10 世紀代の土器が出土している、④瓦については古いものから新しいものまで混在しており、遺構ごとに時期的な差異は認められない。

形状・規模 D-1 号土坑：不定形、東西 125cm 以上、南北 180cm、深さ 52cm。D-2 号土坑：不定形、東西 280cm 以上、南北 343cm、深さ 50cm。D-3 号土坑：形状不明、東西 263cm 以上、南北 213cm 以上、深さ 30cm。D-4 号土坑：形状不明、東西 92cm 以上、南北 105cm 以上、深さ 26cm。
新旧関係 底面の土坑群は切り合い関係から、D-3 → D-4 → D-1 → D-2 という新旧関係が認められる。

出土遺物 D-3・4 は覆土中に瓦片は混入するが、比較的少ない。D-1 からは、底面付近から遺存度の高い土器が多く出土しており、時期は概ね 9 世紀代と考えられる (Fig.53-1 ~ 6)。瓦は、軒丸瓦では IV 式 (複弁七井) が、軒平瓦では II 式 (三重弧紋)・III 式 (四重弧紋) が出土している。そのほか、金属製品 (Fig.58-13・14・18・19)、基壇の化粧材と思われる角

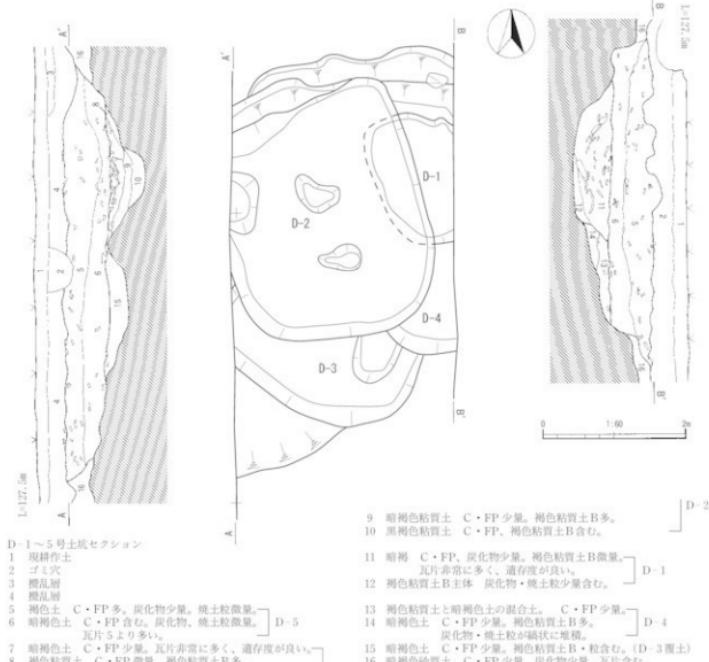
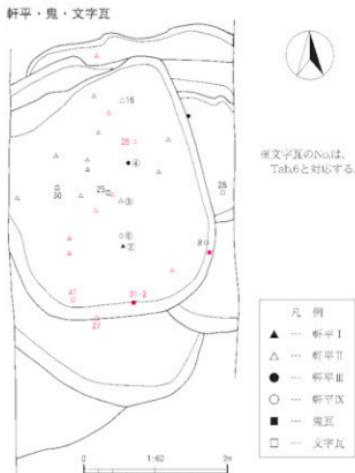
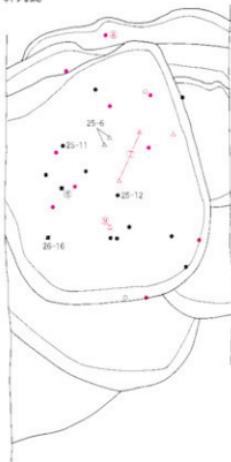
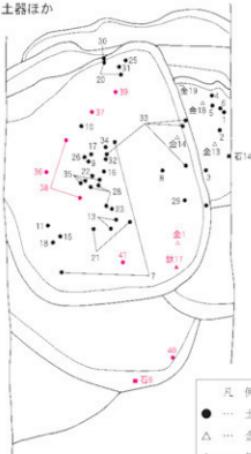


Fig.21 19トレンチ遺構配置図・D-1～4号土坑(瓦溜り) 平・断面図

V 伽藍の調査



土器ほか



素十器No.はTab.20、石No.はTab.21、鉄No.はTab.22、
金No.はTab.23と対応する。

主な出土遺物		分布図の赤色は上層出土遺物 (D-5) を表す。		
遺物名	土器	瓦		
D-1	 2			
	 4			
D-2	 16	 025-10 (NA)	 025-15 (XI)	
	 22	 227-1 (Ia)	 6-28-10 (X)	
D-3	 32	 ③ (IIKB)	 6-28-10 (X)	
	 33	 428-8 (IIIKDn)		
D-5	 41	 025-5 (II)	 9-26-13 (V)	
	 39	 ②25-9 (IVA)		前述数字の次は 特徴番号を表す。

Fig.22 瓦溜り遺物分布図と出土遺物

閃石安山岩切石(Fig.56-14)などが出土している。D-2も底面付近で遺存度の高い土器が多数出土し、時期はD-1とほとんど変わらない(Fig.53~55-7~35)。軒丸瓦では、II式(隆起線八弁)・III式(複弁八弁)・IV式など、創建もしくはそれに近い時期と考えられるものに加え、上野国分寺Ⅲ期(修造期:9世紀~)と同窓のXII式(変形複弁七弁)が出土している。軒平瓦でも同様の傾向が認められる。上層のD-5になると9世紀代の土器に加え新しい土器が混入してくるようになり、10世紀後半代とみられる灰釉陶器皿が出土している(Fig.55-36~41)。瓦は下層の遺構と同じく、古いものと新しいものが混在し、II・III・IV式と国分寺修造期のV式が出土している。そのほか、鉄滓(Fig.57-17)、銅製品(Fig.58-1)などが出土している。

遺構の時期と性格 以上のことからこの瓦溜りの時期や性格について、次のことがいえる。

- ①少なくとも4回にわたり掘られ、その開始は9世紀頃と考えられる。
- ②早い段階に掘られたD-3・4の覆土中には、遺物が比較的少ないことから、廃棄はなされていないとみられる。このため、掘削時には土取りなど別の目的があったと考えられる。
- ③D-3・4がある程度埋まった段階でD-1→D-2の順に掘られ、瓦・土器や建物の施材等が廃棄された。
- ④D-1・2も埋まり全体が窪地になったところに、引き続き廃棄が行われた(D-5)。これは10世紀末ごろまで続いたと考えられる。

(註) なお出土遺物については①出土位置を記録したもの、②一括で取り上げたものがあるがいずれも最初につけた遺構名「W-1」で登録してある。②については、遺構の振り分けができないためW-1のままである。

VI 出 土 瓦

1 軒瓦の分類

(1) 軒丸瓦の分類 (Fig.23)

平成18年度調査報告書では軒丸瓦範の違いにより12型式に分類した(「第6次発掘調査概報」、「群馬県史 資料編2」では、13型式に分類するがそのIIIおよびIV式は、同一瓦範と判定した)。なお、大方の意見に従って、素弁の2種を複弁のものより古いと考え、I・II式とした。

- I式 素弁八弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 I)
- II式 降起線八弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 V)
- III式 複弁八弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 III、IV)
- IV式 複弁七弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 II)
- V式 单弁重弁四弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 VI)
- VI式 单弁四弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 VII)
- VII式 单弁重弁六弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 VIII)
- VIII式 单弁重弁六弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 IX)
- IX式 单弁重弁五弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 X)
- X式 单弁三重弁五弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 XI)
- XI式 変形複弁七弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 XII)
- XII式 変形複弁七弁蓮華紋軒丸瓦 (第6次概報 XIII)

平成18年度の発掘調査報告では、2種類の軒丸瓦が新たに出土した。瓦当紋様(瓦範)の類似性や相違を分類の基準と考えているので三重弁六弁蓮華紋軒丸瓦(住谷修氏編『上野瓦集』西毛編の山王庵寺出土瓦例にある)がVII式に設定していた瓦当紋様に近いことから、前者をVIIA式に新出のものをVIB式とした。重弁四弁蓮華紋軒丸瓦V式(『史跡上野国分寺跡』A.004型式)に設定している重弁四弁のそれとは瓦当紋様が大きく違うことから軒丸瓦XIII式とした。

19年度の発掘調査では、重弁五弁蓮華紋軒丸瓦(『史跡上野国分寺跡』B.201型式)が出土した。すでに軒丸瓦X式を重弁五弁蓮華紋軒丸瓦と呼称するが、瓦当紋様が明確に異なると判断し XIV式とした。Tab.8に全体の抑図を付した。

(2) 軒平瓦の分類 (Fig.24)

軒丸瓦は瓦当紋様(瓦範)の違いによって分類出来た。軒平瓦の場合、工具を押し当てて回転台の回転を利用して施紋したものや、瓦範を使ったもの、手彫りしたものなどがある。このため、軒丸瓦の場合とは違った分類の諸条件を設定した。

- I式 素紋軒平瓦 (第6次概報 A)
- II式 三重弧紋軒平瓦 (第6次概報 B・C)
- III式 四重弧紋軒平瓦 (第6次概報 D)

1 軒瓦の分類

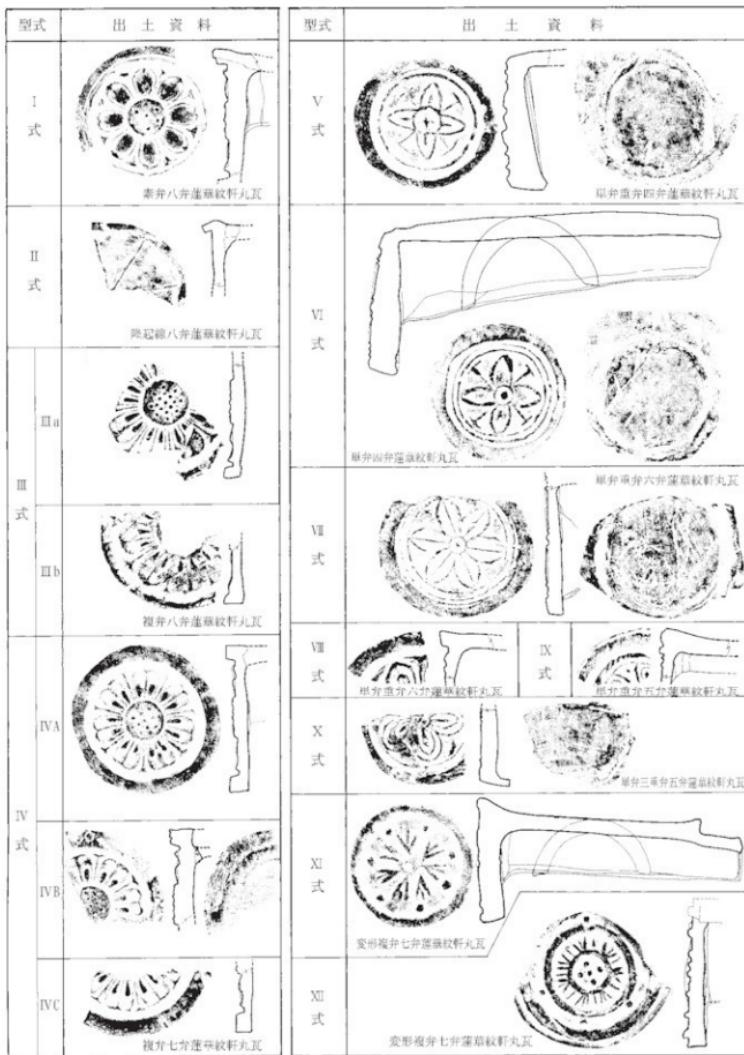


Fig.23 軒丸瓦分類図

0 20cm

VI 出土瓦

- IV式 重廓紋軒平瓦 (第6次概報 F)
V式 偏行唐草紋軒平瓦 (第6次概報 I)
VI式 均整唐草紋軒平瓦 (第6次概報 G)
VII式 幾何学紋軒平瓦 (第6次概報 H)
VIII式 線杉紋軒平瓦 (第6次概報 J)

平成18年度調査報告書で提示した重弧紋軒平瓦の分類条件の1部をTab.9を作成するため改変した。なお、19年度発掘調査で出土した新型式の軒平瓦（『史跡上野国分寺跡』Z001型式）についてはIX式とした。

① 平瓦部凸面の状況

- N 繩目叩打痕のもの。
K 回転台を利用し横なでしたもの（木製刻線叩具痕をなでけす）。

② 瓦当の施紋方法等

- A 平瓦部広端に直接弧紋の工具をおしあて施紋したもの。
B 平瓦部広端に瓦当紋施紋のため新たに粘土を付加した後、施紋したものの。
C Bの一部と考えられる。瓦当部に付加される粘土の接着を良くするために平瓦に刻みをつけ瓦当紋施紋のための粘土を付加した後施紋したもの。
D 頸の位置に隆起線紋がつくもの。
E 一枚作りされたもの。
F 工具（カキペラなど）を用いて施紋したもの。

③ 頸部の形状 山王庵寺の軒平瓦では（g）段頸のもの、（h）曲線頸のもの、（i）無頸のものがある。
大多数の軒平瓦が無頸（i）である。

hは、IV式以降の頸の形状である。このため、I～III式の段頸軒平瓦にのみRをつけて分類する。

なお、段頸三重弧紋軒平瓦で頸に一条の隆起線紋のあるものには大・小2種類がある。これを区別するために大きいものに^{xx}Iを付記した。

重弧紋軒平瓦については、出土点数が多く、瓦当面の厚さ一つをとっても一律ではない。また、粘土円筒分割後に重弧紋が施紋されたものもある。今後細分を検討したい。

概略、I～III式は、桶作りされた軒平瓦であり、V・VI・VII・IX式は型抜きされた軒平瓦、VII式は籠書きと刺突紋によって施紋された軒平瓦である。

I 軒瓦の分類

型式		出土資料		型式		出土資料	
I式				III式	Kグル		
Ig				I式	Dg		
Nグル	A			IV式			
II式	B			V式			
Iブ	E			VI式			
F				VII式			
Kグル	A			VIII式			
ブル	B						
Iブ	C						
Kグル	D						
ブル	Dg						

Fig.24 軒平瓦分類図

0 20cm

2 今年度調査の出土瓦

軒瓦の分類については、18年度の調査報告で軒丸瓦12型式15種・軒平瓦8型式19種として瓦当紋様を提示した。このなかには、瓦当紋様の一部が未確認であったり、新たに同一瓦範と判明したものが含まれている。さらに18年度には、軒丸瓦で2型式の新資料が出土し、19年度にも新資料が出土した。

軒平瓦では圧倒的に三重弧紋を瓦当紋様とするものが多い。重弧紋の分類にあたっては、その造り方を中心に分類基準を考えてきたが瓦当厚を計測した結果、個々の厚さにかなりの幅があり、重弧紋を引き出す桶歛状施紋具にいくつかの種類があり、それによって厚さの相違が生じたであろうことや、粘土円筒の状態で重弧紋を引き出したものだけでなく、粘土円筒を平瓦一枚ごとに分割してから瓦当紋様が押し引きされたと考えられるものが意外に多いことに気がついた。早い機会に、諸条件を整理し報告するつもりではあるが、ここではこれまでの分類条件で昭和49年の第2次調査から平成11年の調査までの出土軒瓦を分類集計したものがあるので、Tab.8・9に提示した^(注1)。軒瓦全体の出土傾向から山王庵寺の伽藍建設経過などを推し計る一助になるものと考える。

(1) 軒丸瓦 (Fig.25・26, PL.14・15, Tab. 5)

軒丸瓦は全体で174点出土した。このうち南回廊推定地（19トレンチ）の瓦溜りを中心に130点近い出土があつたのが目立った。また、種別では複弁蓮華紋軒丸瓦（III・IV式）が圧倒的に多かった。

1は、素弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。5とともに山王庵寺の創建期の軒丸瓦といわれる。面径は16.0cm前後。瓦当厚は中房で計って2.5cmほど。中房は蓮弁より一段高く径4.0cmに近い。1+6の蓮子が置かれる。内区は素弁八弁の蓮華紋である。各蓮弁は独立して、それぞれが中房にとりつく。蓮弁は丸みを帯び隣郭線で囲まれている。弁端は小さくかえり鎬がつく。間弁は中房に向かう部分が長い三角形。外縁は直立し高い。外縁には段が一段つく。瓦範の端は見きわめがつかないが、外縁外側の端までか。伽型は使われていない。木村捷三郎氏の言うB型瓦範であろう^(注2)。瓦当は別作りされた行基式丸瓦が接合される。丸瓦には焼成前に穿孔された釘穴がある。丸瓦の瓦当接合部には特徴がある。広端の凹面側を2.0~2.5cmほど削り^(注3)、断面図1~4のように瓦当との接合面を段状につくる。丸瓦の凹面を削りとった面には刃物で斜格子状（1・4）、平行線状（2・3）^(注4)の刻み目を入れ、瓦当接合の助けとする。1の瓦当の丸瓦剥離面には、刃物による刻み目痕のボジが残る。丸瓦の広端は、瓦当面の外縁上端部となる。恐らく丸瓦接合法との関係であろうが、石川克博氏の指摘のとおり、丸瓦接合部側の外縁が垂直に立ちあがるのに対し、反対側は外縁に詰められた粘土紐の重なりが段となって残る例が見られる。接合法については、稻垣晋也氏の分類の嵌め込み式に近いとの考えには賛成である^(注5)。

I式の出土傾向は、Tab.8のとおり軒丸瓦出土総数340点のうちの23点（6.8%）ほどであるが、第6次調査（金堂・塔西辺部）での出土量が目立っている。また、18年度調査のH-12号住居状遺構では軒平瓦1式と、5点ずつ出土しそれぞれとなる可能性が考えられた。同範例は下東西清水遺跡（青梨子町）・観音澤遺跡・大屋敷遺跡（総社町）、上野国分寺・尼寺中間地域B区（高崎市国分町）から出土している。1・2は17トレンチ出土。3・4は昨年度調査で出土。なお、19年度調査では小破片が多いがI2・14・17・19トレンチなどから14点ほどが出土した。

5・6は1に比べ変わった感じを受けるが素弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。これを軒丸瓦II式と呼ぶ。瓦当全体が残っているような良好な資料は未だに出土していない。瓦当面の直系は18.0cmほどと大きい。瓦当紋は太さ0.1~0.2cmほどの隆起線4本が瓦当面の中央で交差し、瓦当面を分割する。これによって、8枚の蓮弁を形成する。從て中房と呼べるもののかは疑問であるが、隆起線の交差点がそれにあたる。外縁は直立した高縁で幅1.0cmほど、素紋である。瓦当紋様は中房を無視すれば飛鳥寺軒丸瓦の星組^(注6)に似る。さらに、外縁ばかりでなく瓦当の厚さも1.0cm前後のものが多く古い軒丸瓦の姿を残している。瓦当と丸瓦の関係は、別作りされた丸瓦が接着式でとりつけられている。接着面は瓦当裏の最上部にある。出土量は25点（7.3%）ほどで、I式軒丸瓦と同様、第

2 今年度調査の出土瓦

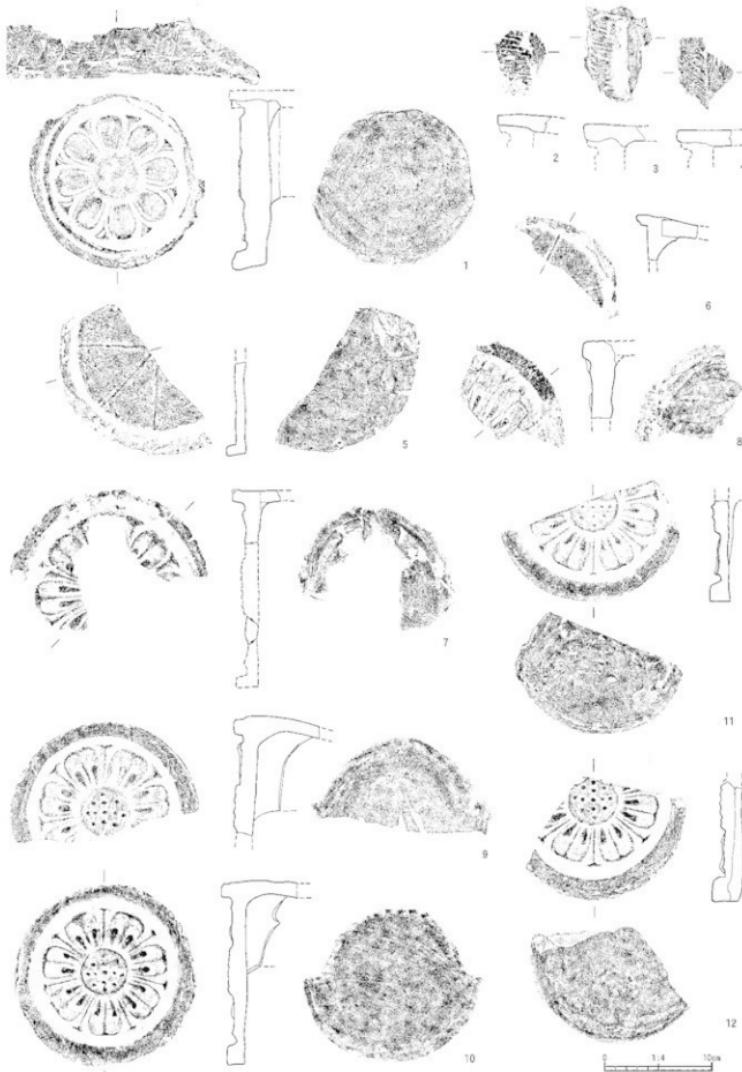


Fig.25 軒丸瓦 1

VI 出土瓦

6次調査（金堂・塔西辺部）で多く出土した。この瓦当面もB型瓦範を用いて型抜して作られたものと思うが、不思議なことに県内外を通じて同範・同紋例の出土が報告されていない。5・6は19トレンチからの出土であるが他に15・19トレンチで7片の出土があった。

7・8は、複弁八弁蓮華紋の瓦当紋様でIII式軒丸瓦と呼ぶ。複弁紋瓦には、他にIV式軒丸瓦があり、出土軒丸瓦の中では複弁蓮華紋様の破片が最多である。このため、IV式軒丸瓦との見分けがむずかしく複弁八弁蓮華紋の存在が明らかにされたのは第6次調査である。III式軒丸瓦の特徴を明らかにする意味で、IV式軒丸瓦との比較をすれば次のようになる。III式は瓦当面の直径が17.0cmほどで、IV式より1.0cmほど大きい。瓦当紋様では、蓮弁の数が八弁と七弁である。この相違は蓮弁の幅・長さにも影響しIII式の蓮弁は長く幅は狭い。中房はIII式では直径が若干大きく蓮子数も1+8+8でありIV式の1+4+8よりも多い。外縁はともに直立する高縁であるがIII式の外縁の幅はIV式よりも狭い。などの点である。

III式では、出土した瓦当面のすべてに木範の傷が認められる。さらに傷はしだいに大きくながりを見せ最終的には蓮弁・中房・外縁の形がからうじて区別される状況となる。この木範の傷の進行は1箇の瓦範が多く軒丸瓦を作製するために繰返し用いられた結果である。従って範傷の進行は、時間的な新旧の関係も写しとっている。範傷の進行に明確な傷の生じる順序が明らかであれば、細かい分類も可能であるが、III式の場合、小破片が多くその比較からは多くは望めない。瓦当面の紋様で蓮弁の輪郭が残っているものIII a式(7)と蓮弁の輪郭まで失われたものIII b式(8)とに区別するだけに留めた。瓦範は外縁の上にまで範傷が現れているのでB型。丸瓦は別作りされたものがII式と同様、接着式で瓦当裏最上部につく。支持土を裏側のみ指でナデつけている。今回の調査では25点が出土した。15・19トレンチで比較的多かった。Tab. 8では、全体で56点(16.4%)ほどの出土があり、IV式軒丸瓦の出土量について多い。なお、形のうえではIV式よりも古い姿の軒丸瓦である。II式と同様、山王庵寺以外では出土例は知られていない。

IV式軒丸瓦の出土量はTab. 8では、少なくとも134点(39.4%)と最も多い出土傾向を示す。この軒瓦では、少なくとも2種類の瓦範が明らかになっている。最も出土量の多いものをIV A式と呼び、他の1つをIV B式と呼ぶ。これ以外に複弁七弁の軒丸瓦の破片の中に蓮弁の先端部から外縁の上にかけ範傷が見られる軒瓦片があったので第3の瓦範の可能性を想定しIV C式としたが、未だ中房部分は未確認である。かつて、IV A式であろうか傷のない美しい瓦当紋様であることから石製の瓦範を想定した人もいたが、今回の出土資料から9・10とともに範傷が中房の蓮子・外縁のつけ根に見られるので明らかに木範が用いられている。このことから、IV C式と想定した瓦範もIV A式の範傷の進んだものである可能性も出てきた。IV A・IV B式は瓦当紋様の構成ではほぼ同一である。中房径・弁長などで0.2cmほどIV B式が大きい。生産工房や粘土、焼成などの点の相違は不明であるがIV A式が青黒く焼き上がるのに対しIV B式では灰白色のものが多い。ともに別作りされた丸瓦を接着式で接合するがIV A式の場合、支持土が丸瓦の凹面側だけでなく凸面側にも付加されている。IV B式では、丸瓦広面や瓦当裏丸瓦接合面に刻み目を入れて貼り合せの助けとしている。また、IV B式では、外縁に竹管紋を刺突する例がかなり見られる。素紋の外縁と竹管紋の押された外縁の瓦とを区別するために、先のものをIV Ba式とし竹管紋刺突のものをIV Bb式とした。IV BaとIV Bb式では瓦当の厚さがIV Bb式の方が厚い傾向にある。なお、IV A式の瓦当面には粉を振り散らと思われる細波のような痕がしばしば見られる。これは型につけた粘土を抜く工夫であったかもしれない。これらの瓦作成の瓦範はすべてB型瓦範が用いられる⁽²⁷⁾。

13は軒丸瓦V式である。山王庵寺出土の一本作り軒丸瓦のなかでは軒丸瓦VI式とともに出土点数が多い。瓦当上部の破片であるが、瓦当裏の無絞りの布目痕は丸瓦移行部の直下まで残り、この部分の粘土の厚さが薄かったことがわかる。I～IV式までの瓦当の製作には瓦範に厚さのうすい粘土を2～3回に分けて指で押し込み詰めることで瓦当が作られているのに対し、この例の瓦当の裏面には粘土を重ねた様な痕はない。瓦当の直径より小さい木範(木村氏の言うC型)を、瓦当面に打ちつけて瓦当紋様をつけたもの⁽²⁸⁾と思う。この破片からは、瓦当紋

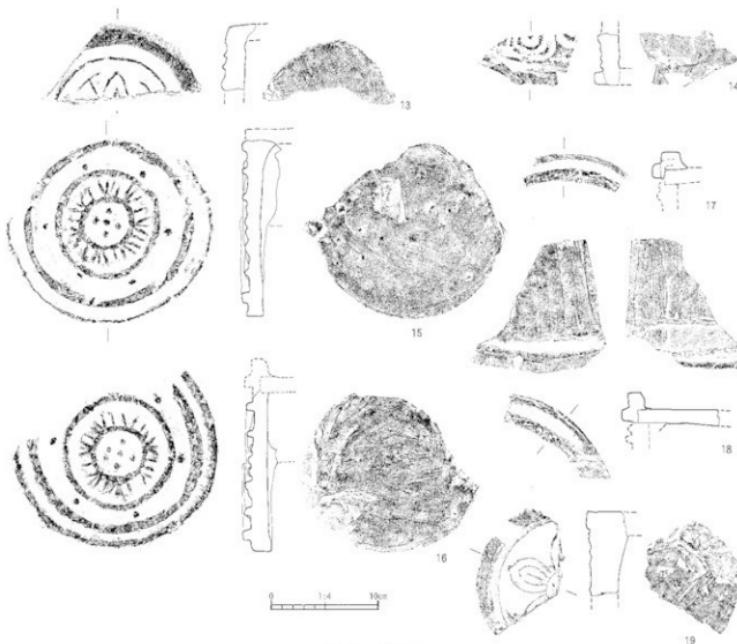


Fig.26 軒丸瓦 2

様の全体を窺うことはむずかしいが、重弁四弁の蓮弁で各弁の間に「T」字形の間弁を置いている。各弁端は中房に達する。中房は円窓紋の中央に「十」字形の紋様を置く。内区紋様は1本の囲線で囲まれている。囲線の外側、素紋の外縁との間に段が生じている。瓦筋はここまでもので界線の立ち上がり部分には木目痕が残っている。素紋の外縁は通常へラ削りして整えられたものが見られるが、13ではその様子はなく粘土板が焼木に沿って丸瓦部へ折り曲げ移行している。13は、19トレンチからの出土であるが12トレンチでより小さな破片が1点出土している。I~IV式に比較して胎土には砂粒を多く含む。「史跡上野国分寺跡」(以下では「僧寺」と呼ぶ)では同範例がA302と報告されている。

14は、VII B式軒丸瓦である。発掘調査では昨年度始めて出土した軒丸瓦である。昨年度と今年度の出土例は瓦当外縁部分でともに瓦当裏面には、無紋りの布目が残る。しかし、両者では外縁に相違がある。昨年の出土例は外縁が2段であるのに対し、今回のものはやや高い素紋の外縁となっている。また、瓦当裏面下部の突帯状の部分は、昨年度の物は狭く低く残るのに対し、今回の例では刃物で削りとられまったくない。住谷修氏編の『上野瓦集』に収録されている例は外縁には段がなく幅も今年の出土例よりも狭い。瓦当裏の布目と下部の突帯状の部分の幅が狭いことから、横置型の製作台を使って作られた一本作り軒丸瓦の可能性も考えられそうである。用いられた瓦筋はB型である。いわゆるC型瓦筋を用いて製作された軒丸瓦とは製作過程のうえでの違いがあるかもしれません。本例は瓦当面に2次的な火を受けて、溶解した物質が付着している。今回の資料によって、より疑

VI 出土瓦

問点が増えた感じもある。今後の出土資料をまちたい。12トレンチの出土である。19トレンチで1点他に小破片の出土があった。

15~18は、XII式軒丸瓦である。内区の蓮華紋は3本の棒で1組の複弁蓮華紋をあらわしすべてで七弁、その間に棒状の間弁が置かれている。複弁七弁蓮華紋を表現したと見てよい。中房・内区・外縁の間には通常の瓦より太い界線がある。中房は界線内に1+4の蓮子が置かれる。外区の珠紋数は6個である。15・16ではFig.・PL.で見るよう上方に別作りされた丸瓦が接合されるが、瓦当面には範傷が中房および外区の珠紋に見られる。15を例にとれば外区の右側の珠紋の1つの範傷が内外区界線を繋いでいる。この範傷は16では、左側の珠紋の1つに表われている。15と16では瓦当面と丸瓦の接合位置の関係が180度反対方向であることになる⁽³¹⁾。この瓦では外区界線の外側に1段低い平坦面が鈞のように付いている。この部分は瓦当面の低い部分と同じ高さとなるが、側面はこれに対して垂直であり、平滑な広い曲面を作っている。この部分に撫型が用いられたと考えられる⁽³²⁾。丸瓦の先端は15では、瓦当面に近い位置まで達した痕がある。また、16では一度瓦筋に粘土をつめた後、丸瓦接合位置に指で記しつけ瓦当に厚みを加えながら丸瓦をとりつけたと思われる痕がある。17では瓦筋に柳を設置した状態で丸瓦凸面側から指で粘土を糊付けしている。18では糊付けした後さらに工具で整形し、丸瓦凸面を削り整えている。丸瓦広端の径が瓦筋直径より短いため16の瓦当裏面の一端の側面には丸瓦の端がくるが、もう一端は鈞状に作らざるを得なかった(PL.15・26-16)。この瓦は非常に精製されたきめの細かい粘土が用いられ秋間産と推定されている。『僧寺』では、同範例M001が出土しているが、これには鈞状の部分がなく瓦当厚が3.6cm程と厚い。

19は、今年度始めて出土した軒丸瓦である。XIV式軒丸瓦と呼ぶ。蓮弁端の範傷が圓錐に達していることから上野国分寺創建瓦B201であると判断出来る。また、瓦当裏面がヘラ削りされているからa、b、cと三分されているなかのaにある⁽³³⁾。上野国分寺瓦の報告者高井住弘氏は台之原庵寺出土の同範瓦から横置型の一本作り製作台で作られたとし、これをB-3技法と呼んだ⁽³⁴⁾。瓦当裏には、布目や突帶状の部分はない。青灰色に硬く焼き上がる。胎土には石英粒が多く含まれる。破面にはI~IV式のようにすこしずつ瓦筋に粘土をつめたような痕はない。なお、瓦当面では外縁が一段高くなり、その外側には瓦筋の端が写しとられている。軒丸瓦V式よりもや大きなC型瓦筋が用いられた。17トレンチ出土。笠懸鹿ノ川窯が生産窯と推定されている。

(2) 軒平瓦 (Fig.27・28, PL.16・17, Tab. 5)

全体で103点と昨年度(61点)より多い出土点数があった。

その中で軒丸瓦と同様、南回廊推定地(19トレンチ)では瓦溜りには瓦片が多量に埋没していた。型式別では、平瓦凸面の格子目をスリ消した三重弧紋軒平瓦(II KB式)が多かった。

1・2の瓦当紋様は素綴であるが段頸がある(I K式)。大和法輪寺や常陸台度庵寺に類例⁽³⁵⁾はあるという。頸は2本の粘土紐を重ね張付けて作られる。1・2ともに平瓦部凹面は回転台上で横ナデ整形されている。1の凹面には斜行する分割計画線が刻まれており製作途中までは隅切軒平瓦として作られたらしい。灰色で硬く焼き上がる。胎土は精製された粘土が用いられる。2は淡灰色で1に比較してやや焼きは甘い。右側面を残す。側面は2面に面取りされる。1・2ともに19トレンチからの出土である。

今回は無頸(I式)の出土ではなく、段頸の軒平(I K式)のみ5片が出土した。

3~7は三重弧紋軒平瓦である。山王庵寺では最も出土点数が多い軒平瓦である。瓦当紋様を施紋する方法や工具などに相違が認められ細かい観察は現在も繼續中である⁽³⁶⁾。3は回転押し引きされた三重弧紋である。平瓦部凹面は綱目叩打されている。広端面を包むように瓦当紋様をつけるための粘土をつけ足している。重弧紋は孤線三本の太さや谷部分の間隔が整っている。このことから、粘土円筒が回転台上に置かれ、回転台の回転を利用して施紋されたと推定される(II NB式)。これを粘土円筒分割前の施紋と呼ぶことにする。この瓦では、綱目痕も横方向にナデ消されていて、僅かに平瓦部の端に消し残し部分がある。瓦当紋様の特徴は、山と谷の高低差が

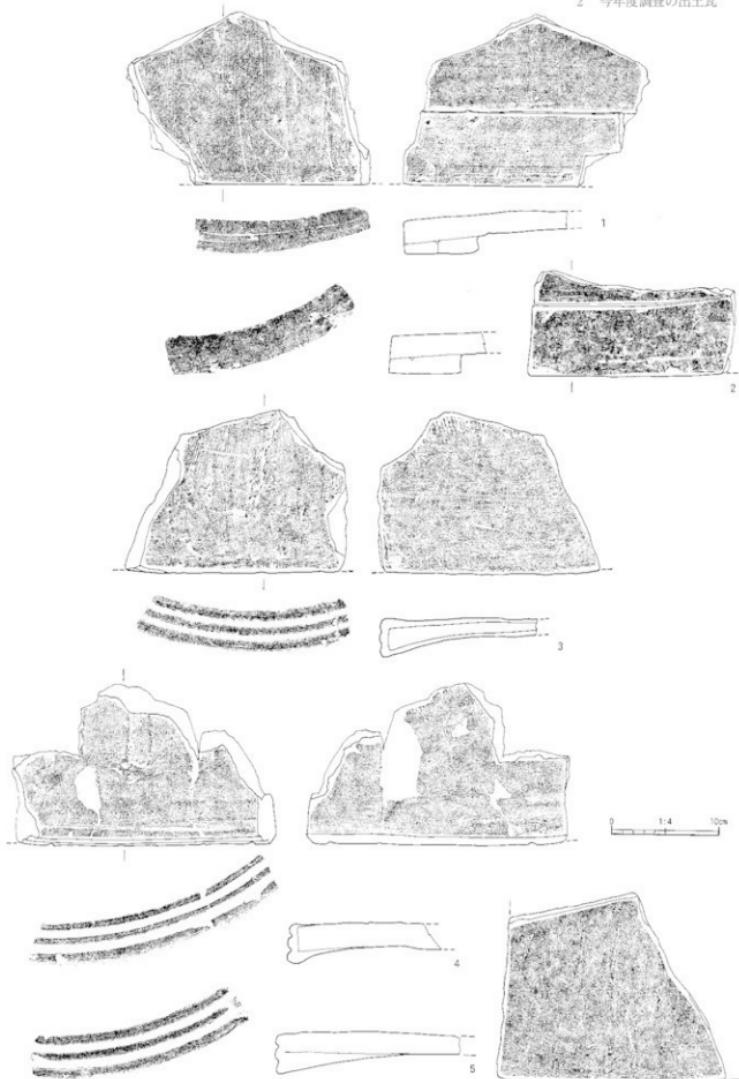


Fig.27 軒平瓦 1

VI 出土瓦

小さいこと。従って瓦当紋様が扁平で強さがないことである。谷はU字形。胎土には砂粒を含む。暗灰色に硬く焼ける。15トレンチ出土。他に3点の出土があった。

4・5は右側面を残し、瓦当面2分の1ほどの破片である。重弧紋は、粘土円筒分割前に施紋されたと推定出来る(II KB式)。3と比較した場合、重弧紋の山と谷の高低差が大きい。谷部はU字形。平瓦部凸面も横方向にナデられて叩打具痕(木製線刻叩打具による格子目紋など)は消されている。今回の調査での出土点数は70点を越え全体の70%に近い。4・5ともに15トレンチ出土。4は白色に焼きあがる。5は灰褐色で硬く焼きあがる。

6・7は、頸部に一本の隆起線があり貼付け段頸の大柄の軒平瓦である。既出例では瓦当面の弦幅は38.0cm近くあり、瓦当厚は5.0cmほどで山王庵寺出土の軒平瓦中最大の大きさである。この軒平瓦は、桶巻き作りされている。恐らく粘土円筒の状態で段頸部分の粘土も貼付けただろう。瓦当用粘土は広端凸面側に付加される。頸部の粘土の貼り付けには平瓦広端よりの凸面に刻み目を入れている。この軒瓦では、粘土円筒が大きく重いこともあってか粘土円筒の分割が瓦当紋様を施す以前に行われているものと思う。挿図ではさほど気にならないが、PL.16で28-6・7を見ていたら、三重弧紋が同心円状に施紋されていない。7は左側縁の破片であるが左端とその右側では大きくゆがみが生じている。また、三本の孤線の太さが一様でない。6では下の孤線にそれが見られる。恐らく粘土円筒を分割した後、凸型台上(平瓦部凸面に圧痕がある)に置き、一枚ずつ瓦当紋様を施紋したものと思われる。この場合、谷部はV字形である。頸部瓦当面寄りの一条の隆起線は、瓦当面の重弧紋を施紋した後、頸面の整形とともに施紋されたものと見え、7の隆起線の左端はつぶれている。比較的砂粒を多く含む軒瓦である(II KDgI式)。この軒平瓦と同じ瓦が高崎市新保町で出土している。関越自動車道建設に伴っての発掘調査で出土した。報告者は付近に寺院跡の存在を推定している。この遺跡では山王庵寺出土軒丸瓦VIII A式が別作りされた丸瓦を接合する方法で作られていることから両者の組合せ関係が推定出来る。また、報告者は軒丸瓦VIII A式の年代を740年頃と推定していることも興味ある指摘である⁽¹⁰⁾。6は11トレンチ。7は15トレンチ出土。今回はこの2点だけの出土であった。過去の調査でも出土量は多くない。

8・9は四重弧紋軒平瓦である。山王庵寺から出土している四重弧紋軒平瓦には繋てに平瓦部凸面の瓦当面に近い場所に隆起線一本がある。さらに頸部が直線ないし曲線頸の瓦(III KD式)と段頸の瓦(III KDg式)とがある。8・9は後者にある。これまで、この軒平瓦は4次調査で頸部に須恵器の副部に見られる桶描き波状紋のついたもの1点だけであった。今回の調査で新たに3点が追加された。8は、瓦当面の右半分ほどの破片であるが右側面近くで瓦当紋様が円弧を描かず歪んでいる(Fig.28-8、PL.17の28-8)。また、瓦当面を断面方向から見ると、瓦当面が波うって見える。平瓦部そのものは桶作りされているので粘土円筒を分割して出来た平瓦一枚ずつに重弧紋を押し引きしたものと考えた。9も段頸の瓦であるが8に比較して段が明瞭でない。また、最下段の弧紋が剥離していて、頸をつくる粘土が瓦当面および凸面側に付加されたことがわかる。この剥離面には粗い刻み目が入れられている。刻み目は2.5~3.5cmほどの間隔で瓦当面に対して85度ほどの傾きで一度、3.0~5.0cmの間隔で瓦当面に対して55度ほどの傾きで重ねて一度入っている。この瓦当用粘土接合のための刻み目は第4次調査出土瓦でも見られるから、この軒瓦の一つの製作工程であったと考える。8・9ともに精製された粘土が用いられている。平瓦部凸面側には焼成時、窯内での熱で灰釉状の光沢がつき、瓦当面には降灰が付着している。8は19トレンチ、9は15トレンチからの出土。全部で4点が出土した。

10は新たに出土した軒平瓦である。軒平瓦XIV式と呼ぶことにした。上野国分寺出土軒平瓦Z001がこれにあたるだろう。瓦当面が撥型の一枚作り軒平瓦である。瓦当紋様は二重の界線が枠となって、その上部内側の界線に連弧紋が連なったかの様な紋様である。とても唐草紋とは言えず、「僧寺」は「括弧形の紋様」と呼んでいる。胎土に石英粒を多く含む粗い粘土が用いられ暗茶褐色に焼き上がる。

(3) 丸・平瓦

全体の遺物出土量の中で最も多かったものは丸・平瓦片である。パン箱(長55×幅39×深14cm)で160箱の出土

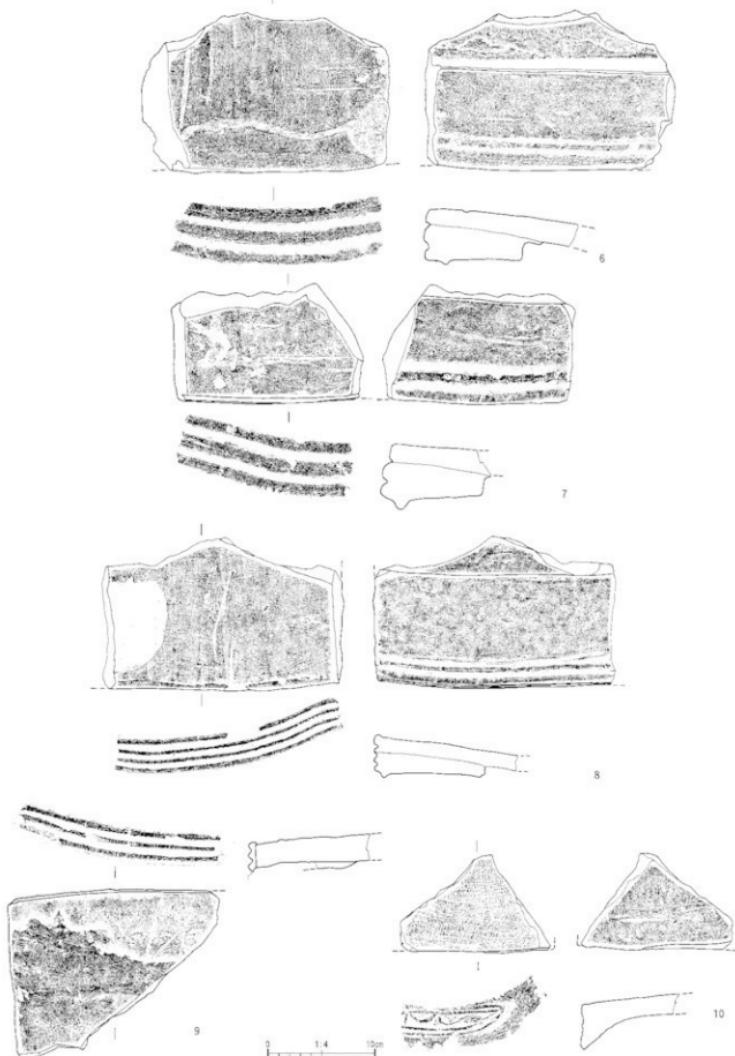


Fig.28 軒平瓦 2

VI 出土瓦

Tab.5 平成19年度調査出土軒瓦分類集計表

【軒瓦】

	10トレス 講堂北西	11トレス 講堂北	12トレス 金堂	13トレス 金堂	14トレス 金堂	15トレス 西回廊	17トレス 金堂南	18トレス 西回廊	19トレス 推南回廊	20トレス 寺城南	合計	%
I 式			1			2	4		7		14	8.0
II						3			9		12	6.9
III a						6			9		15	8.6
III b	1	1				1			3		6	3.4
III					1				3		4	2.3
IV						1	3		32		36	20.7
IV A									2		2	1.1
IV Ba												
IV Bb									3		3	1.7
IV B									3		3	1.7
IV C												
IV		1				2	5		42		50	28.7
III or IV	1	2							3		6	3.4
V		1							1		2	1.1
VI												
VII									2		2	1.1
VIII A												
VIII B		1							1		2	1.1
IX												
X I												
X II												
XIII	1					1			3		5	2.9
XIV								1			1	0.6
不 明	1				1	1	1		7		11	6.3
合 計	3	1	7		2	17	14		130		174	
%	1.7	0.6	4.0		1.1	9.8	8.0		74.7			

【軒瓦】

	10トレス 講堂北西	11トレス 講堂北	12トレス 金堂	13トレス 金堂	14トレス 金堂	15トレス 西回廊	17トレス 金堂南	18トレス 西回廊	19トレス 推南回廊	20トレス 寺城南	合計	%	
I													
I g	1	1					1			2		5	4.9
II NA													
II NB						3	1				4	3.9	
II NE													
II NF													
II KA													
II KB	1	2	2		1	19	3		43		71	68.9	
II KC						2	1		4		7	6.8	
II KD					1						1	1.0	
II KDg											2	1.9	
II KDgl		1				1					6	5.8	
II	1					1			4		1	1.0	
II KD		1									3	2.7	
III KDg					1						4	3.9	
IV													
V													
VI													
VII													
VIII													
IX									1		1	1.0	
不 明		1									1	1.0	
合 計	3	6	2		2	28	5		57		103		
%	2.9	5.8	1.9		1.9	27.2	4.9		55.3				

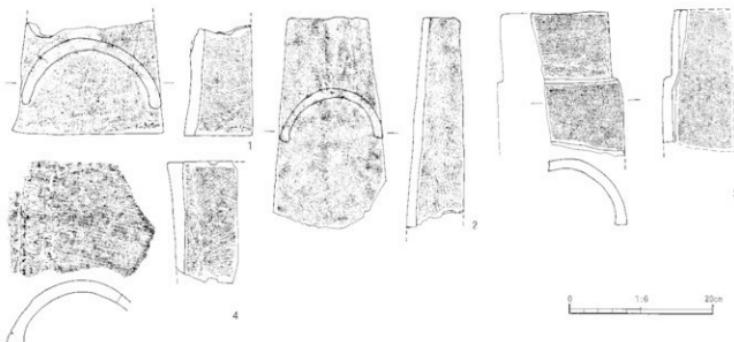


Fig.29 丸瓦

量があった。水洗・選別・接合・実測・拓本・ラベル記入などの作業に調査担当者と10人以上の作業員があたり、3~5月の大部分の時間をこれにあてた。

丸瓦 (Fig.26, PL.17の29~4) は特徴的なもの 4 点を選んだ。山王庵寺出土の丸瓦には行基式 (無段式)、玉縁式 (有段式) の両者がある。型木は両者ともに一本状のもので枠板 (模骨) を繰り合せたようなものはない。丸瓦製作用の回転台に型木 (造瓦具) を設置し、布筒を被せ粘土板を捲きつけ貼り合せる。木製線刻印具または糸巻印具で型木に巻きつけた粘土の表面を叩く。これで回転台上に粘土円筒が出来たことになる。粘土円筒の表面は回転台の回転によって整形される。玉縁式では段部が引き出される。この粘土円筒を乾燥・分割・整形・焼成して製品となる。一点づつ製作されたようなものはない⁽³¹⁶⁾。

1 は行基式丸瓦広端部の破片である。やや、分割後の重みにより幅が広がり浅くなった感じはあるが、広端部弧幅で20.3cm頂部からの深さ9.1cmほどである。凸面は回転台の回転による横ナギ。凹面は糸切り痕と布筒痕が残る。なお、粘土板の合せ目がこの面に残り (広端を下にして Z形)⁽³¹⁷⁾ 粘土の合せ目を指腹でナデしている。側面は内外に小さく面取り整形をし、広端では凹面側だけを削る。大粒の砂粒が胎土中に見られるが良質の粘土が用いられる。灰色、焼成も良い。19トレンチ瓦溜りからの出土。

2 も行基式丸瓦で狭端面を残す。現状で長さ28.0cmほどが残る。狭端弦幅10.8cm・弧深4.8cmほどを計るが18年度調査出土の丸瓦では、長32.0~40.0cmのものまである。今後、丸瓦についても整理・分類を通じて製作手法の細部や時間的な序列なども考えなければならない。2の凸面は横ナデ仕上げされるが斜格子紋が僅かに狭端縁寄りに残る。凹面には糸切痕と布筒痕が残る。この瓦でも粘土板の合せ目痕が残る (Z形)。左右の側面は凹面側のみを小さく面取りしている。狭端は削り仕上げ。暗灰色で硬く焼き上がる。良質の粘土が用いられ、茶黒色の粘土粒子が混ざる。19トレンチ瓦溜りからの出土。

3 は玉縁式丸瓦の玉縁の部分である。型木は玉縁となる部分の直径が胸部の直径より1.5cmほど短い。胸部から玉縁へは緩やかに移行する。いわゆるナデ肩である。型木に巻かれている粘土は玉縁部にまず巻かれた後、幅の広い胸部の粘土板が巻かれたらしい⁽³¹⁸⁾。凸面は玉縁の段付近の粘土の接合部を指で押さえて貼り合せ、回転台の回転 (右廻り) により玉縁・胸部を整えている。なお、胸部の凸面最上部は幅3.0cmほど最後に削り取っている。凹面には布筒痕と糸切痕が残る。側面・狭端面は刃物により水平に近い整形面となっている。分割は、玉縁部の凸面側に計画線が残り、凹面側の側線に粘土が張り出た部分があるから凸面側から刃物を入れて分割された。灰

VI 出土瓦

白色、良質の粘土が用いられている。金堂跡の西側14トレンチからの出土。

4は図の上部が広端面である。行基式であろうか。図の左側が右側面となるが、この部分が分割計画線が側縁と平行に1.2cmの間隔で凸面に引かれている(PL.17の29-4)。実はこの部分が粘土板の合せ目となっていて、特別に厚い。広端と右側面との隅角は上に重ねられた粘土が剥離し下の粘土板の上面が見えている(S型)。凸面は右廻りする回転台によって横ナデされているが、粘土板の接合面が凸面側で見られる稀な例である。凹面には糸切り痕、布筒痕、布筒の縫い合せ目痕が見られる。広端面は乾燥時に下向に置かれたと見え棒状の物の圧痕が残る。暗灰色、砂粒を含むが硬い。南回廊推定地19トレンチの瓦溜り出土。

平瓦(FIG.30, PL.17の30-1～PL.18) 山王庵寺に用いられた平瓦は桶巻き作りされて作られたものと、一枚作りされたものがある。両者ともに製作台や工具の違い、生産地の違いによっていくつかの種類に分けることが出来る。この分類はある程度の時の流れをも反映している。「放光寺」銘文字瓦が出土した『第6次発掘調査概報』で丸瓦を含めてI～III類までの3分類が示されている。出土文字瓦を分類し、それぞれの時間的な位置付けなどを考えようとしたものであった^(30c)。今日でも、この分類と配列は充分とは言えないが正しい側面もある。その後に、より良好な資料が増加していることも事実である。平瓦全体の編年観等については別稿での整理を考えたい。ここでは調査によって出土した良質の資料を報告する。

1・2は「第6次発掘調査概報」がIII類に分類した平瓦である。凸面を縱方向に綱巻印具で叩いたのち、狭端縁沿いを同じ印具で横方向に叩いているのが特徴とする。この瓦凹面の布目は、しばしば左右両側面から綱目の残る凸面側にまで続いた状況で残っている。また、狭端面側の布目も狭端面に圧痕を残すだけでなく凸面でも綱目と重なって見られる例がある。このことから、側面と狭端面を壁状につくったカマボコ形の平瓦一枚作りの製作台が推定出来る。「放光寺」・「方光」などの文字銘はこの瓦に伴っていた。また、「天長八」(831年)の文字銘がこの瓦から見出されたことで9世紀第2四半期頃この瓦が作られ用いられたと考えている^(30d)。1・2の平瓦は、III類平瓦そのものである。1は山王庵寺跡で始めて出土した全体のわかる資料である。長さ38.5cm、広端弦幅32.5cm、同深5.6cmほどで重量は5.01kgある。この平瓦の場合、製品一枚の大きさが製作台の大きさを写してとっていることになる。ただし、この瓦の場合でも、同種の他の資料でも凸面に2次整形台(凹型台)の圧痕と思われるものが残るので平瓦に与えられた曲率は多少の変化があったものと思う。製作者にとっては、一定の作業手順によって(熟練度の低い工人でも)企画品が製作できることになる。素材となる粘土の量や重量、必要枚数の見込み等考えやすくなつたものとも思う。灰白色で少量の砂粒を含む。講堂北方10トレンチのH-17号住居跡から出土。

2は、長さの判る資料で35.5cmが計れる。この瓦でも右側面に布目がまわり、側面の横断面が丸みを持っている。1の側面の断面と同様、台と粘土の剥離材である布が側面から凸面側にまわるため丸みが結果として付く。金堂跡13トレンチからの出土。この平瓦の出土遺跡は、上野国分寺跡で出土しているばかりでなく、利根川右岸、前橋市総社、元總社町を中心に一定の広がりを持っている^(30e)。生産窯は安中市秋間古窯である。

3・4は狭端面が残る桶巻き作り平瓦である。凸面には両者に平行線の叩打痕が残る。しかし、狭端弦幅は、3で28.1cm、4で24.8cm。狭端弦深では、3が3.4cm、4が4.7cm。厚さでは3が2.1cm、4が2.6cmと違いを見せる。3の凸面の左側では、糸切痕跡に重なって平行線叩打痕が残り、糸切痕跡と平行線叩打痕跡を潰して木目板状工具で右から左になでつけた痕がある。工具の軌跡はゆるい弧を描いているので、回転台の回転を利用して出来た軌跡ではなく粘土円筒を分割後の平瓦一枚ずつに施された整形痕ではないかと思われる^(30f)。整形痕に消しされたためか棒板痕(模骨痕)は見られない。大粒の砂粒を含むが精製された粘土が用いられる。どっしどと重い感じの粘土で暗茶灰色で高温で焼いている。4の場合には、木目板を使って瓦の表面を整形したような痕跡はなく凸面には平行線叩打痕が広端寄りに残る。凹面で布筒痕と糸切痕が残るが製作台の棒板(模骨痕)は見られない。4の断面図左端が厚くなっているのは、この付近に粘土板の合せ目痕があるからである。この瓦も

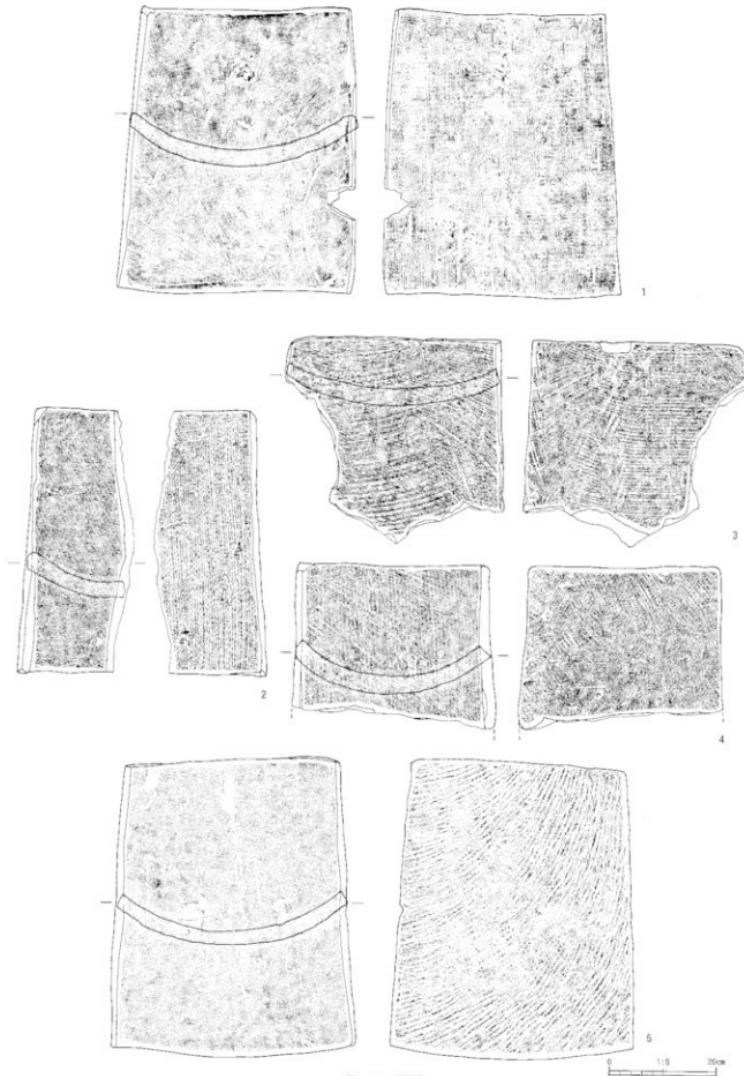


Fig.30 平瓦

VI 出土瓦

3によく似た胎土・焼き上がりである。3・4ともに南回廊推定地19トレンチからの出土である。3・4はよく似た平瓦である。仮りに両者が同じ粘土円筒から分割されたと仮定しても、桶巻き作りであるかぎり実測値のような相違が出やすかったろうと思われる。

5は、桶巻き作り繩目平瓦の完形品である。桶巻き作り繩目平瓦の完全な瓦の出土も今回の調査が始めてではないかと思われる。実測値で長39.9cm、広端弦幅32.5cm、広端弦深5.6cm、厚さ1.3cmが測れた。重量は4.4kgである。斜行する繩目痕跡から巻き呪具の大きさや単位を見きわめるのは困難であるが、羽子板状工具の横方向に巻きをし、佐原真氏が言う「叩き占めの円弧」^[22]が巻き呪具の動きによって打捺されたものではないかと思う。凸面全体に繩目痕は残る。凹面は全体に布筒痕が残る。うっすらと棹板痕（模骨痕）も見られるが压痕としては明瞭さを欠く。両側面、両端面は鋭い刃物で一気に整形されている。面取などは施されていない。灰白色で均質な粘土が用いられている。焼き上がりも良い。この瓦も19トレンチからの出土である。なお、胎土や焼き上がりでは違いを感じるが、秋間資料館に所蔵される刈畠窯跡採集瓦に類似^[23]していると思う。

(4) 道具瓦 (Fig.31)

鬼瓦（1・2）、面戸瓦（3）と推定される破片、隅に加工痕が残る破片（4～9）を作図した。表題を道具瓦としたが焼成前に刃物により抉りや切り欠きされた痕を残す瓦片であって、正確に道具瓦と呼べるものは鬼瓦片だけである。

1・2は手づくね鬼瓦片である。山王庵寺出土瓦で鬼瓦と報告されている例は、第7次調査^[24]・平成11年度調査^[25]・平成18年度調査^[26]である。平成11年度の調査では「僧寺」の鬼面紋鬼瓦の系統の型押し鬼瓦^[27]が、平成18年度には素紋鬼瓦が出土している。本年出土の2点の鬼瓦は、第7次調査出土の鬼瓦と同様の手づくね鬼瓦である。

1では、3.0cm余りの厚さの粘土板を台形状（鬼瓦の形）につくり、そのうえに粘土で眉・目・鼻・牙など鬼面を造作したものと思われる。図では、粘土板上の隆起部を左肩ないしは左目に近い鬼面の表現と考えた。が、上下を逆にすれば鬼面の右側の破片と考えることも矛盾はない。鬼面を笠書きの沈線で囲み、その外側は幅1cmほど の素紋の外縁となる。側面は削り仕上げ。裏面には糸切り痕が残る。多量の細かい砂粒が胎土中に見られる。暗灰色で硬く重い。17トレンチ出土。

2の破片は側面および素紋の外縁の1部がある。鬼面のどの部分に当たるのか判断に苦しむ。「く」字状に盛りあげられた紋様は、第7次調査で出土した鬼瓦の紋様によく似る。灰白色で1と同質の細かい砂粒が胎土中に混じる。裏面には糸切り痕が見られる。南回廊推定地19トレンチ瓦窯りで出土。笠懸窯産か。なお、手づくねの鬼瓦では、この他に平成10年の調査で鼻柱部分だけが剥離した状態で出土している。上野園内に見れば上野園分寺^[28]・高崎市城貫道路^[29]・多野郡吉井町黒熊中西道路^[30]などで手づくね鬼瓦が出土している。

3は、面戸瓦ではないかと考えた。通常面戸瓦は丸瓦を原体として作られるが本例の原体は平瓦である。いわゆる蟹面戸瓦と思うが甲羅の部分から右側にかけての曲線は面戸瓦と見てよいように思う。さらに甲羅にあたる部分の凸面側は小さく面取りし、凹面側はこれより広く削ってる点も面戸瓦を思わせる。原体となる平瓦は一枚作りされたと推定出来、胎土に鬼瓦と同じ細かい砂粒を混ぜて笠懸窯と推定したい。なお、面戸瓦と確定するには個体数が現状では1点だけで問題として残る。しかし、桶巻き作りされた秋間産平瓦の闊を丸く作るものとは明確に区別される^[31]。19トレンチからの出土。これによく似た瓦片が『第3次発掘調査概報』の図版12-10に報告されている。

4～8は、秋間産の瓦片であろう。胎土に黒茶色の粘土粒子が見られるのを特徴とする。また、すべて桶巻き作り平瓦の破片である。4は、右側面が残り端面に近い部分と思われる。全体の形はわからないがなにかの目的で抉りがつけられている。凸面は回転横ナデ。凹面の布筒痕はナデ消されている。厚さ2.3cm。灰白色であるが焼きも良い。19トレンチからの出土。

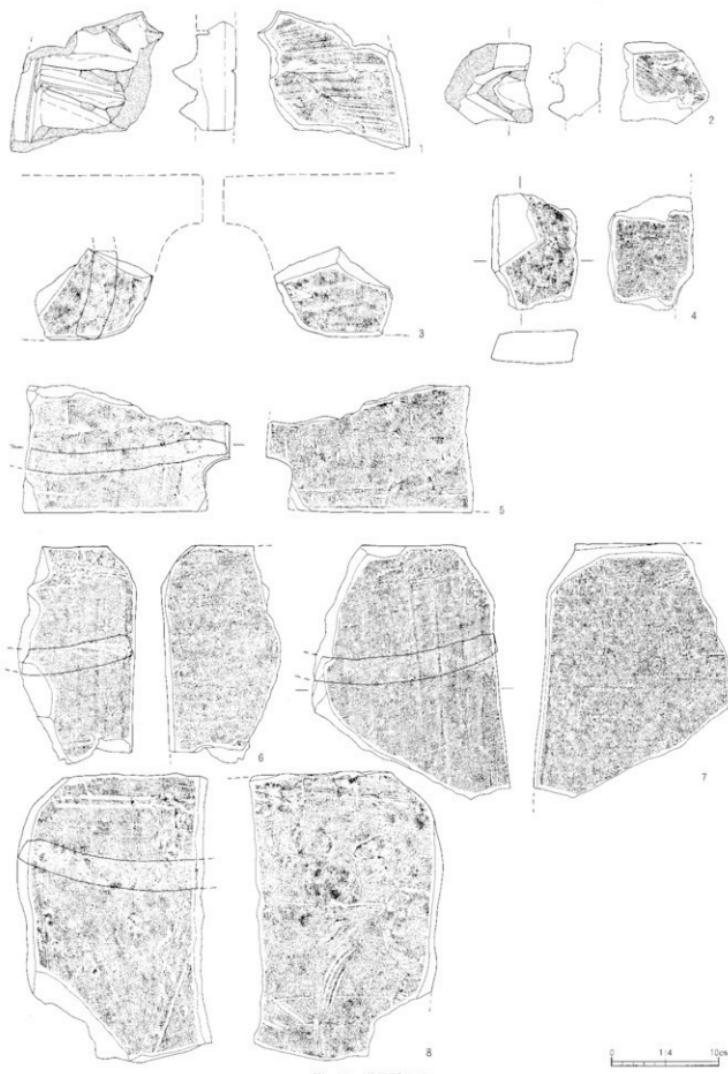


Fig.31 道具瓦など

VI 出土瓦

5は平瓦広端右隅の破片である。抉りが右隅に入れられているが広端面右隅は欠けて抉りの元の形を残していない。凸面は回転横ナデされた後、柳状工具で波状紋をつけたと思われる痕がある。凹面では、布筒痕と棒板痕（模骨痕）が残るが縱方向にナデ消された部分が多い。なお、抉りの周囲は焼成後、打撃を加えて剝ぎとり、厚さを薄くしている。暗灰色、須恵質に硬く焼き上がる。19トレンチ瓦掘り出土。

6・7は抉端面と右側面との隅の部分に切り欠きがある。切り欠かれた部分は刃物で二回段状に削っている点、安中市下秋間の八重巻平瓦の1部に隅を丸くつくる癖に通じるものがある。凸面は回転横ナデ、凹面には布筒痕と棒板痕が残る。図の上端では棒板を直接写しとっている。暗灰色で須恵器のように高温で焼き上げられている。金堂跡12トレンチ出土。

7も6と同じ場所を切り欠いている。7の場合一直線に切り取っているので隅切りした平瓦ともとれるが、切り欠き面は長さ5.2cmほどであるから意識して作られた隅切り平瓦とも考えにくい。凸面は回転横ナデ、凹面には明瞭な棒板痕と布筒痕が残る。灰白色であるが重く焼きしまる。金堂跡12トレンチ出土。

8は6・7と反対の竪端隅が丸味をつける感じで削られている。安中市下秋間八重巻窯平瓦の癖の一種と思う。凸面は回転横ナデ、凹面には布筒痕と棒板痕が残る。明灰色、大粒の砂粒を含む。重く硬く焼きしまつている。19トレンチ出土。

(5) 竪目瓦 (Fig.32, PL.19の32-2)

丸・平瓦の凹面に、布目ではなく疊表のような圧痕（横糸に蘭草状の織維の圧痕がつき縦糸には細い織維の圧痕が見える織物）のある破片が報告されたのは、山王庵寺では『第6次発掘調査概報』〔1980(昭55)〕である（報告書はこれを竪目痕と呼んでいる）。この種の破片が平成18年出土瓦の整理で小破片ばかり20点余が見つかった。出土場所は特別の地域に集中している様子はない。瓦が薄手で割れやすく、破片が小さいことからなかなか見つからなかつたものだろう。その後、高崎市綿貫遺跡・多野郡吉井町黒熊中西遺跡などの寺院遺跡から出土していることがわかつたが、川原嘉久治氏によって高崎市寺尾町の小塙窯^{〔三〕}で生産されたことが知られるようになった。川原氏によれば上野国分寺からも出土しているとされる。とすれば、特別な瓦でなく9世紀末から10世紀にかけてのごくあたり前に使われていた瓦と見たい。

1は行基式丸瓦の広端部の破片。厚さ1.1~1.7cmあり厚い部類に入る。凹面では蘭草状の織維が瓦の長軸方向に走る。凸面は回転横ナデ。粘土円筒を二分割して作られる。2も丸瓦片で右側面の一部が残る。この破片では蘭草状の織維が抜け落ちている部分がある。厚さは1.1cmほど。3は破片が小さく曲率からは丸・平を判定出来ない。厚さ1.0cm。1・2が西回廊跡15トレンチ出土。3は金堂跡14トレンチからの出土。3者とも表面はやや赤味をおびた暗灰色。割れ面は茶色から橙色。細かい石英粒・雲母片が胎土中に見られる。焼成温度はさほど高くない。

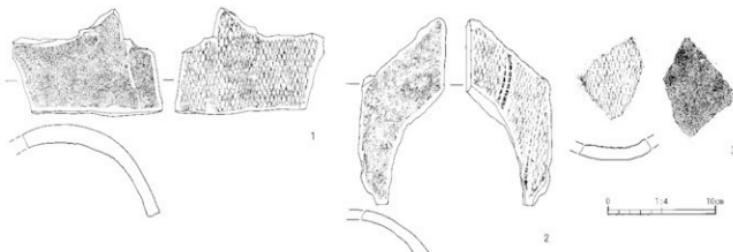


Fig.32 竪目瓦

(6) 文字瓦 (Fig.33~34、PL.19~21、Tab. 6・7)

19年度調査出土の文字瓦は、總てで60片に近い。このなかには、戯書き風ないしは絵画風の箆（指・刃物）書のものも含まれる (Tab. 7)。いわゆる文字資料として報告が必要と判断したものについては、その出土頻度も考えて一表とした (Tab. 6)。なお、18年度調査報告書作成後、一次選別作業だけで終っていた瓦片の中から、小破片であるが20片ほどの文字資料を見い出した。19年度の報告に合せて Fig.33・34、Tab. 6 に主要な 8 点を追録した。

1 は初出文字である。県内の文字資料関係の報告書のいくつかにあたったが類似した例は見い出してない。2 は、「長」である。「僧寺」では、65点の出土が記されている。さらに地名・人名の中の 1 字である可能性も考えられるが、この例では 1 字だけである。人名の例として 39 「長辻」（長麻呂）がある。「長」の字は 2 と 39 とでは 1 画と 2 画とで筆順が逆転している。字体としては問題ないのかもしれない。「辻」の字は、前澤和之氏によれば長岡京跡出土木簡の例から「麻呂」と解して良いようだ^[33]。

3 は箆書き「千」である。18年度調査でも 1 点の出土があった。「僧寺」でも出土例が多い。また、「僧寺」には二字「大手」もある。3 は明らかに 1 字である。5 は「光」と読まれている。「光」は第 6 次調査で 5 点の出土があった。箆を用いて豪快な文字が書かれている。第 6 次調査と今回の調査の出土例では筆跡も同じであるようだ。12・14・15・17・19 トレから各 1 点ずつ 5 点が出土している。山王庵寺以外では出土例を知らない文字瓦の 1 つである。9～19は、「七」である。18年度にも出土例がある。この文字銘は、丸瓦凸面・平瓦凹面に、刃物・箆・指などで記録されている。大きさもまちまちである。挿図には大・小 (Fig.34-12・13) を提示した。いわゆるⅢ類の瓦で、平瓦は完全形に近いものが (Fig.30-1、PL.17の30-1) 今年始め出土した。

20 は丸瓦凸面に見られる型押し「方光」である。発掘調査では「光」とともに第 6 次調査以来の出土である。この文字銘については意外と早く知られていたようで、相川竜雄氏は1934年（昭9）にすでに山王庵寺出土の文字瓦として発表^[34]している。さらに翌年には住谷修氏も、その存在を記している^[35]。相川・住谷両氏が紹介する「方光」は住谷氏所蔵のもので、恐らく高井氏が調査した 2 点のうちの 1 点であろう^[36]。【第 6 次調査概報】では、「方光」銘は木簡であること、文字に太い文字と細い文字の 2 種類があることを記している。20 でも文字銘の中に木目が走っている。丸瓦凸面には陰刻文字として現れている。両者の関係は細い文字から太い文字の木印に作り替えられた可能性も今後は検討する必要がある。

21・22は「大」である。この文字銘は、文字の大小、記録具の相違などの多様な分類の要素がある。山王庵寺・国分二寺に同じ筆跡と見られるもの、違うものの存在が考えられる。今後、まずは山王庵寺出土資料について検討を必要とする。

23は文字銘の半分以上が欠失している。既出土文字の中に類似例を求めたが、かなわなかった。今後の課題である。

24・25は同じ未解読の文字銘瓦である。「僧寺」に出土例は報告されていないようだが、尼寺・草作遺跡に同じ文字と思われる瓦がある。なお、今後、資料の照合が必要である。また、関越自動車道関連の調査「上野国分僧寺・尼寺中間地域」D 区 1 号井戸から出土している瓦44には箆で同じ文字が上下に 2 字記されている。平川潤氏は「坂」と読む提案をされている^[37]。

26は「井」である。PL.33-26では「井」の上に沈線がある。沈線には砂の動きがなく、これは紐状の繊維の圧痕と思われる。18年度報告では左字「井」があった。山王庵寺・国分二寺ともに出土していることで「大」の文字銘と同様の検討が今後必要である。

27は読めていない文字である。同じ筆跡と思われるものが平成 9・11 年の調査で合計 3 点出土している。山王庵寺以外では同じ文字らしいものの存在はわかっていないようだ。19 トレーナーからの出土である。

28は「人」である。山王庵寺では、文字の大小、記録具の相違などいくつかに分けられるものと思う。国分二

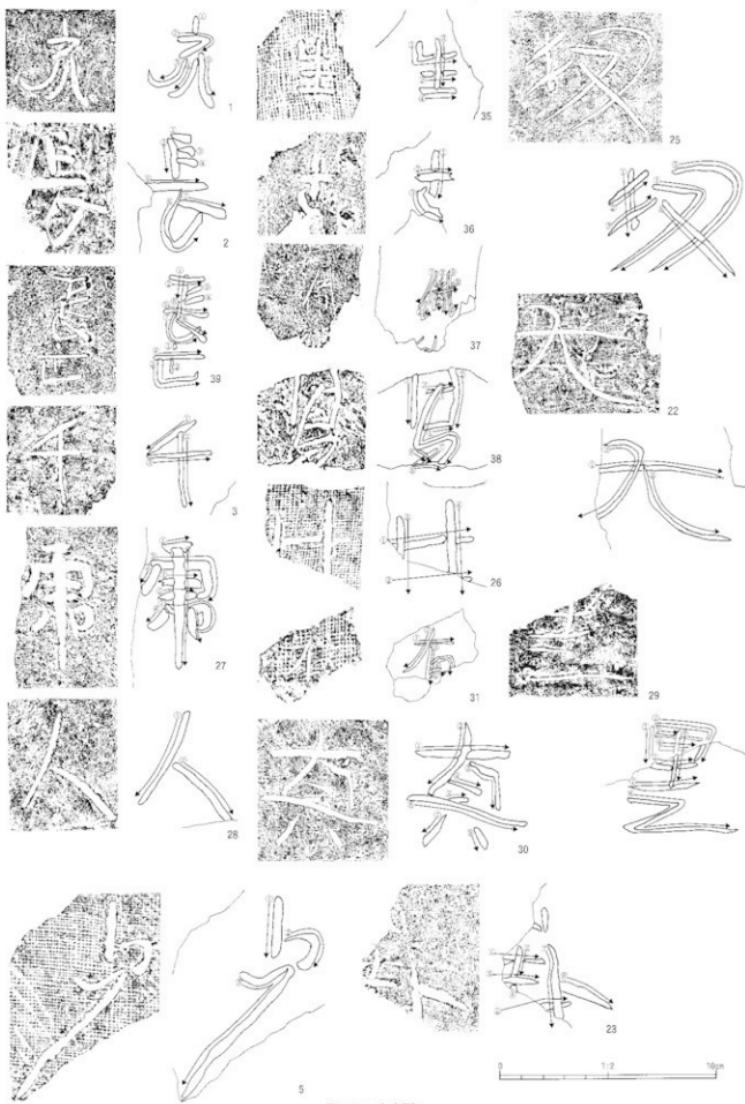


Fig.33 文字瓦 1

寺に同様のものが見られないのは不思議である。

29は上部が欠損するが、既出土例の箋書の筆跡から欠損部を推定した。この文字銘は、すでに福島氏の心證の発掘調査で出土したことが報告されている^[32]。「僧寺」には「里」があり、第7次調査では「黒」がある。福島氏は2字と考え「里○」と記している。福島氏の見方は、相川氏・住谷氏^[33]も踏襲している。明らかに1字であるとする根拠もない。文字の解釈を含め課題である。

30・31は「真」と読まれている。「僧寺」には異体字と左字もある。今回の出土点数を加えれば「僧寺」の出土例より多くなる。大きさや記録具などで分類は可能であろうが、解釈を含めて今後の課題である。

32は、指腹で大きな文字が3文字見られる。指の動きで「はね」や「とめ」が明瞭に表現されているから文字を知る人が記録したものであろう。1字も読めていないのは残念である。III類の平瓦である。

33～40は18年度出土資料である。33は「十」である。桶巻き作りされている。この文字は一枚作りの瓦にも多く見られる。国分二寺にも出土例がある。記号・数字など、その意味も一様でないものと思う。

34は木範型押し文字瓦である。木範には何文字かある。高井氏の教示によれば、国分寺からの出土ということでの住谷コレクションに同じものがあるという。

35は「生」である。「僧寺」に出土例があり同筆文字である可能性もある。「壬生部」、「壬生」氏^[34]の略とする読みを紹介している。

36は「辻」と読まれている。山王庵寺では4次調査で出土し、「僧寺」では「闕」の印と組合ったものが紹介されている。藤岡市金山瓦窯で闕の印を型押した瓦^[35]が出土している。

37は、少なくとも2字あるが下部の1字はかけている。「織口」は「僧寺」では、郷名+人名(多胡郡織蓑郷など)・人名(織アヤ)などに解釈されているが、このことから見ても山王庵寺本来の瓦ではないものと思う。

38は、平瓦の凸面に箋書きされている。この瓦は端面・両側面とともに欠失していて、布目と平瓦の曲率から作図したにすぎない。天地逆転の可能性もある。

39については2「長」のところで紹介を終えている。

40は、「三」であろう。笠懸窟窓の瓦の「三」とは異なるとの教示を高井氏から得ている。

41・42は「僧寺」でも報告例がある。記号であろうとされている。笠懸窓系のものか。

絵画風の箋描痕など(Fig.35, PL.21, Tab.7) 6の波状紋を含めて、いわゆる戯れ書きの類であろう。描かれた内容もわからない。1では、図の下が広端縁である。凸面縁の一枚作りされた平瓦である。凹面の布目は広端縁に沿った部分がヘラ削りされている。布目に重ねて意味不明の指書が描かれている。指書の重複は見たままの隣郭線で書いた。細く黒くつぶした線はやや深く箋によるもの。最も後から書き加えられている。

2は平瓦凸面に描かれたもの。この瓦片では側面・端面を欠く。凹面に枠板(模骨)痕があるから桶巻き作りされている。刃物によって針書状の線描がなされている。絵の上下は不明であるが、屋根のような絵とるとには、この向きである。絵は描かれたのちに縱方向に指ナデされた部分が中央と左寄りにある。

3は行基式丸瓦片で図の右が右側縁である。図の上部がやや跳ね上がる感じで割れているから狭端縁に近い部分だろう。また、側縁に沿った箋傷が分割計画線であれば複弁蓮華紋軒丸瓦に用いられている丸瓦の分割方法に通じるものがある。絵は、塔か相輪を描いたと思うがいかがなものか。側面寄りに描かれているから丸瓦を2分割する前の粘土円筒状態で描かれている可能性が高い。PL.21-3は実物大である。

4は桶巻き作りされた平瓦の狭端左側面の角隅の破片である。断面図のように通常の平瓦と違って、平行線の印板の痕が残る凸面が僅んでいて、布目の残る凹面がより上がっている。波状の箋書きがなにを表現したものか不明である。波状紋は、作図が正しいとすれば右手で描かれている。

5も桶巻き作りされた平瓦の凸面の図である。作図の右側に側面が残る。図の左上と右下では書かれた内容にも違いがある。左上の箋書きは直線で構成されている。黒くつぶした箋痕が白抜した箋書きに先行し、彫りも深い。



Fig.34 文字瓦 2

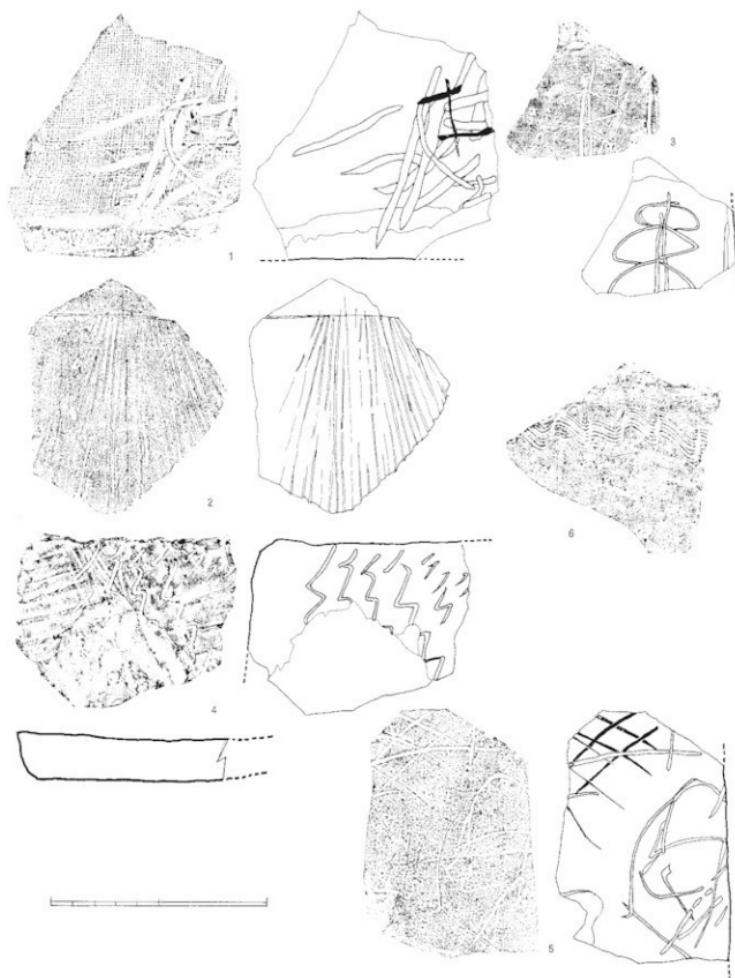


Fig.35 絵画風の篦描痕など

VI 出土瓦

Tab. 6 文字瓦一覧

説	出土場所	認 請 県 愛知県	Figs. PL-A	山王寺 選出土例 (PL-A)	開通道路 出土例 (PL-B)	特記事項	3分類 (註C)	整理 番号
1 武(未認)	19A135~19ト 譲北西方	篠 平・内・花邊彫り	Fig.30-1 PL-30/033-1	組出			10~9	
2 長	19A135~11ト 譲北北方	篠 平・内	Fig.30-2 PL-30/033-2	1H 1点	僧寺15点 尼寺・僧寺 では地名・人名がある	II	11~9	
3 手	19A135~11ト 譲東北方	篠 手・内	Fig.30-3 PL-30/033-3	2次・DH 1点	僧寺75点		II	11~10
4 光	19A135~12ト 金堂	篠 手・内		6次5点		調日ナダ消し丸瓦	III	12~10
5 光	19A135~14ト 金堂	篠 手・内	Fig.30-5 PL-30/033-5	6次5点		調日一枚作り平瓦	III	14~8
6 光	19A135~15ト 金堂	篠 手・内		6次5点		調日一枚作り平瓦	III	15~48
7 光	19A135~17ト 金堂	篠 手・内		6次5点		調日一枚作り平瓦	III	17~22
8 光	19A135~19ト 向輪軸頭部定形 等	篠 丸・内・手や右側面 等		6次5点		調日ナダ消し丸瓦	III	19~196
9 七	19A135~12ト 金堂	篠 手・内		3次・4次各1点 6次2点	9H 2点 1H 7点	明神磯・IK 広場を土にして記路	III	12~11
10 七	19A135~12ト 金堂	篠 丸・内		3次・4次各1点 6次2点	9H 3点 1H 7点	明神磯・IK 調日ナダ消し丸瓦 地図を土にして記路	III	12~12
11 七	19A135~12ト 金堂	篠 丸・内		3次・4次各1点 6次2点	9H 3点 1H 7点	調日ナダ消し丸瓦	III	12~14
12 七	19A135~15ト 西側面	篠 丸・内	Fig.30-12 PL-30/034-12	3次・4次各1点 6次2点	9H 2点 1H 7点	明神磯・IK 広場を土にして記路	III	15~46
13 七	19A135~15ト 西側面	篠 丸・内	Fig.30-13 PL-30/034-13	3次・4次各1点 6次2点	9H 3点 1H 7点	明神磯・IK 「七」としては小さい們	III	15~55
14 七	19A135~15ト 西側面	篠 手・内		3次・4次各1点 6次2点	9H 3点 1H 7点	明神磯・IK 広場を土にして記路	III	15~61
15 七	19A135~19ト 西側面	篠 丸・内		3次・4次各1点 6次2点	9H 2点 1H 7点	明神磯・IK 「七」としては大きい們	III	19~191
16 七	19A135~19ト 西側面定形	篠 手・内		3次・4次各1点 6次2点	9H 3点 1H 7点	明神磯・IK 「大」は筆跡にいくつか横顔がある	III	19~192
17 七	19A135~19ト 西側面定形	篠 手・内		3次・4次各1点 6次2点	9H 3点 1H 7点	明神磯・IK 「大」は筆跡にいくつか横顔がある	III	19~198
18 七	19A135~19ト 西側面	篠 手・内		3次・4次各1点 6次2点	9H 2点 1H 7点	明神磯・IK 「大」は筆跡にいくつか横顔がある	III	19~199
19 七	19A135~19ト 西側面定形	篠 手・内		3次・4次各1点 6次2点	9H 3点 1H 7点	明神磯・IK 「大」は筆跡にいくつか横顔がある	III	19~200
20 万瓦	19A135~12ト 金堂	4型型押 丸・内	Fig.30-20 PL-30/034-20	4次5点		明神磯 行持式丸瓦	註34~35 III	12~13
21 大	19A135~12ト 先の割れた様 金堂	篠 手・内	Fig.30-21 PL-30/033-21	篠島・3次各1点 4点 5点 6点2点	9H 1点 9H 1点 1H 3点	僧寺100点を越す 「大」は筆跡にいくつか横顔がある	III	12~16
22 大	19A135~14ト 金堂	篠 丸・内	Fig.30-22 PL-30/033-22	篠島・3次1点 4次1点 6 点10点 7次1点 9H 1点 1H 3点	僧寺100点を越す 尼寺	僧寺ナダ消し丸瓦	III	14~6
23 (未認)	19A135~15ト 西側面	篠 手・内	Fig.30-23 PL-30/033-23	組出		二重分割	II	15~58
24 (未認)	19A135~17ト 金堂	篠 手・内		2次1点 6次2点	尼寺 単作	註37	II	17~21
25 桶(未認)	19A135~19ト 西側面定形	篠 丸・内・手や右側面 等	Fig.30-25 PL-30/033-25	2次1点 6次2点 9H 3点 1H 4点	尼寺 単作	註37	II	19~194
26 角	19A135~19ト 西側面定形	篠 丸・内	Fig.30-26 PL-30/033-26	4次5点 9H 9点 1H 5点	僧寺35点 尼寺	上部の抵縫は直書きでない		19~187
27 滅(未認)	19A135~19ト 西側面定形	篠 丸・内	Fig.30-27 PL-30/033-27	9H 1点 1H 2点				19~188
28 人	19A135~19ト 西側面定形	篠 手・内	Fig.30-28 PL-30/033-28	8次6点 9H 4点 1H 1点		大(10cm前後)、小(6cm前後) がある	II	19~193
29 壁(未認)	19A135~19ト 西側面定形	篠 手・内	Fig.30-29 PL-30/033-29	篠島 6点 1点 1H 2点		註39	II	19~197
30 真	19A135~19ト 西側面定形	篠 手・内・中筋	Fig.30-30 PL-30/033-30	6次1点 9H 4点	僧寺24点			19~190
31 真	19A135~19ト 西側面	篠 手・内	Fig.30-31 PL-30/033-31	6次1点 9H 4点	僧寺24点	第2画がNo30と異なる		19~240
32 (未認)	19A135~14ト 金堂	篠 手・内	Fig.30-32 PL-30/033-32	4次2点 5次2点 6次2点 9H 4点 1H 3点	僧寺100点を越す 尼寺	種書き作り 大小2例がある 文字版、記号版がある	III	14~7
33 生	19A135~1ト レ	篠 丸・内	Fig.30-33 PL-30/033-33	組出	僧寺35点			
34 (未認)	19A135~1ト 金堂	刀物 手・内	Fig.30-34 PL-30/033-34	4次2点 5次2点 6次2点 9H 4点 1H 3点	僧寺100点を越す 尼寺	種書き作り 大小2例がある 文字版、記号版がある	II	
35 生	19A135~1ト レ	篠 丸・内	Fig.30-35 PL-30/033-35	組出	僧寺35点			
36 汗	19A135~1ト レ	篠 丸・内	Fig.30-36 PL-30/033-36	4次で述べ 18H 1点	僧寺	藤岡市金山瓦屋	II	
37 繩□	19A135~1ト レ	糸番 手・内	Fig.30-37 PL-30/033-37	組出	僧寺に「繩山長絆糸」 「繩」など	2字以上	II	
38 (未認)	19A135~1ト レ	篠 手・内	Fig.30-38 PL-30/033-38	組出				
39 肩合(未認)	19A135~1ト レ	篠 手・内	Fig.30-39 PL-30/033-39	組出	僧寺に「繩山長絆糸」 「肩合」がある			
40 三	19A135~1ト レ	篠 丸・内	Fig.34-40 PL-30/034-40		僧寺			
41 (足印)	19A135~19ト 西側面定形	篠 丸・内・花邊彫り	Fig.34-41 PL-30/034-41	組出	僧寺	内の直径1.9cm	II	19~202
42 (足印)	19A135~19ト 西側面定形	篠 丸・内・花邊彫り	Fig.34-42 PL-30/034-42	1H 1点	僧寺	付箋が吸い込んだ円柱状に なった粘土を持ち上げる		19~213

2 今年度調査の出土瓦

Tab.7 絵画風の箇描痕など

(NoはFig.35およびPL.21に対応する)

	内 容	Figs PL.8	出土場所	用具及び箇描部位等	備 考	3分類	整理 番号
1 不明	Fig.35-1 PL.21-1	19A135-15トレ 西回廊	瓦、平瓦広縫寄の破片、凹面に間に よるナメたような軌跡の上に、これよ り深い握痕が重なる	握痕ととかげるとか言えるほどものではない 握痕は図の右側に残っていた		III	15-54
2 不明 (建物の屋根)	Fig.35-2 PL.21-2	19A135-19トレ 西回廊確定地	切削 平瓦凸面 (場・側面がすべて欠 け)に描かれる。天地不明 布目・棒 板筋から削れる。本平に引いた縫合・重 疊で本平筋の上下にのびる縫合が一本 ある。この縫合を境として側面状態が不 規則に割れられる。図の左側の半分のア 部はナメ消されているが剥脱状態はこ の部分にはない。一見建物の屋根を想 起させる	握痕は破片の左右及び下方へ連続してい た。凹面には幅2.6cmほどの棒板筋が残 る		I	19-303
3 燭あるいは燭の相輪 を描いたものと考え たい	Fig.35-3 PL.21-3	19A135-15トレ 西回廊	瓦 丸瓦凸面 右側に側面の1部が残 る	握痕は図の下方に連続していた。側面に 進行して残る状況が分断型曲線であるな らば複複巻紋軒丸瓦との関係が考えら れる。(P型性) 図の上部は破損して生きた面を残してい ないが扶継筋付近と思われる		I	15-64
4 蔽方向の波状紋	Fig.35-4 PL.21-4	19A135-17トレ 金堂南	瓦 平瓦凸面に蔽方向の波状紋が描か れる	破片は斜削・側面を残す 作成のおりとすれば波状紋は上から下 に右手で描かれている この平瓦では凹面(布目側のある)と凸 面(平行筋印設を残す側)とでは平瓦の 通りが逆転している 波状紋は平行線設と併存する		I	17-23
5 ニヶ所に性質の異 なる縫合がある破片	Fig.35-5 PL.21-5	19A135-12トレ 金堂	瓦 平瓦凸面 四右側に側面を残す 図の左上では斜格子状の縫合が描かれ 右下では窪でナメつけたような縫合が ある	右下の図のさくらん右側へ転写していた この部分は粘土の隙間を埋めるときに失 われた 棒板筋跡から補書き作り平瓦と考えた		I	12-17
6 須恵器工人の標状施 紋による波状紋	Fig.35-6	19A135-15トレ 金堂	標状施紋具 平瓦凸面	同様の波状紋は軒瓦平瓦IKの1種に 1点 18年度調査で平瓦に4点 19年度 で3点出土 他の例では粘土円筒分割前に施紋されて いる 凹面には棒板筋が残る		I	15-63

右下の細い曲線で描かれた部分は物の形を表現しているとは思えない。平瓦製作時、粘土円筒が分割されていない状況で平瓦の製作とは無関係に書き付けられたものと思われる。

6は、須恵器の器面に施紋されている波状紋と同じ絞様である。このことも、寺院建立の初期の段階で、須恵器作りの人が瓦作りに動員された証拠となる。

文字瓦の頃を括るにあたって Tab. 8・9 に示した 3 分類の項を参照願いたい。平成18年度の報告でも記したが、これは『山王庵寺跡第6次発掘調査概報』に記された丸・平瓦の3分類である。分類の内容については註Cとして解説した。これによって、文字瓦等の一応の傾向が見てもらえるものと思う。すなわち、I類では文字瓦は今年度に限っては出土していない。昭和の調査に遡ってもその数は多くはない。最大10点まではないだろう。戯書や須恵器の波状紋と同じものがこのグループに集中する傾向が平成18年度に続いて伺える。

II類、「僧寺」出土の文字瓦と同筆ないしは同じ文字のものが多い。文字瓦の出土点数としてもこの時期が最も多いと見て良い。

III類、『須恵器』出土の文字瓦と同筆ないしは同じ文字のものが多い。文字瓦の出土点数としてもこの時期が最も多いと見て良い。

VI 出 土 瓦

(註)

- 1 平成18年度調査報告で示した分類基準に準じて Tab. 8・9 を作成した。但し、軒平瓦の分類基準について現状で整理しきれていない部分を含む。なお、Tab. 9 の③その他で用いている R（段鉄）はこれまで a を用いていたが、これは瓦範の彫り直しの新旧にからんで用いているので改めた。また、頸部に隆起線のある段鉄三重弧紋軒平瓦では大小の 2 種類がある。2 者を区別するために大きなものに ^ab をつけた。
- 2 木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」「造瓦と考古学」木村捷三郎先生頌寿記念論集 1976 (昭51) 木村氏は「瓦籠は、瓦当周縁部との関連の仕方で三つの型に分けられる」とし「瓦当の周縁外側まであるものを A 型、周縁部分まであるものを B 型（ただし、瓦当周縁が瓦籠の直徑より広いこともあり得る）、周縁部を除いて文様部だけのものを C 型とする。」とした。
- 3 瓦当に接合する丸瓦の先端で加工する目的は、瓦当と丸瓦をより強く接合することにある。この加工技法は、朝鮮半島三国時代百濟の仏教寺院の軒瓦に見られ（亀田修一『日韓古代瓦の研究』2006 [平18] 104頁）、飛鳥寺・坂田寺・和田庵寺などの単弁素丸瓦の丸瓦にも見られる（奈良国文化財研究所 古代瓦研究会 古代瓦研究会シンポジウム記録「古代瓦研究Ⅱ」2000 [平12]）から、瓦当紋様とともに日本に伝えられた技術である。下って、山田寺式軒丸瓦には、この伝統技法をうけつげ報告書が片柄I型・片柄II型・楔形と呼ぶような丸瓦広端面凹面の加工が見られる（奈良文化財研究所「山田寺発掘調査報告書」2002 [平14]）。山王庵寺軒丸瓦 I 式の丸瓦広端の加工は、丸瓦広端面を段状に削っている点で山田寺の報告書に見う片柄形に近いものと思う。また、上木本庵寺瓦室出土の軒丸瓦 A01-a 「單弁素丸瓦八弁軒丸瓦」では「丸瓦広端面の凹面側を斜めに削りキザミを入れている。」と報告されている（伊勢崎市教育委員会「上木本庵寺・上木本庵寺瓦室」2002 [平14]）。山王庵寺軒丸瓦 I 式の丸瓦先端の加工法に類似する。
- 4 広端凹面を削り斜格子状の刻み目のある丸瓦は見た限りにおいては格子目の大小はあるものの丁寧に造られているのに対し、平行線状の刻み目は刻み目自体が整ってない感じを受ける。斜格子状の刻み目のものが古いのではないか。
- 5 福垣晋也氏の言う「嵌め込み式」とは、氏の著す説cionによれば粘土円筒を嵌め込む方法で、粘土円筒の不用分を欠きとて軒丸瓦が出来上がる（『飛鳥・白鳳の古瓦』1970 (昭45)）。筆者も後立廟や興善寺の例を知っている。この点で粘土円筒を半蔵して出来た丸瓦を用いている山王庵寺例には異なっている。石川克博氏は瓦籠の端は、外縁の段まで瓦端を添わせるよう丸瓦の先端が付き粘土が瓦籠に埋められた（『山王庵寺の創建期について』『群馬県史研究』26 1987 (昭62)）と考えた。これに対し、松田氏は、「周縁の段差の部分で削離した資料は一点もなく一中略一内外周縁の段差面は連続しており、外縁を除く瓦当面全体が笠状によって形成されている」（『上毛国における古代寺院の創建』「信濃」43-4 1991 (平3)）とした。昨年および今年度の Fig.25-2 ~ 4 に見るように丸瓦の先端が瓦当紋様の 1 部となっていたことは明らかとなった。しかし、松田氏の指摘のように瓦当面全体が 1 つ瓦籠から出来ている感じは現実にある。つきつめば、瓦籠の端は、外縁の段まで、瓦当面全体までかということもかもしれない。いずれにせよ嵌め込み式に類似した方法で丸瓦は接合されていると考える。なお、瓦当に接合される丸瓦の先端が丸瓦の外縁の 1 部となっている例は朝鮮半島三国時代百済の丸瓦などにある。（蘇哉闕「熊野・泗沘郡百済丸瓦に對する編年研究」「朝鮮古代研究第 8 号」2001 朝鮮古代研究刊行会）この意味では、軒丸瓦 I 式は古形を残していると考える。
- 6 福垣晋也氏と大和巨勢寺の軒丸瓦（『飛鳥・白鳳の古瓦』中西素弁蓮華文 第一様 D 型 花弁彫刻尖形点珠形）の類似例として山王庵寺軒丸瓦 II 式を書中であげた。また、岡本東三氏は、同様に大和巨勢寺例を山王庵寺軒丸瓦 II 式の類似例としてとりあげた（『東国における初期寺院の成立』「東國の古代寺院と瓦」1994 (平5)）。軒丸瓦 II 式について福垣氏の言及はないが、岡本氏は山王庵寺創建期をこの軒丸瓦から「世纪第 II 四半期の可能性を考えて」と考える。
- 7 山王庵寺出土の複弁蓮華紋軒丸瓦の年代観について松田猛氏は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦を 7 世纪第 3 四半期に、複弁七弁蓮華紋軒丸瓦を第 4 四半期とすると。その理由はこの軒丸瓦の系統は川原寺系とは別系統のものと考えること。すなわち、大和應寺例や飛鳥池例などからの流れではないかとする（『佐野三家と山那部』『高崎市史研究』11 1999 (平11)）。また、岡本東三氏は山王庵寺軒丸瓦 I・II 式を創建期（I 期）に、III・IV 式を伽藍完成期（II 期）を飾った軒瓦とする（前掲書）。複弁蓮華紋軒丸瓦の山王庵寺での初現の時期や系統論はさておき、この後に続く軒丸瓦の多くが、上野國分寺の軒丸瓦と同様であるうえ一本作り法という変化を見せていく。これ等は、上野國分寺軒瓦の年代観から言えば多くは修造期と考えられる（高井佐弘「上野国における一本作り軒丸瓦の導入と転向」『群馬県埋蔵文化財事業団 研究紀要』22 2004 (平17)）。上野國分寺の創建を 8 世纪中頃と考えたとき、どうしても山王庵寺の 8 世纪前半をうめる軒瓦の存在が必要となる。これまで多数の論考があるなかで、複弁蓮華紋軒丸瓦まで含めて創建期の 1 つとする考え方がある。山王庵寺軒丸瓦のなかのどれを 8 世纪前半の軒瓦と考えるか、一考する必要がある。
- 8 山王庵寺軒丸瓦 V・VI 式などの瓦籠は瓦当文様が彫題されただけの単純なものである。瓦籠を瓦当面に打ち込み蓮華紋瓦当が出来たものと想像することはそれほど無理のないことである。また、素紋の外縁部分が刃物により削り仕上げされることも、この作り方を想定させる。山王庵寺出土の鬼瓦片の 1 つに見られる例であるが、瓦籠の上に置いた粘土を木桶で叩いて型に粘土を打ち込んだと思われるものがある。一枚作り軒丸瓦のいくつかはこうしてつくられたことを思わせると同時に軒瓦と鬼瓦が同一工房で作られたことも想像される。
- 9 梁原和彦「軒丸瓦の方向性について」「大宰府古文化論叢」下巻 1983 (昭58) 瓦当面と接合される丸瓦との間には、180°・90°などの一定の規則性がある。

- 10 梶型とは、軒丸瓦当の大きさや厚さを一定のものとする為に瓦範と組合せて軒丸瓦製作に使われた外型である。
- 星野順二 A 「造瓦に関する実証的研究」『古代学研究』10・1953(昭28)
- B 「鎧瓦製作と分割型」『考古学雑誌』67-2 1981(昭56)
- 11 高井住弘氏の確認を得ている。
- 12 横置型製作台を用いて軒丸瓦を一本作りする方法で、高井氏は、台之原庵寺出土例から上野国分寺創建瓦B201の製作法がこの方法であるとした(群馬県教育委員会「史跡上野国分寺発掘調査報告書」1988(平元))。136頁
- 13 桜庭晋也「飛鳥・白鳳の古瓦」1970(昭45) 桜庭平瓦 357・358
- 14 重弧紋軒平瓦の製作工程について 山崎信二「桶巻き作り軒平瓦の製作工程」『考古学論集』1993(平5)、岡本東三「4造瓦技法の諸問題(2)軒瓦の作り方」「東国の大寺寺院と瓦」1996(平8)、花谷浩「軒平瓦」『山寺田発掘調査報告書』2002などを参考にして、一般論としての重弧紋軒平瓦の製作方法を推測して見るとおよそ以下のようになる。
- ① 桶巻き作り平瓦の制作方法と同様に桶(造瓦具)を回転台上に設置し、タラ(捏ねあげて瓦製作用に整えた粘土塊)から板状の粘土を切り取り造瓦具に巻き先端を貼り合せる。出来上がった粘土の筒を粘土円筒と呼ぶ。粘土円筒から空気を抜くために刻線印板や籠巻印板で表面を叩く。
 - ② 粘土円筒の直徑の大きい方に重弧紋を施すための粘土を付加する。あるものは、段階となり、あるものは直線、曲線類となる。(山王庵寺では、粘土円筒の直徑の小さいほうに重弧紋を施す例もある。)
 - ③ 粘土の筒をはずし、回転台上に粘土の筒を天地に逆にして置く。(山王庵寺三重弧紋軒平瓦の場合、回転台上に天地を逆にして粘土円筒をおく。この粘土円筒に瓦当用粘土を付加したと考えられる。すなわち、瓦当用の粘土は平瓦の凸面側から広端面・凹面へと広端部を包み込むようにつけられたものが多い。)
 - ④ 一イ 部齒状の施紋具を用いて回転台の回転を利用して重弧紋を押し引く。この場合、回転台によって正円に近い重弧紋が引き出され、弧線の重なりも整っている。
 - ④ロ 粘土円筒を平瓦一枚づつに切り離した後に重弧紋を施したものもある。この場合、重弧紋を押し引きした個面の一端に粘土の食み出しがある。重弧紋それぞれの太さが異なる。特に瓦当面中央では大きく、両端では細い例がある。瓦当面を横断面方向から見ると瓦当面が水平となっていない。などの点が観察されるものがあり、平瓦一枚づつの状態で重弧紋が押し引かれたと考えられる。
- 以上ののような説例があるが、それぞれの軒平瓦各説の中で論じたい。
- 15 群馬県埋蔵文化財調査在事業団「新保道跡II、経澤遺跡」関西自動車道第19集 1988(昭63)
- 16 粘土巻き上げによる行基式丸瓦の存在が若干数見られる。手持ち資料では3点中の2点が凸面彫目入り消し仕上げされるが恐らく平瓦は桶巻き作りされたのが伴うであろう。
- 17 佐原 真「平瓦桶巻き作り」「考古学雑誌」58-2 1972(昭47) 広端面を下にして「粘土の合せ目」を考えた場合、2とおりの粘土板の合せ方が考えられる。すなわち1つは右側が外に左側が内側となる例でこれをZ形と呼ぶ。S形はその逆である。
- 18 大脇 肇「研究ノート 丸瓦の製作技術」「研究論集IX」1991(平3) この丸瓦の玉縁の製型法は大脇氏のいうBにあたり、飛鳥寺出土軒丸瓦B類(星眉)の玉縁にも見られる。(花谷浩「飛鳥寺・飛浦寺の創建瓦」「古代瓦研究」I 2000(平13))
- 19 萩原和彦「山王庵寺出土「放光寺」銘文字瓦をめぐる」『群馬文化』288号 2006(平18)
- 20 註19に同
- 21 3の平瓦片の凸面には、糸切り痕跡・平行線印目痕跡に重なって波状痕(糸切り痕跡とは区別される)が見られる。これを、ある種の整形痕と見なし波状痕と呼ぶことにした。重なり方は波状痕が最も新しい。この波状痕は恐らく板の木目によるものではないかと思う。また、この軌跡は回転台の回転で同じしたものではない。このことから、桶巻き作りされた粘土円筒を分割して1枚ずつになったものを整形をしたものと思う。この様子は、凹面側にも見られる。凹面では布筒痕跡・糸切り痕跡に重なって、波状痕跡がみられ、広い範囲で糸切り痕跡・布筒痕跡を消している。
- 22 註17に同
- 23 平成18年度、筆者は秋間資料館所蔵瓦を調査する機会を得た。
- 24 前橋市教育委員会「山王庵寺跡第7次調査概報1982(昭57) 17頁 摘図14
- 25 前橋市埋蔵文化財調査団「山王庵寺等V遺跡発掘調査報告書」2000(平13) 16頁 7片の出土を記している。型押しの鬼瓦片で少なくとも2種類がある。
- 26 前橋市教育委員会「山王庵寺-平成18年度調査報告書-」2007 46頁
- 27 群馬県教育委員会「史跡上野国分寺跡発掘調査報告書」1989(平元)では、「僧寺」にはA-Eの鬼瓦5種があり、D・Eが手づくね鬼瓦とい。なお、上野国内で見られる鬼瓦は、上野国分寺例が最古のものと思われる。この鬼瓦が鬼面のみのレリーフであるため、以後、上野国内では素彫鬼瓦を別として、手づくね鬼瓦まで鬼面のみを飾ることとなったものであろう。なお、型押鬼瓦から手づくね鬼瓦への変換点は畿内・九州では9世紀中ごろにあるものと思われる。上野国内での変換点もほぼこの頃と思われる。

VI 出 土 瓦

る。(九州歴史資料館「大宰府政府跡」2002(平14)　山本忠尚「鬼瓦」「日本の美術」391 1998(平10)至文堂)

28 註27に同

群馬県教育委員会「上野国分尼寺跡発掘調査報告書」1970(昭45)

群馬県教育委員会「上野国分尼寺跡発掘調査報告書」1971(昭46)

29 高崎市教育委員会「綿貫遺跡」1985(昭60)

30 帰群馬県埋蔵文化財調査事業団「黒熊中西遺跡(1)」1992(平4)

31 安中市下秋町所在、八重巻型出土桶巻き作①半瓦の中に、整形の崩であろう狭壠側の隅を丸く作るものがある。

32 川原嘉久治「西上野における古瓦散布地の様相」『研究紀要』10 1992(平4) 帰群馬県埋蔵文化財調査事業団

33 註27に同 231頁

34 相川竜雄「上野古瓦文字考」(一)「土毛及上毛人」208号 1934(昭9) 同書では、「方光」を人名と考えている。しかし、「山ノ上碑に見える放光寺僧の金石に依り「放光寺」を想定する人もあろう。」とも記している。同氏は、「上野国分寺文字瓦考」(『考古学雑誌』33巻12号 1934(昭9))の中でも、山王庵寺の項で「方光(本型捺)」と記している。

35 住谷修「上野古瓦文字考」(下)「土毛及上毛人」220号 「方光 墓押の文字」とある。

36 高井往弘氏によれば、墓押「方光」は住谷コレクションに2点あり「塔」・「塔跡」の貼り紙・墨書きがあるという。

37 帰群馬県埋蔵文化財調査事業団「上野国分僧寺・尼寺中間地域」(3) 関越自動車道関係第24集 1988(昭63) 195頁

38 福島武雄「日枝神社境内の大礎石」「土毛及上毛人」53号 1921(大10)

39 相川竜雄 註34および「土毛及上毛人」208号、住谷修 註35に同

40 註27に同 232頁 表11

41 藤岡市教育委員会「上野・金山瓦跡」1966(昭41)

以下の記A・B・CはTab.6・7の内容説明である。

A 山王庵寺既出土例欄には、発掘調査により出土した文字瓦の記入を考えた。欄内には限られた文字数しか記入できないことから、以下一連の報告に記号を与えることとした。出土頻度については2次～平成11年度までに出土し、事務局でカード化出来た数である。

略号

福島 福島武雄「日枝神社境内の大礎石」「土毛及上毛人」53号 1921(大10)

2次 前橋市教育委員会「山王庵寺跡第2次発掘調査概報」1976(昭51)

3次 前橋市教育委員会「山王庵寺跡第3次発掘調査概報」1977(昭52)

4次 前橋市教育委員会「山王庵寺跡第4次発掘調査概報」1978(昭53)

5次 前橋市教育委員会「山王庵寺跡第5次発掘調査概報」1979(昭54)

6次 前橋市教育委員会「山王庵寺跡第6次発掘調査概報」1980(昭55)

7次 前橋市教育委員会「山王庵寺跡第7次発掘調査概報」1982(昭57)

9H 平成9年度前橋市教育委員会発掘調査出土資料

11H 前橋市埋蔵文化財調査団「山王庵寺等V遺跡発掘調査報告書」 2000(平12)

18H 前橋市教育委員会「山王庵寺－平成18年度発掘調査報告書一」 2007(平19)

他 上記以外で山王庵寺の寺域内で発掘された出土した資料

なお、山王庵寺の第1次発掘調査は、前橋市教育委員会「文化財調査報告書」第五集 1975(昭50) に収録されているが文字瓦資料の出土はない。

B 関連遺跡出土例欄には、前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財調査団が実施した発掘調査・群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した発掘調査をはじめ県下の歴史時代関連遺跡の調査事例の成果を踏まえて関連遺跡とすべきである。この問題の解決は、ある程度の時間さえあれば実現可能であると思う。現時点ではとりあえず、文字瓦資料のうえで直接に同じ文字・同じ筆と考えて良い資料が出土している上野国分寺他の発掘調査報告書との照合を行うことに留めた。照合の結果は、略号を記入欄に記入した。

略号

僧寺 群馬県教育委員会「史跡上野国分寺跡発掘調査報告書」1989(平元)

尼寺 群馬県教育委員会・帰群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団「上野国分尼寺跡 上野国分二寺中間地域」1993(平5)

なお、「上野国分尼寺跡発掘調査報告書」1970(昭45)、「前同」1971(昭46)が上野国分尼寺跡の報告書としてあるが、文字瓦資料を図版・挿圖などで照合が出来るところから、1993年版を利用した。

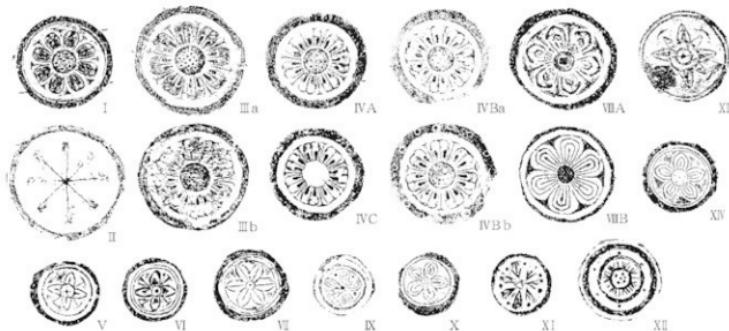
草作 前橋市教育委員会『草作遺跡』1985（昭60）

明神VII 前橋市埋蔵文化財調査団『元總社明神遺跡VII』1990（平2）

明神IX 前橋市埋蔵文化財調査団『元總社明神遺跡IX』1991（平3）

C 「山王庵寺跡第6次発掘調査報告書」では、「放光寺」銘文字瓦の発見によって記銘瓦の質的な分類を行った。報告では文字銘瓦を胎土・凸面調整・布目（1cm方眼中の縦横の糸数）、模骨痕の有無などから丸・平瓦と問わず3分類している。現時点では、分類そのものにや不足している点を感じるが対案を提示できるまでは至っていない。報告では「I類は山王庵寺創建期に遡ると考えられ、創建期の瓦には文字の書かれた瓦の量が非常に少なかったと推定される。山王庵寺に文字瓦の入ってきたのは、単弁四葉蓮華文瓦、ないし単弁四葉蓮華文瓦が用いられると同じ頃だと考えられる。III類もそれ以降であろう。」と記す。I類とされたものは桶巻き作り平瓦と凸面を横ナタで分割した丸瓦である。II類は一枚作り平瓦と2分割する丸瓦で、ともに凸面の叩き具痕はナデ消しきれっている。III類は彌巻叩打痕をそのまま残す一枚作り平瓦と彌巻叩打痕をナデ消した丸瓦である。概略、I類は創建期～8世紀前半頃までの瓦で安中市下秋間窯が主たる生産窯らしい。II類は「上野国分寺」報告書がその修造期とする8世紀後半以降になる吉井・藤岡方面で生産された瓦である。III類は「放光寺」銘文字瓦の年代のきめ手となった「天長八」の紀年銘から、9世紀第2四半世紀以降と考えている。この瓦は安中市秋間窯産である。

VI 出土瓦



(IX・X・XIVは同様例を「史跡上野国分寺跡」から転載)

軒丸瓦	昭和の調査						平成の調査					計	%
	2次	3次	4次	5次	6次	7次	H 3	H 9	H10	H11	不明		
I式	1	1	3	2	8	3		2		2	1	23	6.8
II	1	1			13	3		1		6		25	7.3
III a	1	2	1		7	2		1		6		20	5.9
III b	1				14			8		4		27	7.9
III			1		3			1		4		9	2.6
IV A	1	5	4	4	22	7	1	10	2	12	1	69	20.3
IV B a	1		3									4	1.2
IV B b			4	1				1				6	1.8
IV B	1			1								2	0.6
IV C					2	3		1		1	2	9	2.6
IV	1		3	1	10	2		19		8		44	12.9
III or IV	3			1	7	2		4		5		22	6.5
V		2			6	2		7		13		30	8.8
VI					1							1	0.3
VII		2			5	1		3		6		17	5.0
VI or VII										2		4	1.2
VIII A			2										
VIII B													
IX					1							1	0.3
X					1							1	0.3
XI					2							2	0.6
XII					3	1		1		2		7	2.0
XIII													
XIV													
形式不明													
接合式系	1					1				1		3	0.9
一本作り系								3		11		14	4.1
計	12	13	21	10	105	27	1	62	2	83	4	340	100

Tab. 8 出土軒丸瓦集計表（1974～99年）（昭和49～平成11年）

2 今年度調査の出土瓦



重弧紋の分類

- ① 平瓦凸面
N. 繩目
K. (格子)スリ消
- ② 瓦当施紋法など
A. 直接施紋
B. 瓦当用粘土付加
C. 瓦当用粘土付加のため、
平瓦に刻み目
D. 頸部隆起線紋
E. 一枚作り
F. 特殊工具
- ③ その他
G. 段頭
I. 分類基準が同一の二者の
うち大きなもの

軒平瓦	昭和の調査							平成の調査				不明	計	%
	2次	3次	4次	5次	6次	7次	H 4	H 9	H 10	H 11				
I 式				5			1				1	7	2.4	
I G	1		4	1					1	3		10	3.5	
II NA					1	1		3			12	17	5.9	
II NB				1	1	4			2		6	14	4.9	
II NE	1	1		1				1				4	1.4	
II NF	2						1					3	1.1	
II KA							1	2			8	11	3.8	
II KB	9	1	1	7	2	12		52	1	49	1	135	47.0	
II KC	1			4				4	1	12		22	7.6	
II KD		1	1				1		3		4	11	3.8	
II KDg											2	2	0.7	
II KDgl				1							1	2	0.7	
II K														
II	1							7		9		17	5.9	
III KD			4					1	1	2		8	2.8	
III KDg			1								1	0.3		
III KD or KDg														
IV					1		1					2	0.7	
V					1	3						4	1.4	
VI		1			2	1				1		5	1.7	
V or VI				1	1			2		5		9	3.1	
VII		1										1	0.3	
VIII		1										1	0.3	
IX														
不明									2		2	0.7		
計	15	6	18	15	12	21	1	77	4	116	3	288	100	

I. 刃物による削り仕上げ。II・III. 押し引き。IV～IX. 型押し。(V・VI・VII・IXは「史跡上野国分寺跡」から回収・同様別を軒瓦)

Tab. 9 出土軒平瓦集計表(1974～99年)(昭和49～平成11年)

VII その他の遺構と出土遺物

1 堅穴住居跡と出土遺物

H-16号住居跡 (Fig.19・36 PL.11)

位置 10トレンチ X127、S47・48グリッド
主軸方向 N-68°-E 形状等 方形と推測される。東西(3.08)m、南北3.60m、壁現高23cm。面積 (7.24)m² 床面 地山を床面とし、ほぼ平坦。検出面北東部分で浅く窪む。堅壁面の形成はみられない。竈 未検出 出土遺物 覆土中に平瓦数片、安山岩礫等6点が検出。重複 W-1号調跡と重複し、本遺構を切る。時期 時期を確定する遺物は出土していない。出土瓦等からみて平安時代と考えられる。

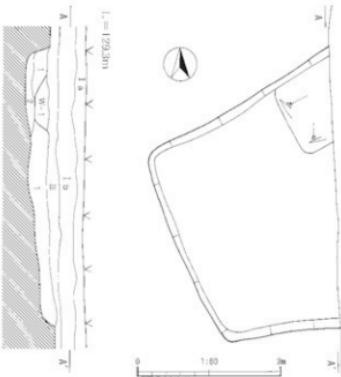


Fig.36 H-16号住居跡

H-17号住居跡 (Fig.19・37・38 PL.11・22)

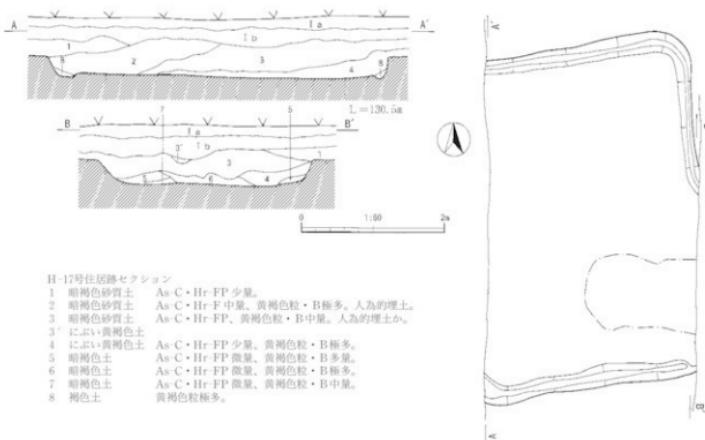


Fig.37 H-17号住居跡

位置 10トレンチ。X127、S49・50グリッド 主軸方向 N-83°—E 形状等 西半部および南東隅部分は調査区分外。方形と推定される。東西(3.35)m、南北4.90m、壁面高31.5cm。面積 (12.93)m² 床面 地山面を床面とし、ほぼ平坦で硬く締まる。覆土 南半部分において、地山黄褐色土ブロックを多量に含む人为的埋土が確認された(2・3層)。周溝 上幅最大25cm、下幅10cm前後、深さ5~8cm前後。竈 竈本体は未検出。ただ床面南東隅寄りに、堅敏面がみられ、東壁側に付設されている可能性が高い。出土遺物 図化した遺物は、一部を除き床面から出土した。このほか覆土中から、灰釉陶器、綠釉陶器、瓦類等を含め80数点出土し、その大半が1・2層中から出土している。時期 遺物から9世紀中頃と考えられる。

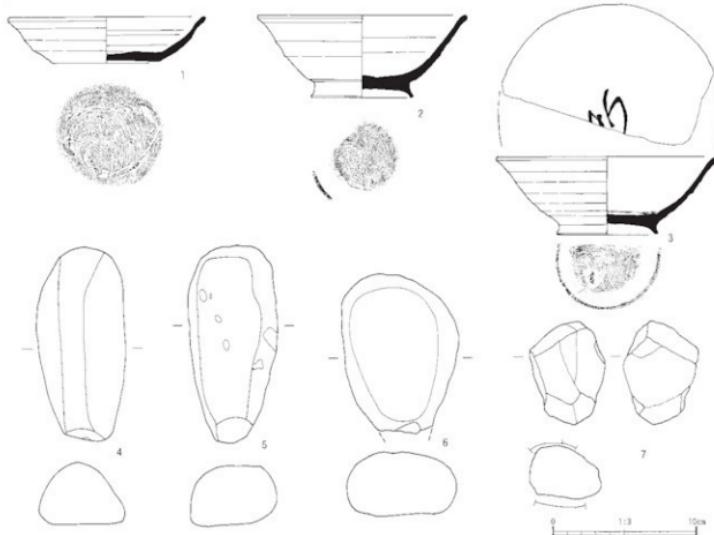


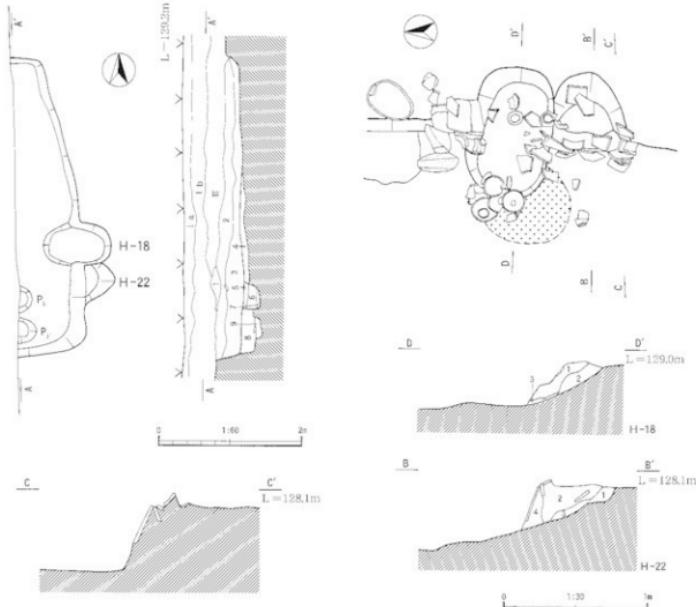
Fig.38 H-17号居住跡出土遺物

Tab.10 H-17号居住跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土 位置	①口径 ②器高	③胎土 ④焼成	⑤釉色 ⑥過火度	器種の特徴・基形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 杯	床面	①13.6 ②3.1 ③3.4	①繊粒 ②良好 ③黒 ④2/3	底面若干上げ感。体部の八字に湾曲、下平部若干膨らむ。口縁部わずかに外反。輪縫整形。口縁部内回転無。底部右回転赤切り。	1	織し焼成	
2	須恵器 高台碗	床面	①(14.4) ②5.6 ③7.0	①繊粒 ②良好 ③灰黄 ④1/4	高台部断面細身。体部下平膨らみ、口縁部わずかに外反。輪縫整形。口縁部内回転無。底部回転赤切り後、付け直す。	45	つくり丁寧	
3	須恵器 高台碗	床面	①(15.3) ②5.3 ③7.0	①繊粒 ②良好 ③明オーリーKQ1/2	高台部細身、対く外傾。体部の位筋5条、口縁部若干外反。輪縫整形。口縁部内回転無。底部内面墨脱「」、重ね焼き痕。	36	墨脱判読不明	
4	石製品 鉋輪石	床面	長-13.2 幅-6.0 厚-4.2 重-520g		断面三角形状。長軸片側端部に敲打痕。石材-輝石安山岩	80		
5	石製品 鉋輪石	床面	長-13.5 幅-6.0 厚-4.0 重-580g		断面梢円形状。長軸片側端部に敲打痕。斜軸両端部に擦れ痕。石材-輝石安山岩	26		
6	石製品 鉋	覆土	長-10.7 幅-8.0 厚-4.2 重-560g		半・断面梢円形状。長軸片側端部に敲打痕顯著。石材-輝石安山岩	79		
7	石製品 鉋	床面	長-7.1 幅-5.2 厚-3.5 重-59g		剥落痕顯著。断面3ヶ所に崩壊痕。石材-角閃石安山岩	84		

H-18・22号住居跡 (Fig.19・39~41 PL.11・12・22)

位置 10トレンチ。X127、S46・47グリッド 主軸方向 N-82°-E 形状等 東側の一部を検出。プラン確認の際、南東コーナー寄りに竈を2基検出した。土層観察からH-22(旧)からH-18(新)に竈をつくり替えていることが確認された。東西(1.29)m、南北(4.10)m、壁高35cmを測る。面積 (3.75)m² 床面 ほぼ平坦。貼床(4層)を施し、よく締まる。 竈 H-22(旧)：南東コーナー寄りに付設される。焚口部は竈をつくり替える際に瓦片で塞がれたものと思われる。H-18(新)：H-22竈の北側に付設。燃焼部は梢円形状に浅く窪む。主軸方向 N-90°-E、全長55cm、最大幅76cm、焚口部幅36cmを測る。焚口側には焼土分布がみられ、安山岩礫等が散在する。 出土遺物 電付近を中心に須恵器環・椀類がまとめて出土。また、H-22が付設された壁面には丸・平瓦類が立てかけられた状態で出土。壁面補強に使用したとみられる。 貯蔵穴 南東隅に2基。P₅が新しくP₆が旧い。 時期 出土遺物から9世紀末～10世紀前半頃と考えられる。



H-18・22号住居跡セクション:

- 黄褐色土 黄褐色粒・B土体。As-C・FP 微量。
- にじむ黄褐色砂質土 As-C・FP少量、黄褐色粒・B少量、炭化物微量。
- 暗褐色土 As-C・FP少量、黄褐色粒・B中量、炭化物多量。
- 褐色土 As-C・FP微量、黄褐色粒・B極多、粘土形成土。
- 暗褐色土 As-C・FP、燒土B、炭化物、黃褐色B少量。
- にじむ黄褐色土 As-C・FP、黄褐色粒・B少量、炭化物微量。
- にじむ黄褐色土 As-C・FP微量、黄褐色粒・B多量。
- にじむ黄褐色土 As-C・FP少量、黄褐色粒・B中量、炭化物微量。
(H-22)
- 黄褐色土 黄褐色粒・B土体。As-C・FP微量。 (H-22_v)

H-18号住居跡竈セクション:

- 暗赤褐色土 烧土主体。As-C・FP 少量、炭化物粒中量。
- 暗褐色土 As-C・FP、炭化物、燒土粒、黄褐色B少量。
- 床と織土の混合土。
- 2号住居跡竈セクション:
 - 暗赤褐色土 As-C・FP、燒土B少量。
 - 暗赤褐色砂質土 As-C・FP 中量。黄褐色C、燒土粒少量。
 - 暗赤褐色土 As-C・FP、燒土粒、黄褐色B少量。炭化物中量。
 - 黑褐色土 As-C・FP 中量。燒土颗粒、炭化物少量。被熱泥。

Fig.39 H-18・22号住居跡

I 懸穴住居跡と出土遺物

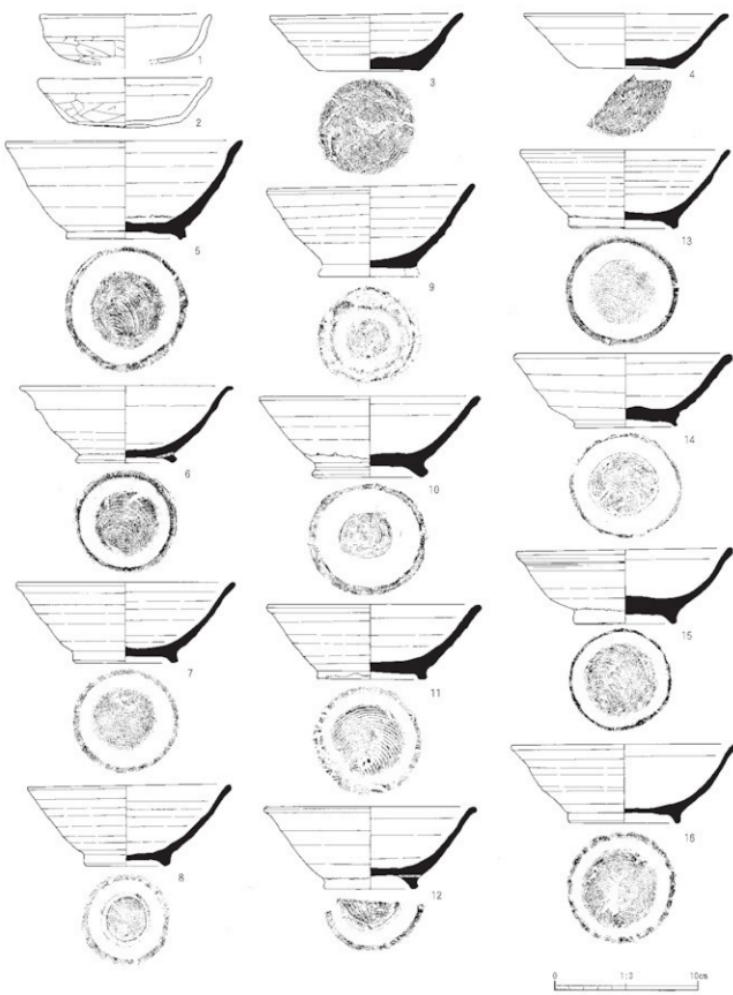


Fig.40 H-18・22号住居跡出土遺物(1)

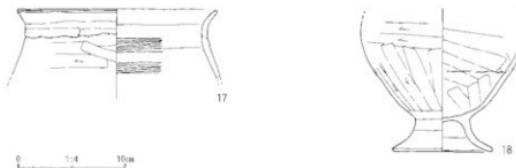


Fig.41 H-18・22号住居跡出土遺物(2)

Tab.11 H-18・22号住居跡出土遺物観察表

No	遺構名	出土層位	①口径 ②底径 ③底高 ④地土 ⑤焼成 ⑥度	遺構の特徴・形態・調整技術	登録番号	備考
1	土師器 壺	窓内	①(12.0) ②(3.4) ③中粒 ④良好 ⑤にぶい赤褐 ⑥1/4	底部平底気味。体部下丸み、口縁部変換点でわざかに棱形成。口縁部楕円形。底部半球形。底部下半周指握痕り。	46	口唇部絞尻
2	土師器 壺	窓内	①(12.0) ②(3.4) ③中粒 ④良好 ⑤にぶい赤褐 ⑥1/3	底部平底。体部変換点で折れ、体部外傾する。口縁部短く直立。口縁部楕円形。底部一帯半球形指握り。	86	
3	須恵器 壺	床上	①(3.4) ②(3.9) ③中粒 ④良好 ⑤褐色 ⑥3/4	底部一帯下半周内凹。底部わざかに上げた。体部外傾して開く。輪巻型。口縁部半球形。	44	床上+14
4	須恵器 壺	覆土	①(14.0) ②(3.8) ③中粒 ④良好 ⑤褐色 ⑥1/4	底部内凹一定。底部上弧弧。体部ハーフに外傾する。輪巻型。口縁部半球形。底部右側斜め切り。体部外側削除。	13	床上+25
5	須恵器 高台壺	床面	①(6.3) ②(6.7) ③中粒 ④褐色 ⑤灰黄褐 ⑥ほぼ完形	輪巻大形。高台部直く、駆け付後調整範。体部深く、外傾し、口縁部若干外傾。輪巻整形。口縁部半球無。内面部ねじ伏机。	35	
6	須恵器 高台壺	床面	①(14.6) ②(5.2) ③中粒 ④良好 ⑤褐色 ⑥1/6	高台部高い台状。駆け付窓。体部底面直面に外傾。口縁部外反する。輪巻整形。口縁部半球無。底部右側斜め切り。	47・66	
7	須恵器 高台壺	窓内	①(15.0) ②(5.5) ③中粒 ④良好 ⑤褐色 ⑥3/4	高台部高い台状。体部下端若干膨らみ、外傾して開く。輪巻整形。口縁部半球無。	81	
8	須恵器 高台壺	窓内	①(34.0) ②(25.5) ③中粒 ④良好 ⑤灰黄褐 ⑥ほぼ完形	底部小さく、高台部直く直立。駆け付後の調整範。体部外傾。輪巻整形。口縁部半球無。底部左側斜め切り。	49	
9	須恵器 高台壺	窓内	①(34.3) ②(5.5) ③中粒 ④良好 ⑤褐色 ⑥2/3	輪形面に似る。底部高台部駆け付。輪巻整形。口縁部半球無。体部直窓。輪巻面無。	39	
10	須恵器 壺・ 高台壺	床面	①(35.2) ②(25.5) ③中粒 ④褐色 ⑤灰黄褐 ⑥ほぼ完形	高台部高い台状。体部下端若干膨らみ、外傾して開く。輪巻整形。口縁部半球無。底部右側斜め切り。	81	
11	須恵器 高台壺	床面	①(34.8) ②(5.1) ③中粒 ④褐色 ⑤灰黄褐 ⑥ほぼ完形	輪形面に似る。底部高台部駆け付。底部左側斜め切り。	36	胎土やや粗
12	須恵器 高台壺	床面	①(34.7) ②(5.6) ③中粒 ④良好 ⑤褐色 ⑥1/4	輪形面に似る。底部外傾して開き、口縁部わざかに外反。輪巻整形。口縁部半球無。底部右側斜め切り。	43	織し成形
13	須恵器 高台壺	床面	①(34.4) ②(5.4) ③中粒 ④褐色 ⑤にぶい黄褐 ⑥2/3	高台部断面台形状、直く直立。駆け付調整範。体部へ口縁部外傾して開く。輪巻整形。口縁部半球無。底部右側斜め切り。	38	
14	須恵器 高台壺	床面	①(35.0) ②(5.1) ③中粒 ④褐色 ⑤灰黄褐 ⑥ほぼ完形	高台部小さく、下端でさらに外傾。体部下端丸み、口縁部若干外傾。輪巻整形。口縁部半球無。底部右側斜め切り。	33	胎内やや厚
15	須恵器 高台壺	床面	①(34.9) ②(5.2) ③中粒 ④良好 ⑤褐色 ⑥ほぼ完形	高台部直く直立。新規ひびき。体部やや丸く曲、口縁部わざかに外反する。輪巻整形。口縁部半球無。高台部駆け付窓。	45	胎内厚い
16	須恵器 高台壺	床面	①(15.5) ②(5.4) ③中粒 ④褐色 ⑤にぶい黄褐 ⑥3/4	高台部直く直立。体部左側斜め。口縁部左側斜め。口縁部半球無。底部左側斜め切り。	37・55	胎内薄い
17	土師器 壺	窓内	①(18.4) ②(—) ③中粒 ④良好 ⑤褐色 ⑥口縁部 斜め	口縫部半直立。上方で外傾。肩幅り小さい。口縁部横張て。肩部横斜め。斜面削除。口縫部沈線狀。	85	
18	土師器 台付壺	覆土	①— ②— ③台脚幅(9.2)	右部が反対味に開く。底部内側にして立ち上がる。底部内窓。底部外側・斜面削除。内面部・直面削除。底部右側斜め。	11・26	

H-19号住居跡 (Fig.19・42 PL.12・22)

位置 10トレンチ。X127、S46・47グリッド 主軸方向 N-83°E 形状等 南東辺側は未検出。西辺側は一部擾乱土坑と、南西隅でH-18と重複する。形状は南北に長い長方形と推定される。規模は東西(2.97)m、南北4.16m、壁面高41cmを測る。北壁中央やや東寄りにテラス状の高まりを検出。段差約7cm。面積 (10.50)m² 床面 地山直上面でほぼ平坦。全体的に締まる。竈 東南コーナー寄りに焼土・炭化物分布がみられ、南東辺側に付設されたと思われる。 出土遺物 住居跡全体に散在する他、竈周辺付近に多い。土師器・須恵器・瓦類・疊類のほか、鉄滓 (Fig.57・5・6)、鉄製品 (Fig.58-4~6) 等総数137点が出土した。貯蔵穴・ピット P₃ は貯蔵穴で長円形、深さ20cm。P₃は深さ15cm。 時期 出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

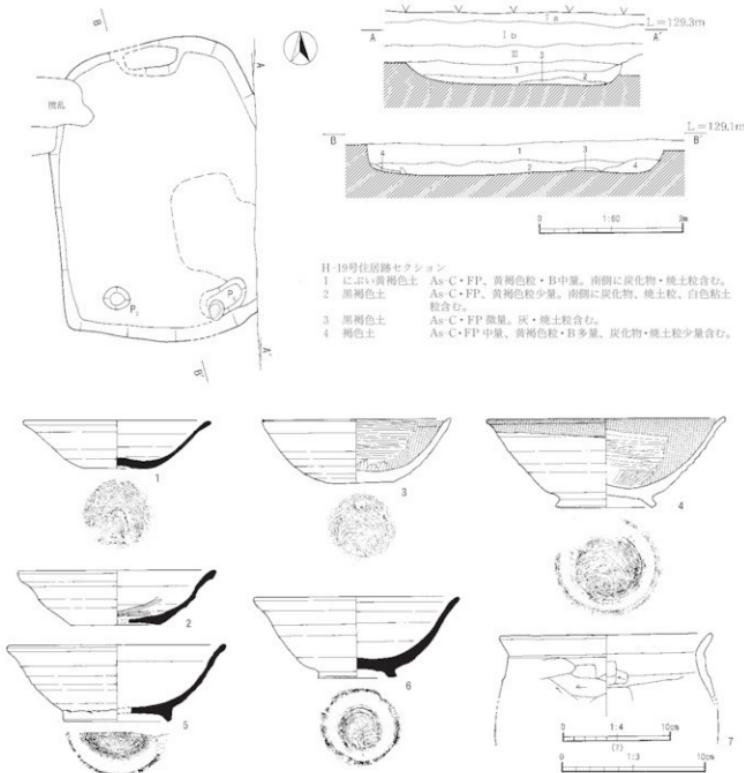


Fig.42 H-19号住居跡・出土遺物

Tab.12 H-19号住居跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土 層位 目次	①CT値 ②器高 ③底径	④前土 ⑤底況 ⑥色調 ⑦造形度	器種の特徴・意匠・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 环	床面 ③4.8	①(13.0) ②3.3 ③にぶい黄褐色	①細粒 ②やや不良 ③にぶい黄褐色 ④1/2	底部小さく、若干上げて、体部ハバの形状。口縁部外反する。器内薄い。 輪縁整形。口縁部凹凸無し。底部右側斜め切り。	119・130	
2	須恵器 环	床面 ③(6.0)	①(13.6) ②3.7 ③にぶい黄褐色	①細粒 ②陶化稍 ③にぶい黄褐色 ④1/4	体部ハバで彫み、口縁部外反する。器内薄い。輪縁整形。口縁部凹 凸無し。底部右側斜め切り。体部内面鋸歯き裂。	113	
3	内 黑 环	床面 ③4.7	①(13.0) ②4.4 ③にぶい黒	①細粒 ②良好 ③にぶい黒 ④2/5	小さい平底の底盤。体部丸く、口縁部で外傾する。輪縁整形。内黒低 後内面鋸歯横方に凹窓。口縁部外側に凹窓。	111	
4	内 黑 高台碗	床面 ③(5.0)	①(16.4) ②6.1 ③にぶい赤褐色	①細粒 ②良好 ③にぶい赤褐色	高台面圓台形器。口外傾。体部下端丸み、上半外傾。口縁部外反。 輪縁整形。内面窓、横窓で外傾き。	1	
5	須恵器 高台碗	覆土 ③(7.4)	①(15.0) ②25.2 ③灰黃	①中粒 ②やや不良 ③灰黃 ④1/4	高台部高く直角。体部下端丸み、口縁部外反する。口縁部丸み。輪縁整 形。口縁部凹凸無し。底部右側斜め切り。粘付有り。	50	
6	須恵器 高台碗	床面 ③(5.5)	①(14.2) ②25.5 ③灰白	①細粒 ②良好 ③灰白 ④1/3	楕円形。右形狀の高台。底部下端丸み、口縁部外反する。輪縁整形。 口縁部凹凸無し。底部高台貼付け無し。底部右側斜め切り。	112・126	底部小さい
7	土器形 壺	覆土 ③—	①(19.5) ②— ③明灰	①中粒 ②良好 ③明灰 ④口縁部片	やや内窓。口縁部「丁」の字型。肩部が張り込小さい。口縁部撫でつ け。肩記標、斜位開口。内面指・捏ねで。	117	

VII その他の遺構と出土遺物

H-20号住居跡 (Fig.19)

位置 10トレンチ。X127、S45グリッド
主軸方向 N-93°-E **形状等** 南東辺の一部が検出されたのみで、
詳細は不明。壁現高22cmを測る。**時期** 周辺住居跡との主軸方向等の比較から、平安時代と考えられる。

H-21・30号住居跡 (Fig.19・43・44 PL.22)

位置 10トレンチ。X127、S44グリッド 主軸方向 N-85°E 形状等 南北に長い隅丸長方形と推測される。東西2.40m、南北3.18m、壁現高36.5cmを測る。面積 (7.07)m² 床面 地山を床面とし、ほぼ平坦。窓東壁やや南寄りに付設。左袖側に安山岩自然縞を設置、燃焼部中央に長円窓を据え支脚材とする。主軸方向N-78°E、全長(41)cm、焚口幅40cmを測る。重複 H-30号住居跡と重複し、これを切る。H-30については、詳細不明。出土遺物 住居跡全体に散在。床面から灰釉陶器高台椀(5)、羽釜(7)等が出土。時期 出土遺物から10世紀後半代と考えられる。

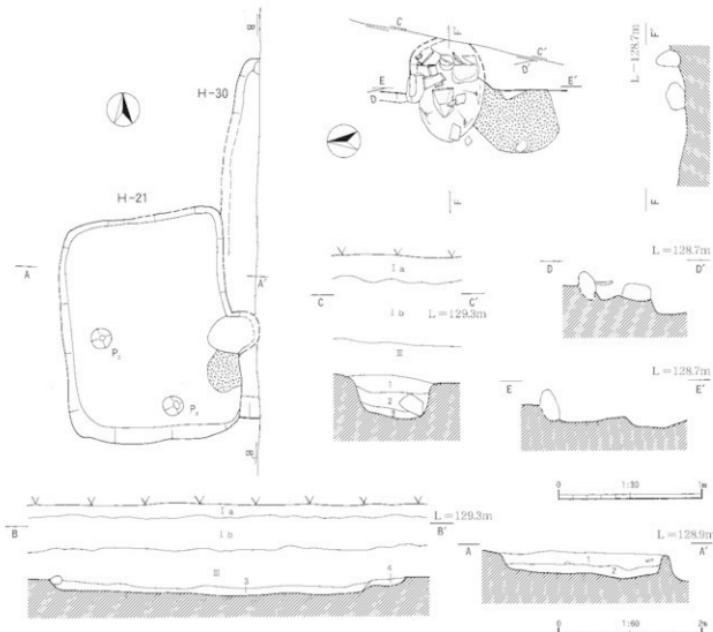


Fig.43 H-21号住居跡

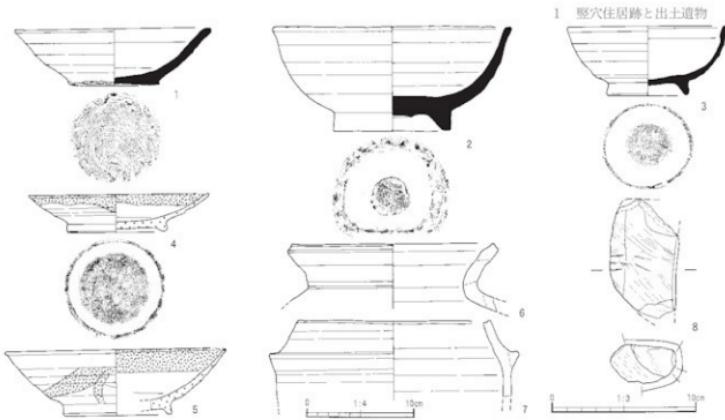
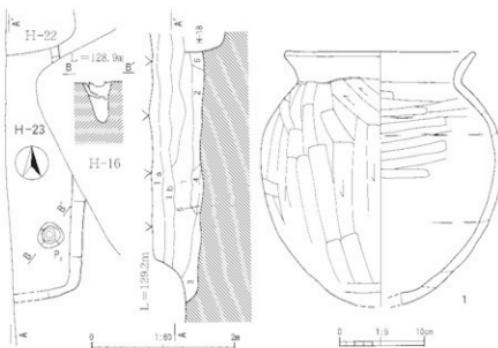


Fig.44 H-21号住居跡出土遺物

Tab.13 H-21号住居跡出土遺物観察表

No.	遺物名	出土 層位	①口径 ②底高 ③底径	④底土 ⑤底成 ⑥道存度	遺物の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須志器 環	覆土	①(33.5 ②30.9 ③36.2)	④中粒 ⑤良好 ⑥灰白 ⑦1/2	底部や凸部。底部外傾して開く。縁部整形。口縁部回転形。底 部円柱軸切面後、端部未調整。やや内厚。	一括	
2	須志器 高台碗	床面	①(16.4) ②7.0 ③(8.1)	④中粒 ⑤細粒 ⑥酸化鉄 ⑦1/2	底内凹い。高台部獨立気味に立ち上がり、断面台形状。底丸く消 曲。口唇部平ら。縁部整形。高台付け後調節補。	27・43	底土粗い
3	須志器 束縫 高台碗	束縫 外	①(31.0 ②4.7 ③35.9)	④中粒 ⑤細粒 ⑥良好 ⑦1/2	小形の器類。高台部獨立して開く。底丸く内凹。縁部整形。 口縁部回転形。底部は削り落し後、丁寧に削り直される。	2	
4	灰 粗 盤	束縫 外	①(32.4 ②2.6 ③36.9)	④細粒 ⑤中粒 ⑥素焼き ⑦1/2	小形の器類。高台部獨立して開く。底丸く内凹。縁部整形。 口縁部回転形。底部は削り落し後、丁寧に削り直される。	1	虎渓山1号 窯式
5	灰 粗 盤	床面	①(15.2) ②4.4 ③35.4	④良好 ⑤灰白 ⑥灰白 ⑦1/2	高台部独立して開く。底丸く内凹。口縁部若干丸み。施釉一痕抜け。	37	#
6	須志器 羽 器	床面	①(18.6) ②— ③—	④細粒 ⑤中粒 ⑥口縁部片	口縁部弧矢反、斜面でV字に屈曲。斜面の張りからみて上半に 最大粒か。口縁部整形無。	17	
7	須志器 羽 器	床面	①(37.8 ②— ③—)	④中粒 ⑤酸化鉄 ⑥(よい)砂 ⑦(白)緑色片	断面側面三角形、上向きに盛り出す。口縁部内傾して立ち上がる。つ くり良好。脚輪付け後、回転無で調整。	6	
8	石製品 砾 石	床面	長-8.2 幅-4.6 厚-2.7	—	断面一面に研磨面。片側小口面わずかに残。侧面の一部に条線状の 削跡。石材一塊鉄鋸	9	

H-23号住居跡 (Fig.19・45 PL.22)



H-23号住居跡セクション

- 1 ないし黃褐色土
As C・FP少量、黃褐色粒・B少
量。
- 2 黃褐色土
As C・FP、黃褐色粒・B少量。
- 3 ないし黃褐色粘土土
As C・FP少量、黃褐色B多量。
- 4 ないし褐色土
As C・FP少量、灰白色粘土極多。
(観闇連土)
- 5 褐褐色土
As C・FP、黃褐色B少量。
- 6 褐色土
As C・FP少量、黃褐色粒極多。

Fig.45 H-23号住居跡・出土遺物

VII その他の構造と出土遺物

位置 10トレンチ X127, S47・48グリッド **主軸方向** N=81°E **形状等** 南東辺の一部を検出。東西(1.25)m、南北(3.42)m、壁現高20.0cm。 **面積** (2.36)m² **床面** 地山を床面とし、ほぼ平坦。 **ピット・出土遺物** 南東コーナー寄りにP₃を検出。深さ55cm。底面で図示した土師器甕(1)が横倒した状態で出土。重複 H-16・22号住居跡に切られる。**時期** 出土遺物から6世紀末～7世紀前半頃と推測される。

Tab.14 H-23号住居跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土層位	①CH持 ②底持	③基高 ④底成	⑤色調 ⑥遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	土師器甕	ピット内 ト内	①22.0 ③—	②(29.2) ④—	③中粒 ④良好	底部丸底。胴部内青灰釉に立ち上がり、上半に最大径をもつ。口縁部外反。底内厚い。口縁部横無て。胴部斜・底位置削り。内底無て。	1	

H-24号住居跡 (Fig.19・46 PL.13)

位置 11トレンチ X149, S45・46グリッド **主軸方向** N=87°E **形状等** 北辺側は調査区外のため未検出。南北に長い長方形と推測される。東西2.16m、南北(2.6)m、壁現高8.5cmを測る。 **面積** (5.0)m² **床面** 地山面を床面とし、平坦で堅緻。 **甕** 東壁やや南寄りに付設される。奥壁先端部分に構材とみられる安山岩自然礫が2個出土。また燃焼部中央には支脚材の自然礫が出土。焚口側に灰分布を確認。 **貯蔵穴** 南東隅から検出。方形で深さ約23cmを測る。 **出土遺物** 固化した遺物のほか、床面で大型自然礫数点が出土。 **時期** 出土遺物から9世紀後半代と考えられる。

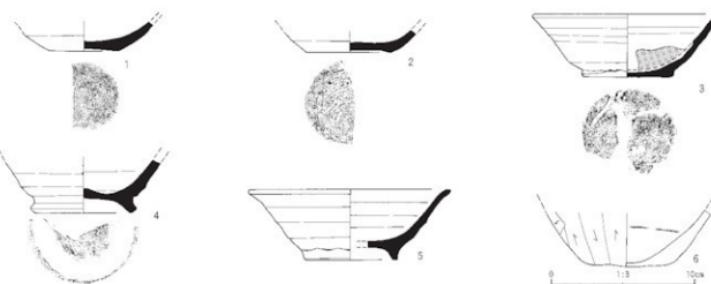
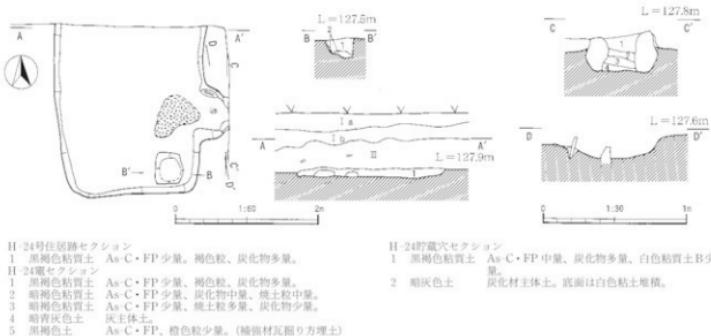


Fig.46 H-24号住居跡・出土遺物

Tab.15 H-24号住居跡出土遺物觀察表

No.	種類名	由来	○△□特徴	○△○特徴	○△△特徴	○△△△特徴	種類の特徴・整型・調整技術	登録番号	備考
1	直頭 環	はねば 環	○(1) △(4) □(3)	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	小さく、やや上部の底板。底部が幅狭、下部半上位付近で若干丸。 輪轂整形。	10	
2	直頭 環	裏土 環	○(1) △(2) □(3)	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	底部上位部。体外側面して開く。輪轂整形。底部右側軸本切り。脚 △(3)に△(2)軸。	2	
3	直頭 環	床上 環	○(13.0) △(4.3) □(3.6)	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	底部広化。底径小さい。底部半上位半円み、外側して開く。輪 轂整形。口縫線回転式で。底辺右側面切り。未調査。	11	
4	直頭 環	はね 環	○(1) △(2) □(3)	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	高台面圓形U切口。別く外反。体外側面扁らみ、外側して立ち上がる。 輪轂整形。	18	
5	直頭 環	床上 環	○(14.0) △(4.8) □(3.6)	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	高台面圓形。断面扁平状。体外側面半丸み、上半で開く。口縫線わ ずか外反。輪轂整形。高台面下付軸やね。	19	
6	直頭 環	内○ 引	○(3.6) △(3.6)	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	○(1)相 △(2)使 □(3)規	内面内い。内面貼生組合板。外面部位尾削り。内面無。	34	

H-25号住居跡 (Fig.19・47 PL.13)

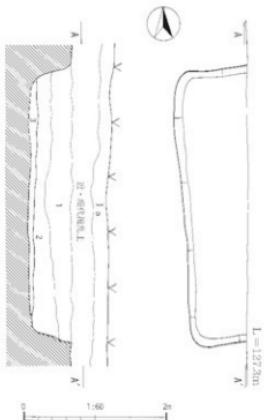


Fig.47 H-25号住居跡・出土遺物

Tab.16 H-25号住居跡出土遺物觀察表

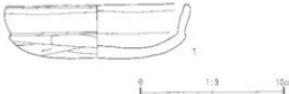
No	種類名	出本年	出本種	DCHB	DBH	色調	地脚	底邊	後邊	後邊	種類の特徴・要型・調整技術	登録番号	備考
1	土脚糊環 環	慶應12(1866)	丹波西	①松木	②柏木	③蘭色	④朱	⑤白	⑥漆	⑦油漆	縫内や厚い、 堅牢な底面。 底部端部側で輪を形成。 右縫内底面 底面に直しする。 縫綱無れ。 底部一帯底縫無	サツフレ ン	

H-26号住居跡 (Fig.19・48 PL.13)

位置 20トレンチ。X12S 103・104グリッド 主軸方向 N-83°-E 形状等 方形と推測される。壁面はほぼ直線的に立ち上がる。東西(2.6)m、南北3.7m、壁現高59.5cmを測る。 面積 (6.96)m² 床面 ほぼ平坦で堅緻。一部貼床(5層)を施している。 窓 未検出 壁溝 北・西壁下に検出。上幅20~25cm、下幅10~20cm、深さ5cm程度。 ピット 南西壁下にP₂を検出。方形で深さ55cmを測る。 出土遺物 覆土中からは、須恵器片、土師器壺片等が出土。床面から須恵器(1) 1点が確認された。 重複 H-25-W-1と重複し、W-1→本遺構→H-25の順。 時期 土器遺物(1)は体部浅く扁平であること、口縁部が内傾することなどからみて、6世紀末~7世紀前半代考される。

位置 20トレンチX123、S102-103グリッド 主軸方向 N-86°-E 形状等 方形と推測される。東西(1.1)m、南北3.8m、壁現高43cmを測る。面積 (3.32)m² 床面 平坦。灰褐色土の貼床を施し、硬く締まる。竈 未検出 重複 W-1号溝、H-26号住居跡と重複。新旧関係は、W-1→H-26→本遺構の順である。出土遺物 覆土中から土師器壺(1)1点出土。

時期 6世紀末～7世紀前半代と考えられる。



H-25号住居跡セクション

- 1 暗褐色土 As-C·FP 少量、炭化物微量。
 2 暗褐色土 As-C·FP、褐、白色粘质土粒·B中量。
 3 灰褐色粘质土 As-C·FP 微量、褐、白色粘质土粒·B极多。
 (贴床形成)

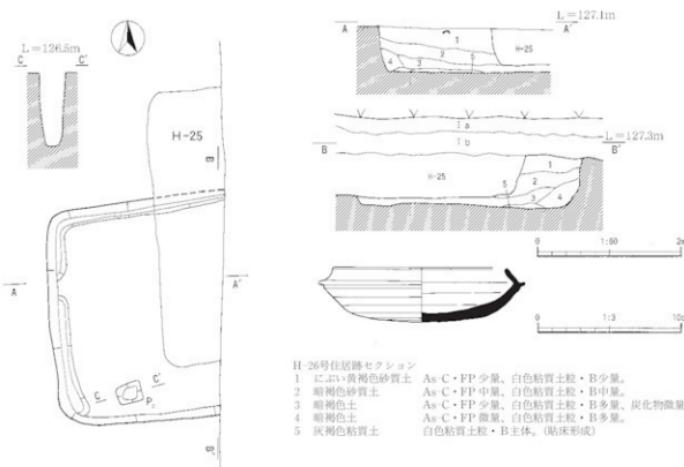


Fig.48 H-26号住居跡・出土遺物

Tab.17 H-26号住居跡出土遺物観察表

No.	測定名	出土層厚	(1)CH持 (2)器種	(3)器高 (4)底面 (5)色調 (6)保存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 壺	床面 ③-	①(12.0) ②3.7	④細粒 ⑤良好 ⑥灰白 ⑦①/3	腹内側い。やや扁平な底部から、体部細く両曲。蓋受け部小さく水平に張り出し、口縁部内側。口縁部無し。体～底部回転割り	5・一括	

H-27号住居跡 (Fig.19・49 PL.13)

位置 20トレンチ。X123、S101グリッド 主軸方向 N-89°-E 形状等 南西コーナーの一部を検出。詳細は不明。現状で東西(1.66)m、南北(1.08)m、壁現高49cmを測る。 床面 地山を床面とし、ほぼ平坦で堅緻。 出土遺物 全体的に少ない。大型自然縫1点出土。 時期 不明。

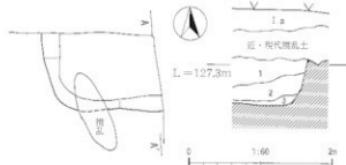


Fig.49 H-27号住居跡

H-28号住居跡 (Fig.19・50)

位置 20トレンチ。X123、S104グリッド 主軸方向 N-95°-E 形状等 サブトレンチでの調査を行った。方形と推測され、現状で東西(2.58)m、南北(2.88)m、壁現高21cmを測る。 床面 地山を床面とし、ほぼ平坦。ピット 北西や内側寄りでP₁を検出。深さは約26cmである。 重複 W-2と重複し、これを切る。 出土遺物 なし 時期 不明

2 その他の出土遺物

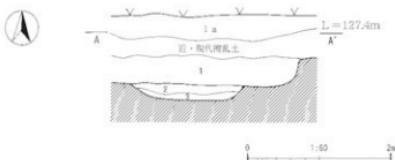
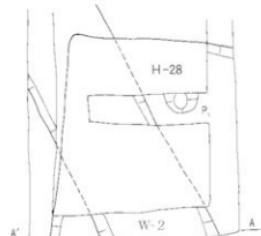


Fig.50 H-28号住居跡

H-29号住居跡 (Fig.13)

位置 18トレンチ。X136～138S73グリッド 主軸方向 不明 形状等
西面回廊建物の下層に検出された住居跡。サブトレンチ内での検出のため詳細は不明。東壁立ち上り部分が検出された。西側はさらに調査区外に拡がるとみられ、東西6m以上の規模が想定される。壁現高は60cm程度。床面 ほぼ平坦。一部に貼床を施す。**出土遺物** 覆土中から(1)が出土している。**時期** 出土遺物から6世紀後半以降と推測される。

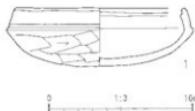


Fig.51 H-29号住居跡出土遺物

Tab.18 H-29号住居跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土 場所	①C縫 幅	②縫高	③C縫 幅	④縫存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	土師器 环	覆土	①(11.8)	②4.0	③中粒	④良好	体部若干丸み、口縫部変換点で梯形形成、沈縫部に伴ひ形成。口縫部粗 く内側。器部内側旋錐形。口縫部無地、底～体部微削り。	29	やや内厚

2 その他の出土遺物

(1) 溝跡・土坑・グリッド等出土土器 (Fig.52、PL.23)

主なものでは、11トレンチW-1号溝跡底面出土の須恵器 (1・2)、15トレンチ回廊石据付痕P4出土の須恵器高台付盤 (5)、15トレンチD-1号土坑出土の須恵器小型环 (6～10)、15トレンチ回廊版築層を切る土坑群D-2～4出土の須恵器环・土師器环 (11～13) を図示した。

(2) 19トレンチ瓦溜り出土土器 (Fig.53～55、PL.23・24)

19トレンチの瓦溜りから出土した土器を底面付近の異なる掘り込み(D-1～4)、上層(D-5)に分け、図示した。最も旧い掘り込みであるD-3・4からの出土は確認できず、D-1出土の須恵器环・椀6点(1～6)、D-2出土の土師器盤・台付甕、須恵器环・椀・皿(7～35)、D-5出土の須恵器环・灰釉陶器皿などを図示した(36～41)。

(3) 土製品・石製品 (Fig.56、PL.24)

各トレンチのグリッド等出土の砥石 (1～7)、漁労具 (8)、紡錘具 (9)、瓦軒用の円盤 (10～12) を図示した。

(4) 製鉄・铸造関連遺物 (Fig.57)

製鉄・铸造関連遺物として、鍛羽口 (1～3)、坩埚 (4)、鉄滓 (5～19) を図示した。14トレンチ、19トレンチ瓦溜り、20トレンチ北側での出土が多い。

(5) 金属製品 (Fig.58)

金属製品として、銅製品 (1・2)、鉄釘 (3～10)、刀子 (10～13) などを図示した。10トレンチの平安時代の壁穴住居跡からの出土が多い。

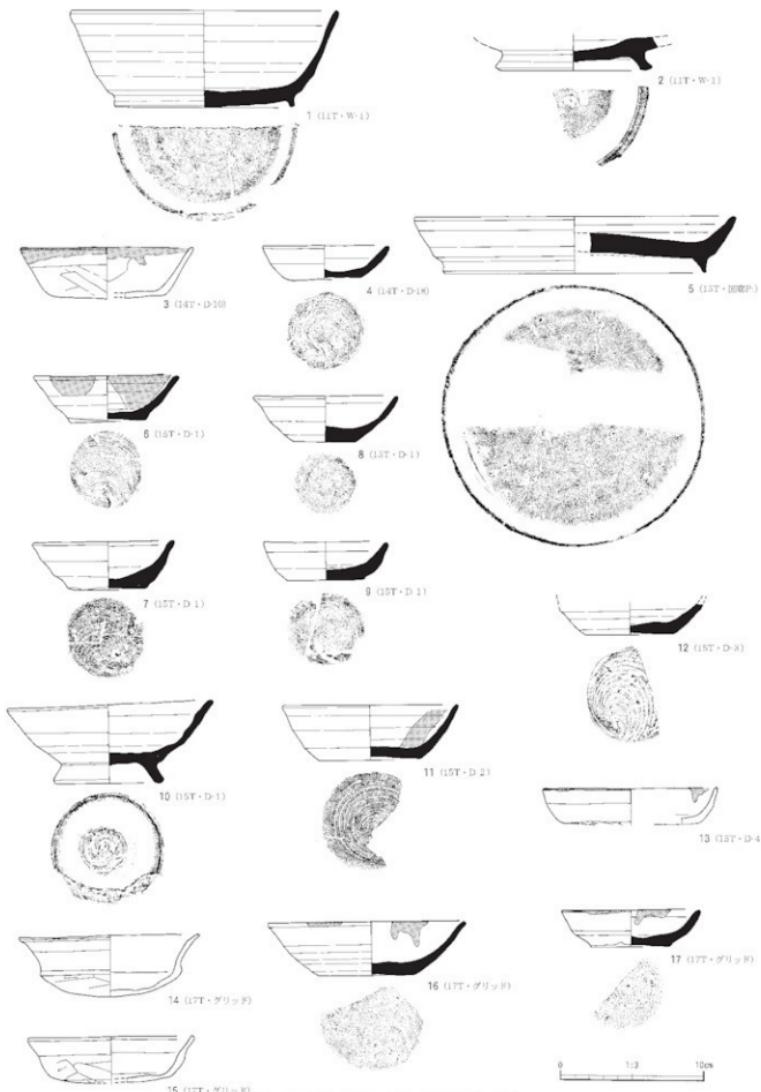


Fig.52 溝跡・土坑・グリッドなど出土土器

2 その他の出土遺物

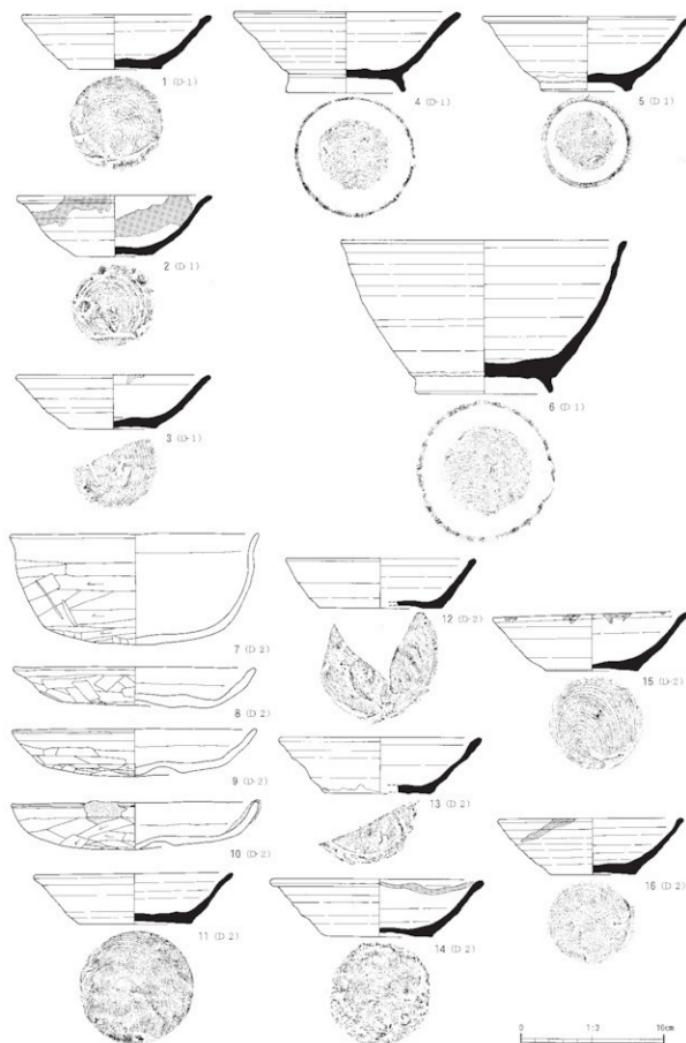


Fig.53 19トレンチ瓦窯り出土土器 (D-1・2)

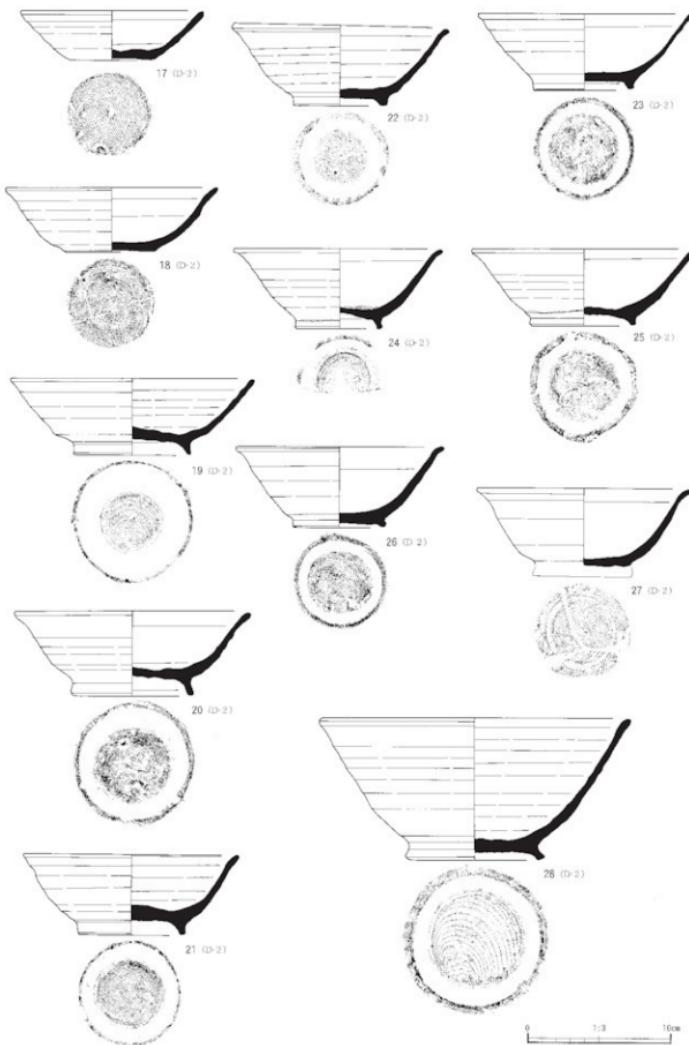


Fig.54 19トレンチ瓦窯り出土土器 (D-2)

2 その他の出土遺物

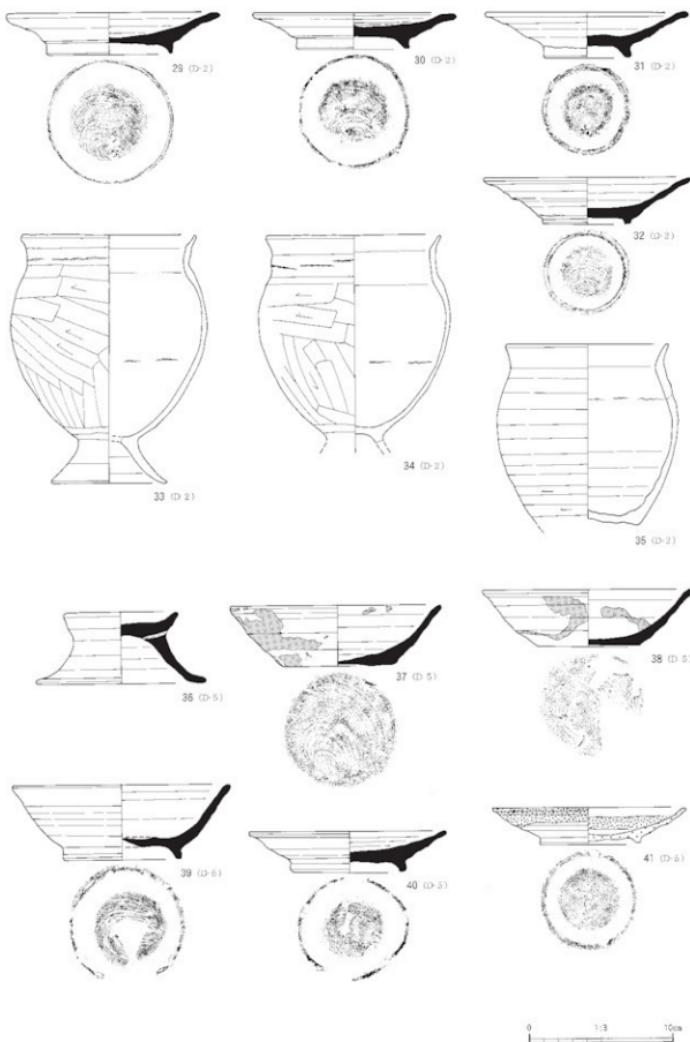


Fig.55 19トレンチ瓦窯出土土器 (D-2・5)

Ⅳ その他の構造と出土遺物

Table.19 溝跡・土坑・グリッドなど出土土器観察表

No.	トレンチ 遺構名	器種名	出土 層位	①口径 ②底高	③壁高 ④色調 ⑤造形	①胎土 ②焼成 ③底灰 ④造形度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号
1	11 レ W-1	須恵器 高台面	底面	①16.4 ②6.5 ③12.5	①繊粒 ②良好 ③暗灰土 ④3/3	削り出し高台。底部中央若干凸凹。体部下部で丸く膨らみ、上部で外傾する。繊維整形。口縁部回転削り。底部回転削り。底面削り。	18	
2	11 レ W-1	須恵器 高台面	底面	①— ②— ③10.8	①繊粒 ②良好 ③灰 ④底部1/4	高台部外側で開き、下端部で外側に近く折れる。高台貼付け後の調整丁寧。繊維整形。底部回転削り削除。	66	
3	14 レ D-7	土師器 壺	覆土	①11.8 ②3.5 ③7.6	①中粒 ②良好 ③にじむ ④1/4	平底。体部直線的に外傾。口縁部で広く。口縁部模様で。体部混濁で。底部削り。口部唇にハーバー状付着。	414	
4	14 レ D-7	須恵器 壺	覆土	①8.7 ②2.3 ③—	①繊粒 ②良好 ③洗済土 ④はぶ形	底部すりかげ付。体部外傾して開く。繊維整形。底部右肩軸切。底面やさし。	893	
5	15 レ 回廊P. 高台面	板石	①22.6 ②3.8 ③18.0	①繊粒 ②良好 ③オーバーフラック ④4/2	高台面三角形。直立式。体部下部で折れの字の字外傾。底部内面中央高さ。繊維整形。体部下部強い斜面無し。底部削り無し。	1		
6	15 レ D-1	須恵器 小壺	底面	①10.0 ②3.2 ③5.5	①繊粒 ②良好 ③にじむ ④3/4	底部小さく若干上弓形。体部下部で外れ、外傾して頗る。繊維整形。口縁部削り。底部右肩軸切。内外曲線状付着物。	1	
7	15 レ D-1	須恵器 小壺	覆土	①9.8 ②3.3 ③5.4	①繊粒 ②良好 ③橙 ④3/4	底部小さい。体部外傾。中段に若干下らむ。底部の厚。繊維整形。口縁部削り。底面右肩軸切。切り。木調節。	4	
8	15 レ D-1	須恵器 小壺	覆土	①10.0 ②3.2 ③4.3	①中粒 ②良好 ③橙 ④4/5	底部平。7 より小さい。体部外位で若干弱く膨らみ、上手で開く。繊維整形。口縁部回転削り。底面右肩軸切。底面やや薄い。	2	
9	15 レ D-1	須恵器 小壺	覆土	①8.6 ②2.6 ③5.3	①繊粒 ②良好 ③黄土 ④4/5	体部平。下部わざずに膨らむ。繊維整形。口縁部回転削り。底部削り無し。	5	
10	15 レ D-1	須恵器 高台面	覆土	①14.2 ②5.4 ③—	①中粒 ②良好 ③にじむ ④3/4	高台面。体部形状にハの字状に外傾。体部中位でわざに膨らむ。繊維整形。口縁部削り無し。底部右肩軸切後削除無し。	6	
11	15 レ D-2	須恵器 壺	覆土	①12.1 ②3.7 ③—	①繊粒 ②良好 ③灰 ④1/2	小形。底部すりかげ上弓形。体部強く外傾。口縁部で開く。つくり丁寧。繊維整形。口縁部削り無し。底部右肩軸切。周縁削除。	47	
12	D-3	須恵器 壺	覆土	①— ②— ③3.6	①繊粒 ②良好 ③灰白 ④底部3	底部すりかげ付。体部下端若干下らみ。繊維整形。底面回転削り。周縁削除。	27	
13	15 レ D-3	土師器 壺	上層	①12.0 ②(2.5)	①繊粒 ②良好 ③にじむ ④3/2	底部平。気球形。体部浅く。下部丸み。口縁部わざに外傾。口縁部削り。底部削り。底面削り。口縁部削付着。	158	
14	X144S87	土師器 壺	屈面	①(12.4) ②4.1	①繊粒 ②良好 ③橙 ④1/3	底部一帯低平。底部実質点で突起成。長めの口縁部外反して開く。口縁部削り無し。体部一帯削り。	—	
15	X144S83	土師器 壺	屈面	①(11.4) ②(3.2) ③8.0	①中粒 ②良好 ③橙 ④1/4	平底。体部浅い。下部平丸み。口縁部実質点で弱く外れ。短く外傾する。口縁部削り無し。体部一帯削り。	—	
16	X144S83	須恵器 壺	表土	①(14.3) ②7.4	①繊粒 ②焼成化 ③橙 ④1/2	ほぼ平底。体部ぐ西北して開く。焼成の丁度なつき。繊維整形。口縁部削り無し。底部右肩軸切。口縁部削付着物。	—	
17	X144S84	須恵器 小壺	屈面	①(9.5) ②2.5 ③5.5	①中粒 ②焼成化 ③にじむ ④1/2	ほぼ平底。体部下端で外れ、外傾して開く。繊維整形。口縁部回転削り。口部右肩軸切。底面削り。	—	

Table.20 19トレンチ瓦溜り出土土器観察表

No.	トレンチ 遺構名	器種名	出土 層位	①口径 ②底高	③壁高 ④色調 ⑤造形	①胎土 ②焼成 ③底灰 ④造形度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号
1	19 レ 高台面	須恵器 壺	底面	①13.1 ②3.8 ③6.4	①繊粒 ②焼成化 ③灰白 ④はば形	底部若干上凸。体部外傾し、中位で若干下らむ。口縁部や外反。繊維削り。口縁部削り無し。底部右肩軸切。外反削除付着。	3312	
2	19 レ 高台面	須恵器 壺	底面	①13.4 ②4.1 ③5.4	①繊粒 ②焼成化 ③にじむ ④黄土 ⑤完形	底部小さく。体部若干深く、中位でやや丸み。口縁部外反する。繊維削り。口縁部削り無し。底部右肩軸切。外反削除付着。	3313	
3	19 レ D-1	須恵器 壺	覆土	①(13.5) ②3.6	①中粒 ②良好 ③にじむ ④黄土 ⑤完形	底部すりかげ上凸。体部外傾。中位で下らむ。繊維整形。口縁部削り無し。底部右肩軸切。口部削付着。	3300	
4	19 レ 高台面	須恵器 壺	底面	①14.7 ②5.5 ③8.3	①中粒 ②良好 ③灰白 ④3/5	底部やや大き。体部の字に外傾。下部若干下らむ。繊維整形。口縁部削り無し。やや高めの底面削付。	3314	
5	19 レ 高台面	須恵器 壺	底面	①14.5 ②5.1 ③6.3	①繊粒 ②良好 ③灰 ④2/3	高台面高い台状。体部丸く、口縁部外反する。高台貼付けやや薄い。	3347	
6	19 レ D-1	須恵器 壺	底面	①(19.6) ②30.5 ③9.5	①繊粒 ②良好 ③黄土 ④1/2	大形。体部深く。底面内凹。口縁部外反する。高台部削りやや高い無し。	3311	
7	19 レ D-2	土師器 壺	覆土	①17.1 ②7.6 ③—	①繊粒 ②良好 ③にじむ ④2/3	大形。底面深く。体部丸く、口縁部外反する。高台部削りや底面削り。口縁部削付着。	173	
8	19 レ D-2	土師器 壺	底面	①16.6 ②2.7 ③—	①繊粒 ②良好 ③橙 ④2/8	底部が円筒形。體部浅く。口縁部にかけて外傾。口縁部で開く。繊維削り無し。底部一部削りあとは。無で調整。	3306	
9	19 レ D-2	土師器 壺	底面	①— ②—	①中粒 ②良好 ③橙 ④はぶ形	底部中凹。器頭削り。底部丸く。底部削り無し。底部削付着。底部削り無し。底部削付。	3320	
10	19 レ D-2	土師器 壺	底面	①17.0 ②3.2 ③—	①中粒 ②良好 ③橙 ④はぶ形	器形に2回。口縁部に一部粘土巻ぎ足し底。口縁部模様で。体部削り。一部削り。底部削付。	3329	
11	19 レ D-2	須恵器 壺	底面	①13.8 ②3.5 ③7.8	①繊粒 ②良好 ③灰白 ④2/8	底部やや幅広。体部浅く。口縁部にかけて外傾。口縁部で開く。繊維削り。口縁部削り無し。底部丸く。底面削り無し。	2343	
12	19 レ D-2	須恵器 壺	下層	①13.2 ②3.4 ③8.6	①繊粒 ②良好 ③灰白 ④1/2	底部丸底。体部洗く。口縁部で開く。口縁部に至る。繊維整形。口縁部削り無し。底部右肩軸切。	D-1柄	
13	19 レ D-2	須恵器 壺	底面	①14.0 ②3.8 ③7.6	①繊粒 ②良好 ③灰 ④1/4	平底。底部繊維削り。体部外傾して開く。口縁部外反する。繊維整形。口縁部削り無し。底面削り無し。	3127 3220	
14	19 レ D-2	須恵器 壺	底面	①14.8 ②3.9 ③7.5	①繊粒 ②焼成化 ③にじむ ④黄土 ⑤4/5	底部上弓形。やや幅広。体部外傾して開き。口縁部外反する。繊維整形。口縁部削り無し。底部右肩軸付着。	3299	
15	19 レ D-2	須恵器 壺	底面	①13.5 ②3.7 ③6.4	①中粒 ②良好 ③灰白 ④完形	底部小さく。若干上弓形。体部強く外傾。口縁部わざに外傾。繊維整形。口縁部削り無し。底部右肩軸切。口部右肩軸付着。	3367	

No.	トレンダ 清 機名	器種名	出 収	DCP ③底盤	②脚高	①脚土 ④底面	③脚底 ④底面存	脚機の特徴・整形・調整技術	登録 番号
16	19トレ D-2	須恵器 环	底面	①12.8 ③5.0	②3.8	①中粒 ③灰	②良好 ③4/4	底部小さな。体部18.4より深い。体部下端部凹れ、外傾する。口縁部わずかに外反。縦輪整形。口縁部回転無。底部右回転あり。	3281
17	19トレ D-2	須恵器 环	底面	①12.6 ③5.8	②2.3	①中粒 ③灰	②良好 ③4/2	底部小さな。体部外傾して開く。縦輪整形。口縁部回転無。底部右回転あり。	3291他
18	19トレ D-2	須恵器 环	底面	①14.6 ③6.1	②4.4	①細粒 ③灰	②良好 ③4/5	底部小さく、体部下端で一旦折れ、膨らみ、上半部で外傾する。口縁部外反。縦輪整形。口縁部回転無。底部右回転あり。	2694・ 一括
19	19トレ D-2	須恵器 高台碗	覆土	①16.8 ③8.2	②5.2	①細粒 ③灰	②良好 ③4/2	底部や幅広、体部はや浅く、下縁は「横」折れ、外傾して開く。縦輪整形。口縁部回転無。底部回転あり後台面貼付け。	下層C
20	19トレ D-2	須恵器 高台碗	底面	①16.3 ③8.4	②5.8	①中粒 ③灰	②良好 ③4/2	高台面わずかに外傾。貼付け丁寧。体部下部丸み、口縁部で外反する。縦輪整形。口縁部回転無。底部右回転系切り。	3106・ 2926
21	19トレ D-2	須恵器 高台碗	底面	①14.9 ③7.3	②5.5	①細粒 ③灰	②良好 ③4/2	高台部成立。貼付け丁寧。体部下半部若干膨らみ、口縁部で外反する。底部内凹状。縦輪整形。口縁部回転無。底部回転あり。	3148・ 3143
22	19トレ D-2	須恵器 高台碗	底面	①15.0 ③6.6	②5.5	①細粒 ③灰	②酸化鉄気味 ③灰	断面の形状の良い高台。体部下端で外傾して開く。口縁部外反。縦輪整形。口縁部回転無。底部回転あり。	3292
23	19トレ D-2	須恵器 高台碗	底面	①14.8 ③6.9	②5.2	①細粒 ③灰	②良好 ③4/4	矧の形状の高台。体部外傾して開き、口縁部で外反する。底部内凹。縦輪整形。口縁部回転無。底部回転あり。	3273
24	19トレ D-2	須恵器 高台碗	覆土	①14.4 ③6.0	②5.5	①細粒 ③灰	②良好 ③4/5	台形の高台。底部小さい。体部下半やや膨らみ、口縁部で僅く外反する。縦輪整形。口縁部回転無。底部内凹で、底部面ねじ地。	D下層
25	19トレ D-2	須恵器 高台碗	底面	①16.4 ③6.7	②9.2	①細粒 ③灰	②良好 ③4/3	だれた矧の高台。体部下半わずかに膨らむ。口縁部丸子外反。縦輪整形。口縁部回転無。底部内凹で、高台面付け無。	2029
26	19トレ D-2	須恵器 高台碗	底面	①14.4 ③6.4	②5.5	①中粒 ③灰	②良好 ③4/3	だれた矧の高台。口縁部回転無。底部内凹で、高台面付け無。	3337・ 3338他
27	19トレ D-2	須恵器 高台碗	覆土	①14.8 ③6.6	②5.3	①粗粒 ③灰	②良好 ③4/4	脂土質。底部下半丸く強く、口縁部で外反する。縦輪整形。口縁部回転無。底部内凹。	C-15
28	19トレ D-2	須恵器 高台碗	底面	①21.4 ③9.5	②9.7	①中粒 ③灰	②良好 ③4/2	大形の高台。底部の文字に外反。底部深く、下半部に丸み、縦輪整形。口縁部回転無。底部内凹で、高台面付け丁寧。	2933・ 3315
29	19トレ D-2	須恵器 高台碗	底面	①14.7 ③8.7	②2.8	①細粒 ③灰	②良好 ③4/6	高台面内凹状、底が直立。底部反気味。口縁部で水平面形成。縦輪整形。口縁部回転無。	2523
30	19トレ D-2	須恵器 高台碗	覆土	①14.0 ③7.8	②2.5	①細粒 ③灰	②良好 ③4/2	高台面丸く直立。断面三角形。体部外反して開き、口縁部平面形成する。縦輪整形。口縁部回転無。底部回転系切り。	3465
31	19トレ D-2	須恵器 高台碗	底面	①14.6 ③6.6	②3.1	①細粒 ③灰	②酸化鉄気味 ③灰	高台面内凹状。やや内厚。底部の文字に外傾。中空張る。口縁部水平面形成。縦輪整形。口縁部回転無。	2925
32	19トレ D-2	須恵器 高台碗	底面	①14.2 ③6.0	②2.3	①細粒 ③灰	②良好 ③4/2	高台面横切。口縁部回転無。底部内凹で、高台面付け無。	3285
33	19トレ D-2	土師器 台付甕	底面	①32.0 ③8.8	②17.0 ③8.0	①中粒 ③灰	②良好 ③4/2	口縁部「3」の字状。上半部の反りはさみ。割部内側、上位に最大。底部無。口縁部無。斜面に溝。	3307・ 3308
34	19トレ D-2	土師器 台付甕	底面	①32.0 ③6.0	②14.3	①中粒 ③灰	②良好 ③4/2	台部下段。口縁部「3」の字状。斜面に溝。上半部に最大径。口縁部無。斜面に溝。	3148
35	19トレ D-2	須恵器 小形	底面	①11.2 ③6.0	②(12.4)	①細粒 ③灰	②酸化鉄 ③灰	底部丸く強く外傾。削頭部・溝曲。上半部に最大径をもつ。削頭部無。下端部回転無且つ。	3294・ 3296
36	19トレ D-5	須恵器 環形	覆土	①7.9 ③11.7	②4.9	①細粒 ③灰	②良好 ③4/4	底部のや外傾、内面は平坦。台部外反し、下端部で水平面形成する。縦輪整形。底部上端部回転無。台部斜付け丁寧。	1
37	19トレ D-5	須恵器 环	覆土	①14.6 ③7.9	②4.1	①細粒 ③灰	②良好 ③4/4	底部堅広。体部やや外傾。体部中位倒れる。内外面突出部有。縦輪整形。口縁部回転無。底部回転切り。内調整。	1090
38	19トレ D-5	須恵器 环	覆土	①14.6 ③7.0	②5.9	①細粒 ③灰	②良好 ③4/2	底部やや幅広。体部や外傾。口縁部で外反する。内外面突出部有。縦輪整形。口縁部回転無。底部回転系切り。	66・158
39	19トレ D-5	須恵器 高台碗	覆土	①15.0 ③8.1	②5.1	①細粒 ③灰	②良好 ③4/2	底部や幅広。体部はや。高台部横に「台形」。体部縦く高め。口縁部で若干開く。縦輪整形。口縁部回転無。底部回転あり。	896
40	19トレ D-5	須恵器 高台碗	覆土	①13.6 ③7.8	②2.8	①中粒 ③灰	②良好 ③4/2	高台部内厚。U字状。体部ハの字に外傾。口縁部わずかに外反。縦輪整形。口縁部回転無。底部回転あり。高台面付け無。	1217
41	19トレ D-5	灰 帽	覆土	①13.3 ③6.8	②2.5	①細粒 ③素白	②良好 ③4/2	高台部内厚いU字形。体部ハの字に外傾。施釉済付け。底部外表面下半部回転無。底部回転あり。虎足山1号式	3406

VII その他の遺構と出土遺物

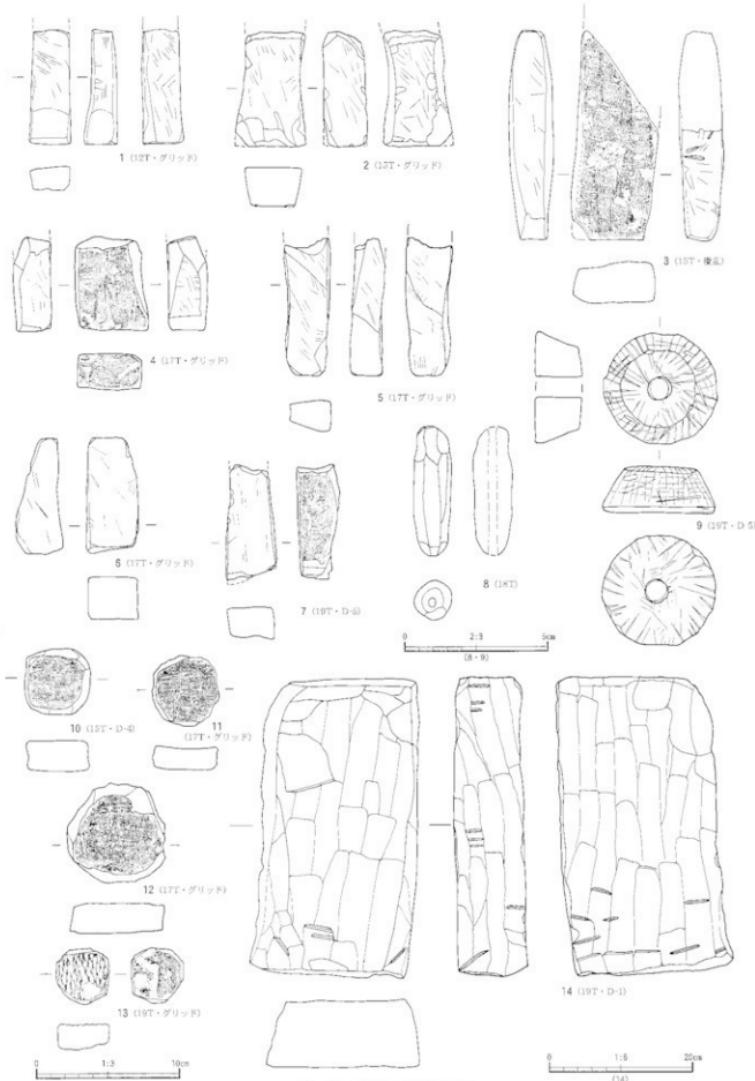


Fig.56 土製品・石製品など

Tab.21 土製品・石製品など観察表

No.	トレンジ 遺物名	器種名	出土 層位	①口徑 ②高さ ③底径	④側面 ⑤縫合 ⑥色調	⑦側面 ⑧底面 ⑨造作度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号
1	12トレ X14SS78	石製品 砾 石	埋土	①7.7 ②0.8 ③1.6	石材: 砂岩石	片側小口面残。底面4面に使用による研磨痕。小口面・側面の一部に鋸目状工具痕が確認される。	一括	
2	15トレ X137S78	石製品 砾 石	一括	①7.9 ②4.7 ③2.7	石材: 砂岩石	片側小口面残。底面4面共によく使用され、擦状をなす。特に狭幅面の底面は擦り痕が顕著。	一括	
3	15トレ 複乱	石製品 砾 石	複乱	①34.4 ②5.6 ③2.8	石材: 滅紋岩	片側小口面残。狭幅面に研磨痕、一部条縞状をなす。広幅面に堅伏の調整痕有。狭幅面に使用痕があることから手持り鉢。	一括	
4	17トレ X144S86	石製品 砾 石	表土	①6.5 ②4.8 ③2.5	石材: 滅紋岩	片側小口面残。小口を含む広口表面に鋸目痕、狭口側2面に使用痕。	一括	
5	17トレ X144S85	石製品 砾 石	一括	①9.4 ②3.2 ③2.1	石材: 砂岩石	片側小口面残。広・狭口4面に使用痕。広口面は底ぎれりによる凹凸面形成。	一括	
6	17トレ X144S87	石製品 砾 石	埋土	①7.9 ②3.5 ③2.9	石材: 砂岩石	片側小口面残。広口面裏面一部剥落、狭口面を含む3面に使用痕。底ぎれり痕有。	一括	
7	19トレ D-5	石製品 砾 石	上層	①7.8 ②3.5 ③2.2	石材: 滅紋岩	片側小口面わざに残。広・狭口2面に使用。片側狭口部、底面調整。	W-1 一括	
8	18トレ 汲水具	土製品 汲水具	I層	①4.4 ②1.3 ③1.3	①繊維 ②慶元期 ③黄土 ④完形	孔幅0.2、重量6.1g。底面無で調整。	一括	
9	19トレ D-5	石製品 汲水具	上層	①上.7 T3.7 ③1.6 孔径0.8		重量35.6g。側面には整形時の面取り痕が残る。底面には調整時の擦痕有。石材: 岩紋岩。	W-1 1381	
10	15トレ D-4	瓦用具 瓦	瓦	①4.6 ②4.5 ③2.1		平瓦用具。平面や弓形状。側面調整がほど施されておらず、原形面を保かしているか。凹面に布目軸。	82	
11	17トレ X144S86	瓦用具 円盤	表土	①5.0 ②4.6 ③1.6		平瓦用具。平面稍円形状。側面面取り後、磨き調整。凹面布目軸。	一括	
12	17トレ X144S83	瓦用具 円盤	底面	①6.9 ②6.7 ③2.0		平瓦用具。やや大型。側面斜面加工痕。磨き調整前の半製品か。凹面布目軸。	一括	
13	19トレ X150S92	瓦用具 円盤	I層	①3.8 ②3.6 ③1.3		平瓦用具。凸面端目、凹面布目軸。半製品か、側面の一部に磨き痕。	一括	
14	19トレ D-1	石製品 切 石	底面	①40.8 ②23.2 ③9.5	重量9.2kg	形状立方体。基礎化粧の部材に使用されたか。底面には幅約3~4cmの堅伏工具痕。一部被熱による黒ずみ痕。石材: 兵庫県丹波山岩	W-1 3380	

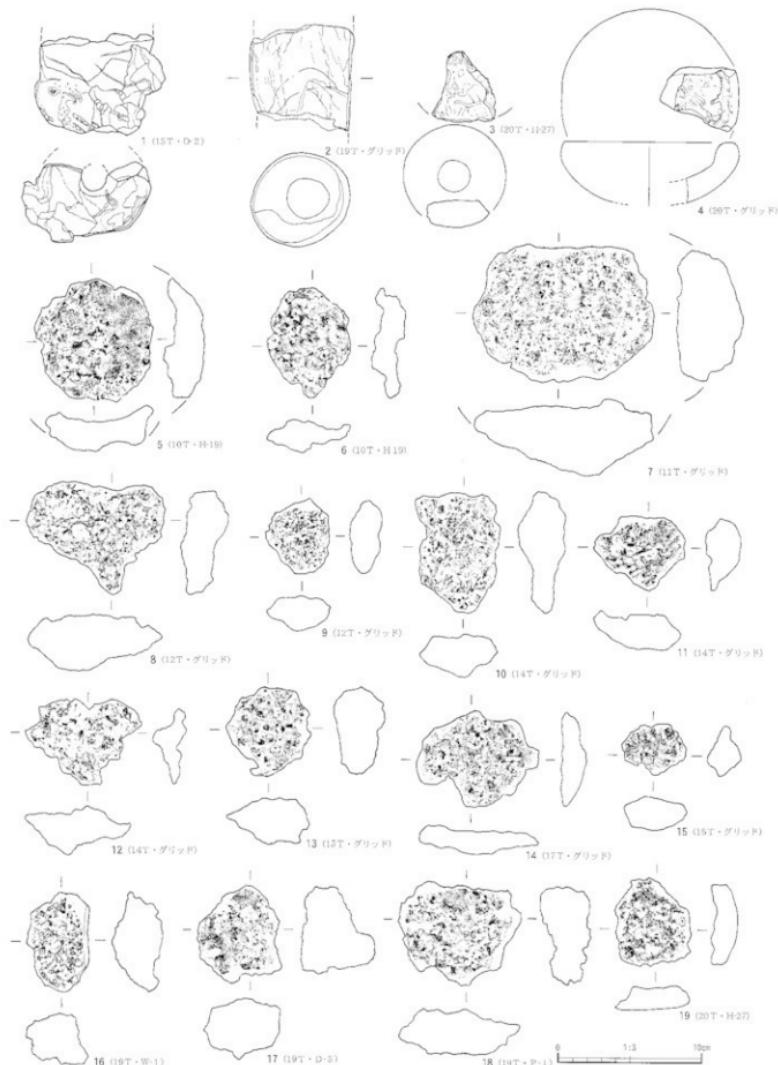


Fig.57 製鉄・鋳造関連遺物

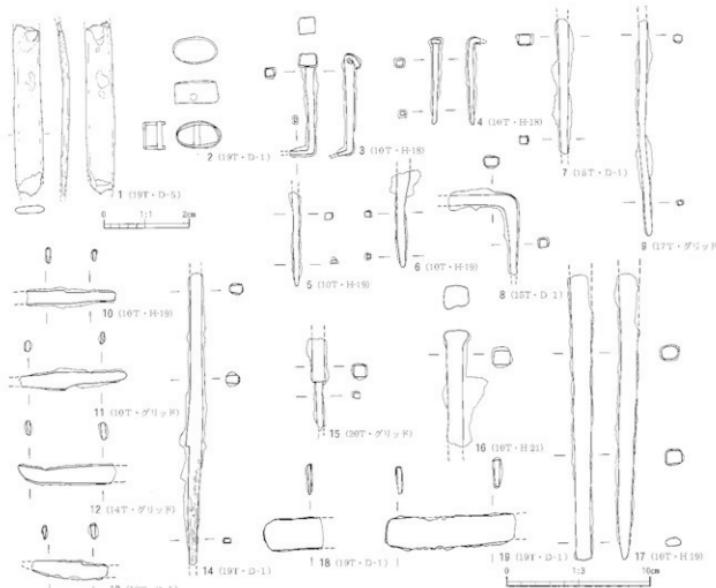


Fig.58 金属製品

Tab.22 製鉄・鋳造関連遺物観察表

No.	トレンチ 直標名	器種名	出土 層位	①口径 ②側高		③底面 ④底存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号
				①口径	②側高			
1	15トレ D-2	土製品 縦円口	覆土	①0.7 ②8.8	③5.6 ④孔径1.8	⑤細粒 ⑥良好 ⑦灰白 ⑧先端部	器面被熱により色調変化。先端部黒色鉛状。一部スラグ付着。	12
2	19トレ X150S93	土製品 縦円口	覆土	①0.3 ②27.1	③6.5 ④孔径2.9	⑤中粒 ⑥良好 ⑦にごり感 ⑧先端部	器面被熱により色調変化。穿孔位置や片側にずれている。器面数枚 り状に無理で調整。	一括
3	20トレ H-27	土製品 縦円口	覆土	①0.4 ②4.7	③4.3 ④1.9	⑤中粒 ⑥良好 ⑦にごり感 ⑧小片	先端部黒色鉛状。	一括
4	20トレ X123S101	土製品 用 瓶	皿盤	①白色 ②多	②良好	③灰白 ④⑤中粒 ⑥小片	口沿部・全体内面黒色埋付着し、3ヶ所に緑斑確認。副鉄造用いら れたか。外表面丁寧に無理でしている。黒斑かけ目開。	一括
5	10トレ H-19	鉄 淹	床面	①0.5 ②2.1	③重量260g	④	橢形形。平面円形状。上面凹状、黒色鉛状。画面凸凹、埋付着付着 する。表面加熱や凹凸。色調・表面赤系・表面赤系	67
6	10トレ H-19	鉄 淹	覆土	①0.5 ②0.7	③重量110g	④	小片。平面不整形状。器面凹凸する。表面一部海綿状。裏面一部木炭 ぬみ込みあり。色調・表面・裏面黒系	49
7	11トレ X149S47	鉄 淹	覆土	①0.2 ②9.4	③重量705g	④	平面橢円形。上面凹状、裏面凸面形成。裏面一部海綿状、埋付着。 上面一部木炭ぬみ込み。色調・表面・裏面黒系。	一括
8	12トレ X144S78	鉄 淹	覆土	①0.5 ②7.8	③重量260g	④	平面不整形状。裏面木平形状。裏面凸面形。上面一部木炭ぬみ込み。 裏面表面気孔多。色調・表面黒化のために手工作業。	23
9	12トレ X144S77	鉄 淹	覆土	①0.5 ②4.5	③重量60g	④	小片。平面橢円形。表面若干凸凹するが、黒鉛鉛状。裏面凸凹、木炭 ぬみ込み。表面黒化が意味や強。色調一にいへる黒	144
10	14トレ X144S77	鉄 淹	覆土	①0.8 ②0.9	③重量150g	④	平面橢円形。表面が埋付着し、凸凹形。裏面表面凹凸。小さい気孔 有。表面黒化。裏面凸面形。裏面黒化と並み赤鉛。	973
11	14トレ X144S77	鉄 淹	覆土	①0.6 ②2.2	③重量90g	④	小片。平面不整形状。裏面丸み、裏面径1.0cm前後の気孔。裏面には ほぼ水平面形。裏面黒鉛鉛状。色調一にいへる黒	582
12	14トレ X141S77	鉄 淹	覆土	①0.8 ②0.6	③重量90g	④	平面不整形状。裏・裏面具に凸面黒鉛。裏面V字状。裏面表面黒鉛 形状の小小い気孔点在。色調一黒鉛。	91
13	15トレ X138S79	鉄 淹	覆土	①0.6 ②0.8	③重量125g	④	平面橢円形。裏面は水平。片面側面部に埋付着。裏面裏面黒鉛形 成。一部木炭ぬみ込み。裏面へ裏面小さき気孔。色調一にいへる黒鉛。	一括

VI その他の構造と出土遺物

No.	トレンジ 道 構 名	器種名	出土 層位	①口径 ②底径	③脚高 ④底面	⑤脚土 ⑥色調 ⑦底成 ⑧底存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号
14	17トレ X144S78	鉄 淵	III層	①38.5 ②6.7 ③1.9	④	⑤重星100.5g ⑥	平面不整形状。器内薄い。表面は水平、裏面若干凹凸。木炭頃み込む。小さな気泡比較的多。色調一赤系。	
15	15トレ D-2	鉄 淵	底面	①4.5 ②3.6 ③2.3	④	⑤重星20g ⑥	小片。平面圓形状。表面水平。裏面不規。片側端部に破面。器面一部削れ痕あり。色調一純化によりない赤系。断面黒色。	126
16	19トレ W-1	鉄 淵	覆土	①6.9 ②4.4 ③3.5	④	⑤重星130g ⑥	楕円形。側面に破面。断面丸み。上部木炭頃み込む。木鉄一部鉄化により赤系。裏面小さな気泡多。色調一黒系。	一括
17	19トレ D-5	鉄 淵	上層	①6.7 ②5.7 ③5.0	④	⑤重星300g ⑥	平面不整形。表面は平担、鉄化混み赤系。裏面つらら状のたれ、径5mm前後の気孔点在。表面削れ痕。色調一黒系。	W-1 一括
18	19トレ P-1	鉄 淵	覆土	①3.4 ②2.7 ③3.4	④	⑤重星205g ⑥	楕円形。片側端部破面。表面凹状。径1cm大体小さな気孔点在。裏面黒色。小さな気泡多。一部木炭頃み込む。色調一純化。	一括
19	20トレ H-27	鉄 淵	覆土	①6.0 ②5.3 ③1.8	④	⑤重星56g ⑥	平面形狀。表面凹状。一部小さな気孔点在。裏面が黒面。側面に付着した内浮垢。断面気泡多。色調一黒面。	一括

Tab.23 金属製品観察表

No.	トレンジ 道 構 名	器種名	出土 層位	①口径 ②底径	③脚高 ④底面	⑤脚土 ⑥色調 ⑦底成 ⑧底存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号
1	19トレ D-5 不明	鉄製品	覆土	①3.9 ②0.6 ③0.15	④	⑤重星2.76g ⑥	板状。青銅品。裏面欠損する。裏面部分に縫合部、部分的に赤・黒鉄。裏面全体に褐色の光沢あり。	W-1 923
2	19トレ D-1 不明	鉄製品	覆土	①1.0 ②0.65 ③0.1	④	⑤重星0.81g ⑥	上面円形状。裏面斜面。内側軸脚中央や上に、ブリッジ状の幅約2mmの棒状の脈を穿つ。脈は貫通する。上・側面研磨調整済。	W-1 1898
3	10トレ H-18 釘	鉄製品	床面	①(7.0) ②0.6 ③0.6	④	⑤重星10.8g ⑥	頭部歪れ、頭部方形状で造り立つ。下端部は字に附れ曲がり、下端部欠損。鉄化はさほどでもなく、造形比較的良好。断面方形。	29
4	10トレ H-19 釘	鉄製品	覆土	①(6.0) ②0.5 ③0.4	④	⑤重星5.1g ⑥	頭部に字が附れ、下端部わざかに欠損するか。寸法からみて小形品であろう。断面方形。	166
5	10トレ H-19 釘	鉄製品	床面	①(6.5) ②0.5 ③0.4	④	⑤重星5.5g ⑥	頭部・下端部共に欠損。断面方形状。鉄化はさほど進んでいない。	189
6	10トレ H-19 不明	鉄製品	覆土	①(6.5) ②0.9 ③0.5	④	⑤重星10.4g ⑥	頭部陥入による幾枚性。下端部欠損。断上面端部扁平な板状、下半部方形。	39
7	15トレ D-1 釘	鉄製品	II層	①(9.2) ②0.8 ③0.7	④	⑤重星19.2g ⑥	頭部・下端部共に欠損。断面方形状。鉄化頭部。	一括
8	15トレ D-1 釘	鉄製品	覆土	①(9.0) ②0.7 ③0.8	④	⑤重星21.2g ⑥	L字型。両端部を欠損。片側面部縮くなる。断面方形状。裏面鉄化する。	一括
9	17トレ X144S78 棒	鉄製品	土壌	①(14.7) ②0.6 ③0.6	④	⑤重星20.8g ⑥	下端部縮身。頭部欠損か。断面方形状。裏面鉄化する。	一括
10	10トレ H-10 刀子	鉄製品	刀子	①(6.2) ②(11.0) ③0.9	④	⑤重星9.8g ⑥	頭部がずれしL字型。鋸歯欠損。刃部小さく。背側平。茎部先端欠損。頭部に鋸歯化断面。	一括
11	10トレ X127S44 刀子	鉄製品	皿層	①(7.3) ②(11.0) ③0.7	④	⑤重星8.4g ⑥	鋸部・茎部先端共に欠損。鉄化進行著しい。頭部は刃部側がくろじて確認でき。	一括
12	14トレ X141S78 刀子	鉄製品	覆土	①(6.8) ②1.2 ③0.3	④	⑤重星8.4g ⑥	刃部のみの保存。鋸部はやや外側に外反。全体的に鉄化進み、裏面本末の勢より厚い。	228
13	19トレ D-1 刀子	鉄製品	覆土	①(5.2) ②(11.0) ③0.9	④	⑤重星4.8g ⑥	刃部は使用による厲り削着。頭部は種類がくろじて確認。裏部は刃部に沿い部分が遺存するが、大部分を欠損。	W-1 3364
14	19トレ D-1 不明	鉄製品	覆土	①(10.8) ②0.9 ③0.5	④	⑤重星41.6g ⑥	茎部と本付着。身部は鉄化が遅しく進行し、形状の詳細は明確ではない。上端部分は断面方形状。	W-1 3193
15	20トレ X127S104 刀子	鉄製品	覆土	①(6.4) ②0.9 ③0.9	④	⑤重星18.8g ⑥	下半部細かい方形状、上半部に有茎状をなして張り出す。断面方形状。頭部・下端部共に欠損する。	一括
16	10トレ H-21 不明	鉄製品	床面	①(8.0) ②1.1 ③1.1	④	⑤重星67.5g ⑥	頭部方形状に突出。基部方形状、下半部欠損。	10
17	10トレ H-19 鉗状?	鉄製品	床面	①(19.5) ②1.5 ③1.1	④	⑤重星105g ⑥	頭部欠損。下端部舌状をなし親く尖り、断面三角形状。身部断面丸みを帯びる。	一括
18	19トレ D-1 不明	鉄製品	覆土	①(4.0) ②2.1 ③0.2	④	⑤重星8.3g ⑥	薄い板状。片側端部舌状をなす。裏面鉄化進む。	W-1 3221
19	19トレ D-1 不明	鉄製品	覆土	①(8.8) ②1.9 ③0.4	④	⑤重星18.0g ⑥	裏面18に似る。片側端部寄りはや軽快となる。	W-1 3215

VIII まとめ

19年度の調査目的は、①金堂範囲の確認、②西・南面回廊の確認、③寺域の確認であった。まとめとして、これらの調査成果を整理し、若干の検討を加え今後の課題を明らかにしたい。

1 成果と課題

(1) 遺構

①金堂

成果 金堂基壇は掘り込み地業を伴うことが確認された。各トレンチの調査状況を勘案すると、掘り込み地業部分は黒色土で版塗し、基壇積土には白色粘土を使用していることが推測される。基壇規模については、この白色粘土の範囲をもとに東西22.0m、南北16.4m以上と推測される。北側の範囲については、6次調査より2.2m広がる結果となった。

課題 既往の調査でも南側範囲が課題となっていたが、今回の調査でも不明とせざるを得ない。南側を調査した17トレンチでは黒色土版塗層が確認できたが、これは、基壇より広めに施した掘り込み地業を伴うものと考えられ、基壇の南縁はこれより北側であると考えられる。この部分は道路であるため、今後これを調査・解明する的是非常に難しい。また、基壇上面および周囲はかなり削平されており、礎石の据付痕跡など金堂建物に関する遺構は確認できなかった。基壇外装についても一部の調査区で地覆石の据付跡らしき掘り込みが確認できたのみで、全体としては不明である。ただ、6次調査と同様に今回の調査でも基壇の周囲から角閃石安山岩の切石が出土していることから、これを用いた切石積基壇であったことは間違いない。

②回廊

成果 a. 西面回廊 2ヶ所の調査区で西面回廊の礎石据付痕が確認でき、回廊の東西規模(東面回廊外側柱～西面回廊外側柱)が79.7mであることが判明した。

b. 南面回廊 確実な遺構は確認できなかったものの、2ヶ所でその候補となる遺構が検出された。19トレンチで確認された版塗状の土層と、その北西に位置する17トレンチ南側で検出された版塗土(B-3号建物跡)である。

課題 回廊については昨年度の北・東面に続き、今回西面が確定したものの、南面が課題として残った。今回南面回廊の候補として検出した2ヶ所の遺構について、今後さらに調査を行い、その規模や性格を解明することが必要である。

③寺域

成果 寺域北・南ともに区画に関連する遺構は検出されなかった。昨年度調査を行った北側の区画溝の可能性が考えられた溝(W-1)は、途中で途切れる(もしくは走行方向を変える)ことが分かり、これが寺域を区画する遺構である可能性は低くなかった。この溝跡の走行方位は、南側に近接する北方建物の方位に近似していることから、この建物との関連性が示唆される。

課題 寺院地内からは、山王庵寺に前後する遺構が検出されている。今回の寺域北側の調査では、平安時代の集落が確認されおり、これらの遺構と寺院関連の遺構が重複していた場合、下層となる寺院関連遺構は壊されていることもありうる。このため、寺域に関してはある程度の広さを確保して調査を行う必要がある。

④その他

a. B-2号建物跡 西面回廊調査区18トレンチで掘り込み地業に伴う版塗層が検出され、建物の存在が明らかとなった。金堂の北側に位置する回廊内の建物である。西面回廊内側柱からB-2の地業までは2.6mと近接する。

今後この建物の範囲や性格が分かれば、山王庵寺の伽藍の変遷を考えるうえで有用な資料となりうる。

b.19トレンチの瓦溜り 南面回廊検出を目的とした19トレンチで、瓦溜りを検出した。瓦のほか土器・金属片・切石・炭化物等も出土しており、建物の廃材を片付けた遺構と考えられる。出土遺物は9世紀代のものが中心で、覆土上層では10世紀末頃のものも出土しており、軒瓦などに良好な資料が見られた。遺構の状況や出土遺物から、当初は採土を目的として掘られ、その後9～10世紀末にかけて比較的長い期間、廃棄が行われたと考えられる。

(2) 出土瓦

成果 全体でコンテナバット180箱程度の瓦が出土した。軒瓦では軒丸瓦174点、軒平瓦103点が出土し、軒丸瓦・軒平瓦とともに1点ずつ新たな資料が確認された。新出の軒丸瓦は、上野国分寺創建期の瓦B201と同形である。文字瓦は60点ほどが出土し、うち「方光」押印瓦が1点出土している。

2 伽藍の検討

山王庵寺の主要伽藍について、これまでの調査で蓄積した情報を整理し、諸施設の配置・規模、造営時期等について検討を行いたい。

(1) 建物の配置・規模について

これまでの調査をもとに、主要伽藍を復元したのがFig.59である。塔は7次調査で心礎北側を調査しており、基壇の1辺が14mであることが分かっている。回廊については、今回の調査で西面が確定したことにより東西規模が79.7mであることが判明した。南北については南面が確定できないが、19トレンチと17トレンチで確認された版築土が南面回廊の候補となった。復元図は、19トレンチの方が、講堂前面の空間と金堂・塔前面の空間のバランスが良いと考え作図した。この場合、回廊の南北は93.6m（版築土の中心を探った）となる。金堂については、6次調査および平成9年の調査と今回の調査により、東西22.0m、南北16.4m以上の基壇規模であることが判明し、南側を除く東・西・北の3辺については範囲がほぼつかめたといって良い。ただ、基壇外装や雨落溝などが検出されていないため、正確に基壇端を捉えたかどうかは疑問が残る。また、南側範囲については調査ができる場所が無く、今後これを確認するのは非常に難しいと思われる。そこで、伽藍全体の構成から金堂基壇の規模を探ってみたい。

金堂規模の検討 山王庵寺は東に塔、西に金堂が並ぶ法起寺式伽藍配置である。これを逆にした法隆寺では塔・金堂の芯が、東西の回廊を3等分していることが分かっている（工藤1979）。つまり、回廊～塔の芯：塔の芯～金堂の芯：金堂の芯～回廊が1：1：1になる設計である。このような設計の場合、金堂と塔では東西の長さが異なることから、塔端～回廊に比べ、金堂端～回廊が狭くなり、伽藍中軸線も金堂～塔の中心を通らないため、伽藍配置を一見するとバランスが悪いように見える。山王庵寺の場合も塔端～東回廊が14.1mなのにに対し、金堂端～西回廊は10.0mと狭くなる。伽藍中軸線も金堂～塔の中心を通ないことなど、法隆寺との共通性が認められた。そのため、塔・金堂の芯をとり、東西回廊の幅に対してどのような関係にあるのか検討した。すると復元図中に示したとおり、全て芯①西回廊～金堂22.7m（約76尺）、②金堂～伽藍中軸線15.3m（51尺）、③伽藍中軸線～塔15.0m（50尺）、④塔～東回廊23.0m（約77尺）となり、①・④と②・③がそれぞれ近似した距離であることが分かった。このことは、逆に調査によって捉えられた金堂基壇の東西範囲がおよそ正しいことを示唆している。また、山王庵寺の伽藍は一貫した計画のもとで造営が行われたとも考えたい。さらにいえば、伽藍は法隆寺のように全ての建物の芯を意識して設計されている可能性がある。この場合、塔の芯を基準に、金堂基壇の南北規模を復元すると、南北21.7m（約72尺）となり、東西22.0m（約73尺）という規模と合せると、金堂の基壇はほぼ正方形と推測される。このことから建物についても正方形に近い5×4間が想定される。^⑩

講堂規模の検討 今回の回廊の調査結果と建物の芯を意識した伽藍設計は、講堂範囲にも影響を及ぼす。18年度の調査で判明した版築土の範囲（18年度の報告で基壇とほぼ同じ規模と考えた）は東西31.0m、南北24.5mであ

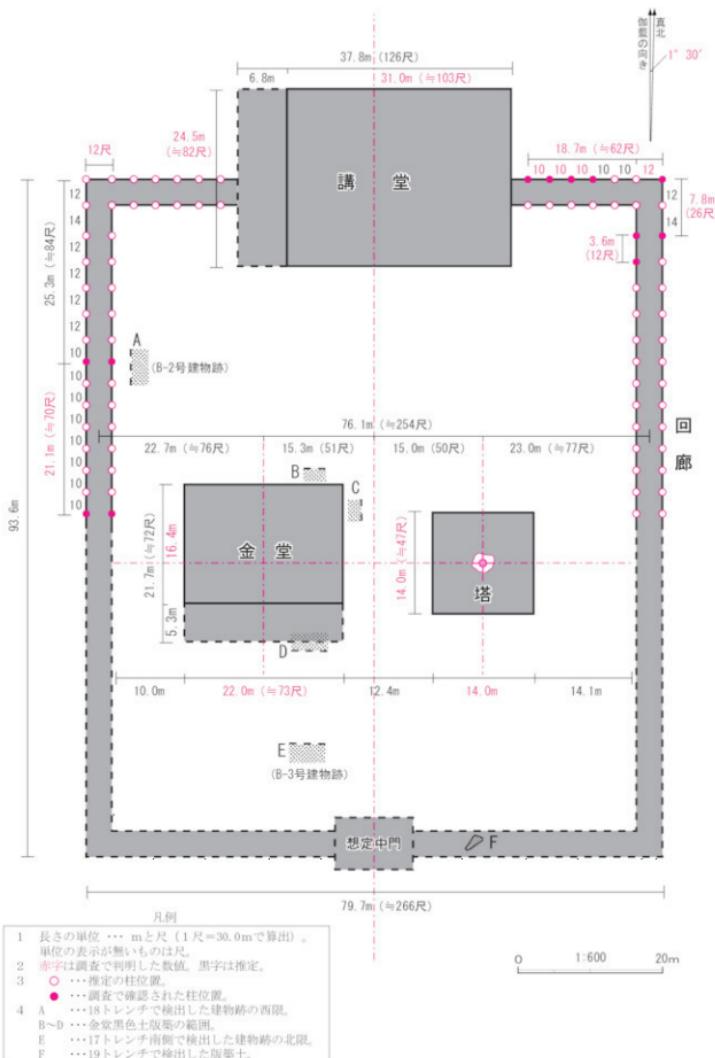


Fig.59 山王寺伽藍復元図

る。しかし、のままでは伽藍中軸線が講堂の左側へそれてしまうことになる。このため、今回回廊の東西規模が確定したことにより判明した伽藍中軸線を基準に講堂基壇を復元し直すと、18年度調査よりさらにならに6.8m西へ延び、東西37.8mという規模になる。昨年度の報告で、正方形に近い基壇に見合う 6×4 間の建物を想定したが、東西幅が延びることにより、講堂ではより一般的な平面形式 7×4 間の建物の復元も可能となる。

以上、これまでの調査成果をもとに、建物の芯や伽藍中軸線で合わせた場合に想定される金堂および講堂の規模について検討してきた。次に建物の時期について、今回の西面回廊の調査成果から検討しておきたい。

(2) 回廊の造営・廃絶時期

15トレレンチで調査区東側から検出された土坑群（V章第2節参照）は回廊と切り合い関係にあることからこれに注目し、これら土坑群の出土遺物・切り合い関係などを整理し、さらに回廊の時期を検討しておきたい。

土坑群の時期 15トレレンチからは計7基の土坑が検出されうち1基（D-7）は中世以降と考えられる。ほかの6基の土坑は寺院に前後する遺構と考えられる。D-1は出土遺物（Fig.52-6～10）から10世紀末～11世紀頃と推測され、D-6も掘り込み面や覆土の状況がD-1に類似することから同時期と考えられる。D-7は覆土中に瓦が混入しないため、創建期もしくはそれ以前に遡ることが推測される。D-2～4では、覆土中から底面にかけて瓦の出土が認められ、とくにD-2・4では底面付近から多量の瓦が出土している。また瓦に混じって9世紀代の土器が出土しているが、ほかに時期を示す遺物が少ないため、これだけでD-2～4の時期を確定することは難しいと思われる。これらの遺構の時期については少なくとも9世紀以降と考えることができよう。また、D-2とD-3は切り合い関係にあり、D-3が先行する。

土坑群と回廊との切り合い これらの土坑群と回廊の切り合い関係については、Fig.60のとおりである。回廊と直接重複するのはD-3であり、これが回廊版築層を切ることが確認されている（Fig.14断面図1）。D-3はD-2と重複し、これに切られる。さらにD-2はD-1に切られる。

すなわちD-3の時期については、9世紀以降遅くとも10世紀中頃と考えることが可能である。

回廊の存続時期 回廊の廃絶時期はD-3の時期より下ることはないと考えられる。また、回廊の造営時期について、礎石据付跡（P）で根石とともに出土している短い高台の付く須恵器盤（Fig.52-5）が、器形から7世紀末～8世紀頃の所産と推測されることがあり、この時期を遡ることはないと考えられる。すなわち回廊の存続時期については、概ね8～10世紀前半代と推測され、その造営は創建からやや遅れたと考えられる。

金堂との関係 これら土坑群の性格についてはV章で述べたとおりで、D-2～4は、①地山粘質土層まで掘り込んでいる、②底面付近から多量の瓦が出土する、などの理由から粘土を探るために掘削を行い、その後瓦を廃棄した遺構と考えられる。瓦は出土位置から、金堂の瓦であった可能性が高い。探土は、基壇版築土・壁土などとして、建物の修復に用いられたと考えられ、回廊建物の廃絶後も金堂・塔などの主要堂塔は存続していたことを示唆している。

3 結語：今後の課題

以上、これまでの調査成果をまとめ、山王庵寺の伽藍について、その配置や規模、時期などを検討してきた。この結果、①主要伽藍については、建物の芯を意識した設計を行っており、一貫した計画のもとに造営された可能性が高いこと、②このような設計基準をもとにすると金堂基壇は東西22.0m、南北21.7m、講堂基壇は、東西



Fig.60 15トレレンチ土坑群と回廊との新旧関係

37.8m、南北24.5mに復元可能なこと、③西面回廊15トレンチの調査成果をもとに回廊の存続時期を8~10世紀前半代と推測できそうなこと、などを述べた。以上のことは、ある程度の蓋然性が認められる前提のうえで進めてきた推論に過ぎず、これらのことは今後の調査で検証されるべき課題と思われる。

範囲確認調査自体の課題としては、①今回確定できなかった南面回廊の検出、②金堂北側の回廊に近い位置から検出された建物跡の範囲確認、③寺域の解明、さらには④まだ調査されていない部分が残される塑像出土土坑の遺構・遺物の解明、などが挙げられる。今後に残された課題は多いといえよう。

(註) 金堂の基壇が正方形に近い例としては、山田寺(65×56尺:天平尺)、四天王寺(65×54尺:天平尺)、法輪寺(49.5×42.5尺:曲尺)、飛鳥寺中金堂(61.0×51.5尺:高麗尺)などがある。金堂建物が5×4間(縦を含めて)となる例としては、川原寺中金堂、法隆寺、中宮寺、四天王寺、野中寺、高井田庵寺、南滋賀庵寺中金堂などがあるという(若宮1979)。

[主要参考文献一覧]

- | | | |
|------------------|-------|--|
| 石川克博 | 1987 | 「山王庵寺の創建期について—素弁八葉蓮華紋軒瓦をめぐって」『群馬史研究』26 |
| 伊勢崎市教育委員会 | 2002 | 「上植木庵寺・上植木庵寺跡」 |
| 井上唯雄 | 2000 | 「山王庵寺の創建と衰微」『山王庵寺』前橋市埋蔵文化財発掘調査団 |
| 上田市立信濃國分寺資料館 | 1982 | 「信濃國分寺跡」 |
| 浦巣亮次 | 1960 | 「瓦の歴史—法隆寺道瓦群における技術史の一試論—」『建築史研究』28 |
| 岡本東三 | 1996 | 「東国の古代寺院と瓦」吉川弘文館 |
| 大藤潔 | 1991 | 「研究ノート 丸瓦の製作技術」『奈良国立文化財研究所学報』49 |
| | 1999 | 「鶴尾」日本の美術392、至文堂 |
| 川原嘉久治 | 1992 | 「西上野における古瓦散布地の様相」群馬県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要』10 |
| 九州歴史資料館 | 2002 | 「大宰府政跡」 |
| | 2005 | 「觀世音寺・伽藍編」 |
| 工藤圭章 | 1979 | 「飛鳥寺・法隆寺の建立」『日本古寺美術全集』第一巻 集英社 |
| 栗原和彦 | 2004 | 「山王庵寺の石造物と塔跡」『信濃』56・9 |
| | 2006 | 「山王庵寺出土『放光寺』銘文字瓦をめぐって」『群馬文化』288 |
| 群馬県教育委員会 | 1970 | 「上野国分尼寺発掘調査報告書(昭和44年度調査概報)」 |
| | 1971 | 「上野国分尼寺発掘調査報告書(昭和45年度調査概報)」 |
| | 1988 | 「史跡上野国分寺跡」 |
| | 1992 | 「史跡十三宝塚遺跡」 |
| | 1993 | 「上野国分尼寺跡・上野国分二寺中間地域」 |
| | 1999 | 「上野原跡」 |
| 群馬県史編さん委員会 | 1986 | 「群馬県史 資料編2 原始古代2」 |
| 群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 1984 | 「中尾」 |
| | 1987 | 「下東西遺跡」 |
| | 1988 | 「新保遺跡・蛭沢遺跡」 |
| | 1990 | 「国分城遺跡」 |
| | 1990 | 「鳥羽遺跡 L・M・N・O区」 |
| | 1992 | 「鳥羽遺跡 A・B・C・D・E・F区」 |
| | 1986~ | 「上野国分寺跡・尼寺中間地域」(1)~(8) |
| 群馬県歴史考古学同人会 | 1982 | 「第3回関東古瓦研究会資料」 |
| 群馬町教育委員会 | 2002 | 「上野国分尼寺跡北辺遺跡」 |
| 上毛新聞社 | 1997 | 「貴れと祈り 群馬の埋蔵文化財」 |
| 住谷修 | 1982 | 「上野瓦築」西毛編 |
| 津金沢吉茂 | 1983 | 「古代上野における石造技術についての一試論」『群馬県立歴史博物館研究紀要』4 |
| 奈良国立文化財研究所 | 2002 | 「山寺田発掘調査報告」 |
| | 2003 | 「古代の官衙遺跡」I 遺構編 |
| 奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館 | 1980 | 「日本古代の鶴尾」 |
| 前沢和之 | 2001 | 「地域典としての古代石碑—山上碑と放光寺をめぐって—」『歴史評論』609 |
| 前橋市教育委員会 | 1975 | 「文化財調査報告書」第5集 |
| | 1976 | 「山王庵寺跡第2次発掘調査概報」 |
| | 1977 | 「山王庵寺跡第3次発掘調査概報」 |
| | 1978 | 「山王庵寺跡第4次発掘調査概報」 |
| | 1979 | 「山王庵寺跡第5次発掘調査概報」 |

- | | | |
|---------------|---------|-----------------------------------|
| | 1980 | 「山王庵寺跡第6次発掘調査概報」 |
| | 1982 | 「山王庵寺跡第7次発掘調査概報」 |
| | 2007 | 「山王庵寺－平成18年度調査報告」 |
| 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 1995 | 「大屋敷遺跡III」 |
| | 2000 | 「山王庵寺－山王庵寺等V遺跡発掘調査報告書一」 |
| | 2000 | 「上野岡分尼寺寺域確認調査」 |
| | 2000 | 「元總社宅地遺跡・上野岡分尼寺寺域確認調査II」 |
| | 1983～97 | 「元總社明神遺跡」I～X III |
| | 2000～05 | 「元總社薬師遺跡群」元總社小見遺跡ほか |
| | 2006～ | 「元總社薬師遺跡群」(1)～(2) |
| 前原豊 | 1998 | 「よみがえる白鳳の寺 山王庵寺」「群馬文化」254 |
| 松田猛 | 1984 | 「山王庵寺の性格をめぐって」「群馬県史研究」20 |
| 右島和夫 | 1994 | 「総社古墳群の形成過程」「東国古墳時代の研究」学生社 |
| 宮本長次郎 | 1979 | 「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」「日本古寺美術全集」第二巻 築英社 |
| 村田喜久夫 | 1986 | 「上植木庵寺」「群馬県史 資料編 2」 |

写 真 図 版



北上空から伽藍地を望む



1. 12Tレンチ調査区全景（南西から）



2. 6次調査区検出状況（12T・東から）



3. 白色粘土版築周辺状況（12T・北東から）



4. 金堂版築断ち割り状況（12T西壁・南東から）



5. 金堂版築断面（12T西壁・東から）



1. 金堂版築断面（12T 撫亂部・西から）



2. 黒色土版築断面（12T 東壁・南西から）



3. 黒色土版築東限部断面（12T 南壁・北から）



4. D-14号土坑全景（12T・北から）



5. D-14号土坑断面（12T 西壁・東から）



1. 13トレンチ調査区全景（東から）



2. 金堂版築断ち割り状況（13T・西から）



3. 金堂版築掘り込み部断面（13T・北から）



4. 金堂版築周辺の瓦出土状況（13T・北西から）



5. D-16・17号土坑全景（12T・北から）



1. 14トレンチ調査区全景（北から）



2. 金堂版築断面（14T西壁・南東から）



3. 金堂版築掘り込み部断面（14T西壁・東から）



4. 14トレンチ西壁断面（北東から）



1. 金堂版築周辺の瓦出土状況（14T・北から）



2. D-8・9号土坑全景（14T・北から）



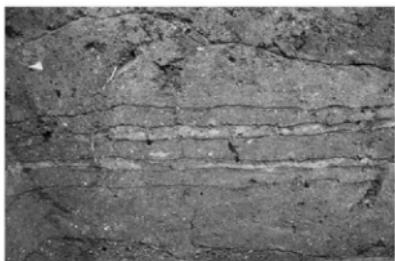
3. 17トレンチ調査区全景（北から）



4. 金堂黒色土版築断面（17T西壁・東から）



5. B-3号建物跡版築断面（17T西壁・東から）



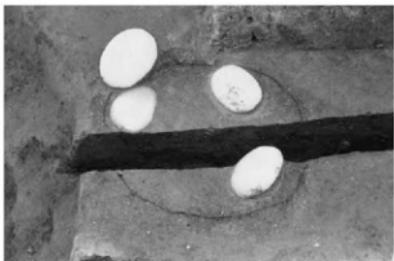
6. B-3号建物跡版築断面接写（17T西壁・東から）



7. B-3号建物跡版築面全景（17T・北から）



1. 15トレンチ調査区全景（東から）



2. 回廊礎石据付跡1（15T・北から）



3. 回廊礎石据付跡2（15T・北から）



4. 15トレンチ北壁断面（南東から）



5. 回廊版築断面（15T・南東から）



6. D-1号土坑遺物出土状況（15T・北から）



7. D-2・4号土坑遺物出土状況（15T・東から）



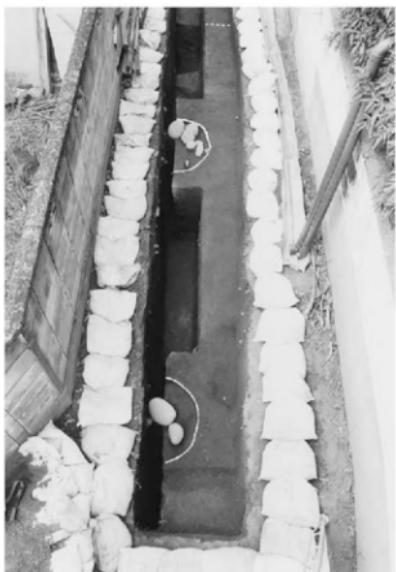
1. 18トレンチ調査区全景（東から）



3. 回廊礎石据付跡3（18T・南から）



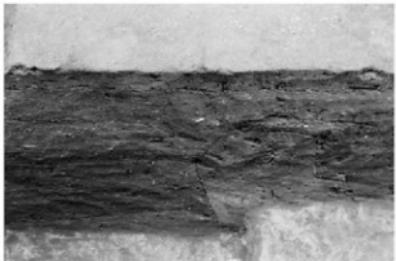
4. 回廊礎石据付跡4（18T・南から）



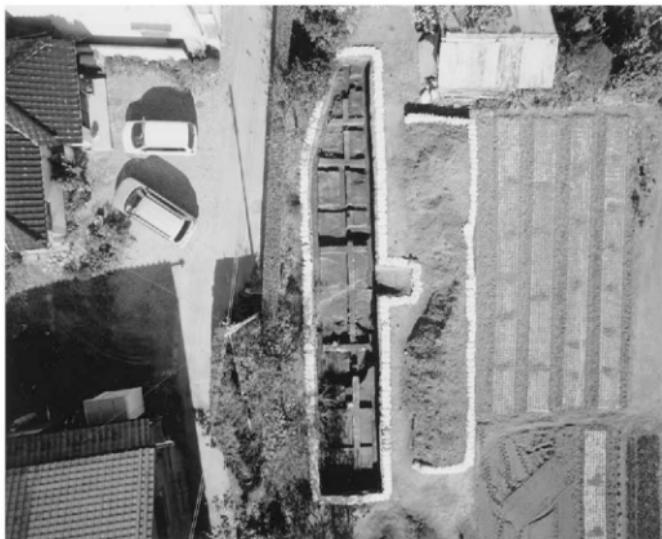
2. 18トレンチ回廊跡全景（西から）



5. B-2号建物跡版築断面（18T・南西から）



6. B-2号建物跡南限部分断面（18T・南西から）



1. 19トレンチ調査区全景（上空から、上が北）



2. 19トレンチ版築状土層残存状況（南から）



3. 版築状土層断面（19T・西から）



4. 版築状土層断面接写（19T・西から）



5. 19トレンチP-1号柱穴全景（西から）



1. 19トレンチ瓦溜り遺物出土状況全景（北から）



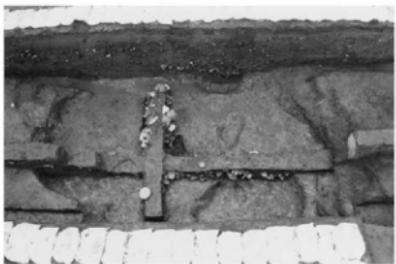
2. 瓦溜り遺物出土状況（北西から）



3. X II式軒丸瓦の出土状況



4. 瓦溜り底面の遺物出土状況（西から）



5. 瓦溜り完掘状況全景（北西から）



1. 10トレンチ調査区全景（北から）



2. H-16・23号住居跡全景（南西から）



3. H-17号住居跡全景（西から）



4. H-18号住居跡遺物・炭化材出土状況（西から）



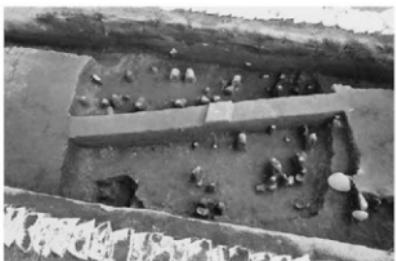
1. H-18号住居跡壁面補強材出土状況（西から）



2. H-18・22号住居跡竈（西から）



3. H-19号住居跡全景（西から）



4. H-19号住居跡遺物出土状況（西から）



5. H-21号住居跡全景（西から）



6. H-21号住居跡竈（西から）



7. 11トレンチ調査区全景（北から）



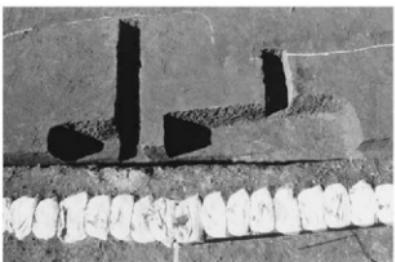
1. H-24号住居跡全景（西から）



2. H-24号住居跡窓（西から）



3. 20トレンチ調査区全景（南から）



4. H-25号住居跡全景（東から）



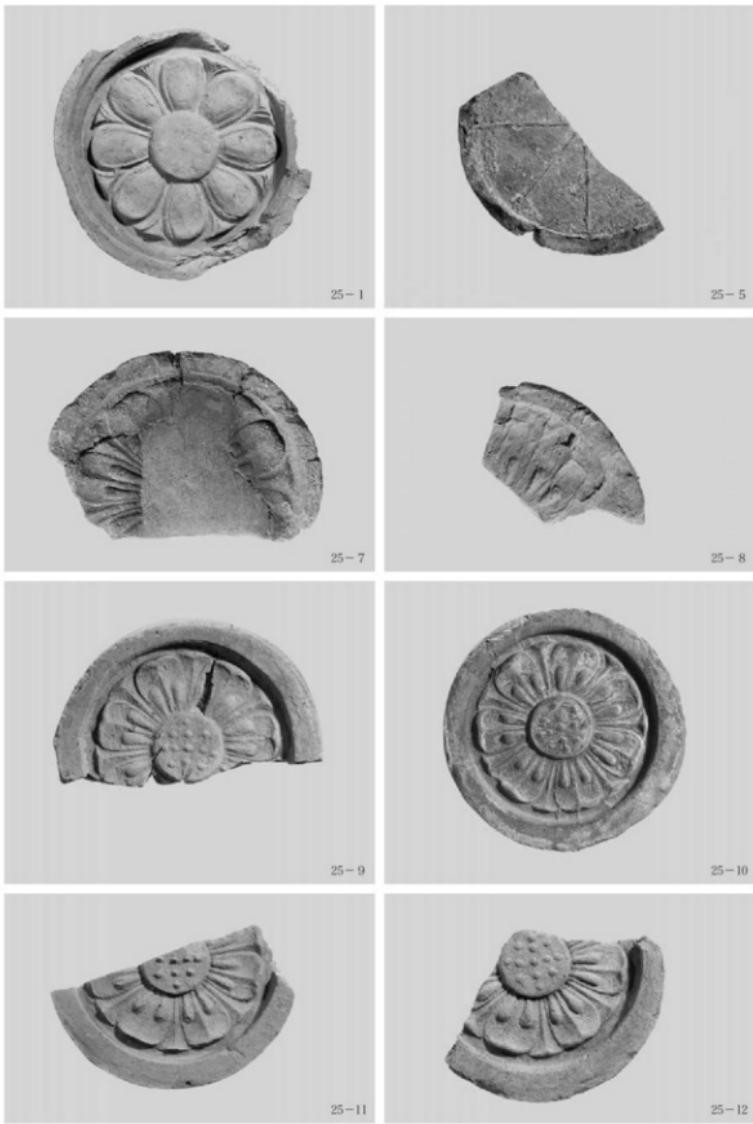
5. H-26号住居跡全景（西から）



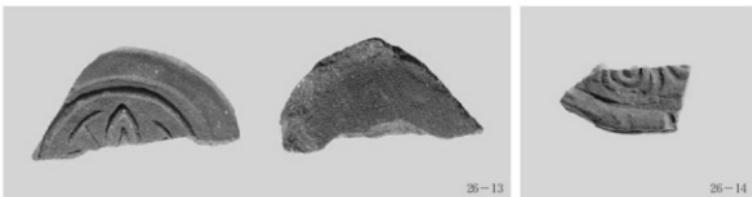
6. H-25・26号住居跡断面（西から）



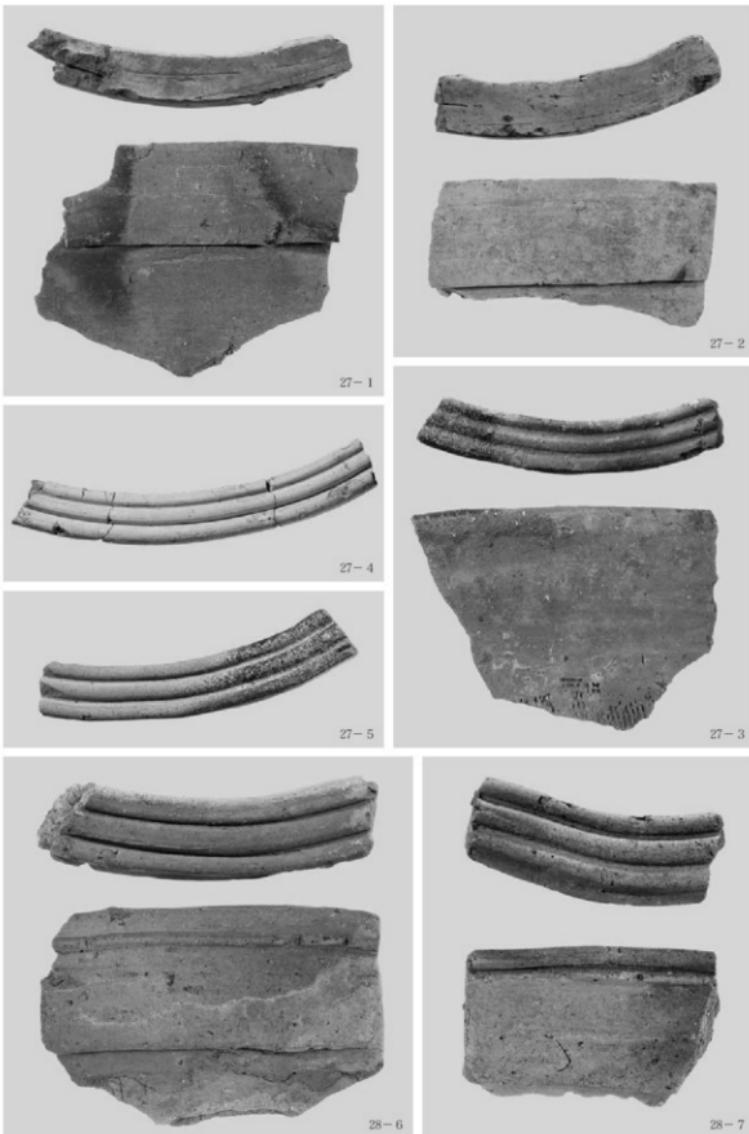
7. H-27号住居跡全景（東から）



平成19年度調査出土軒丸瓦 1



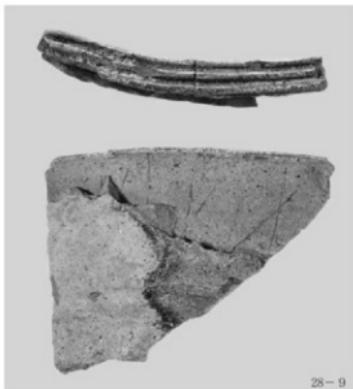
平成19年度調査出土軒丸瓦2



平成19年度調査出土軒平瓦 1



28- 8



28- 9



28- 10

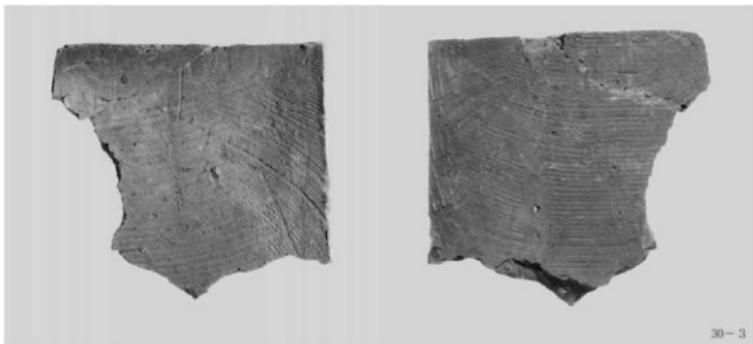


29- 4

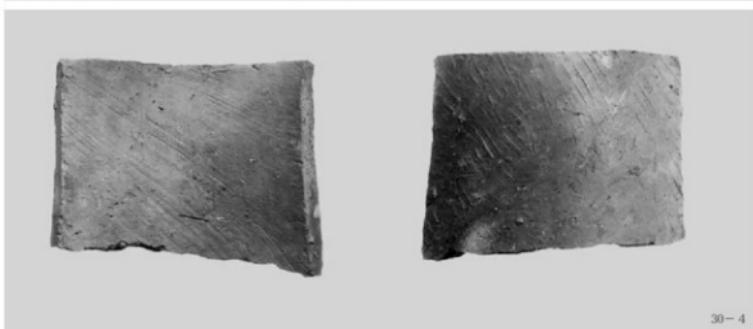


30- 1

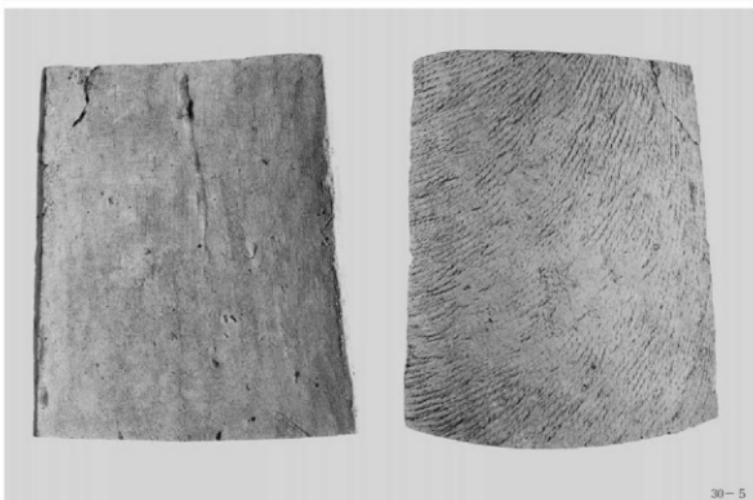
平成19年度調査出土軒平瓦2（28-8・9・10）・丸瓦（29-4）・平瓦（30-1）



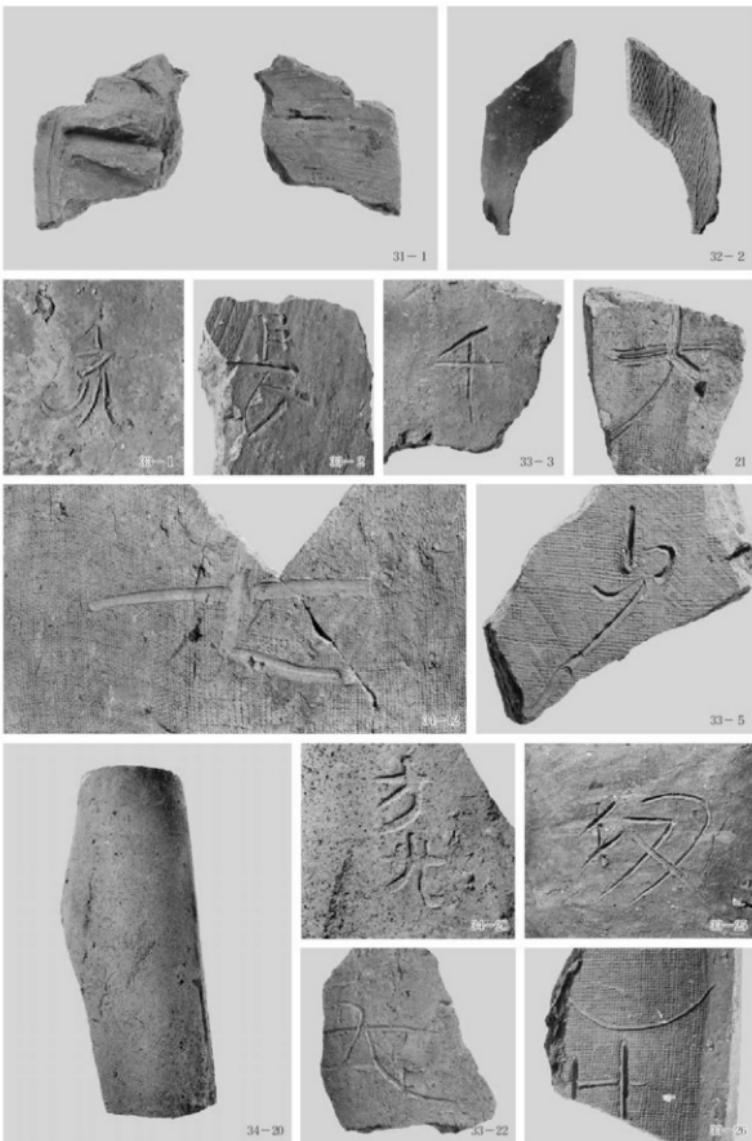
30-3



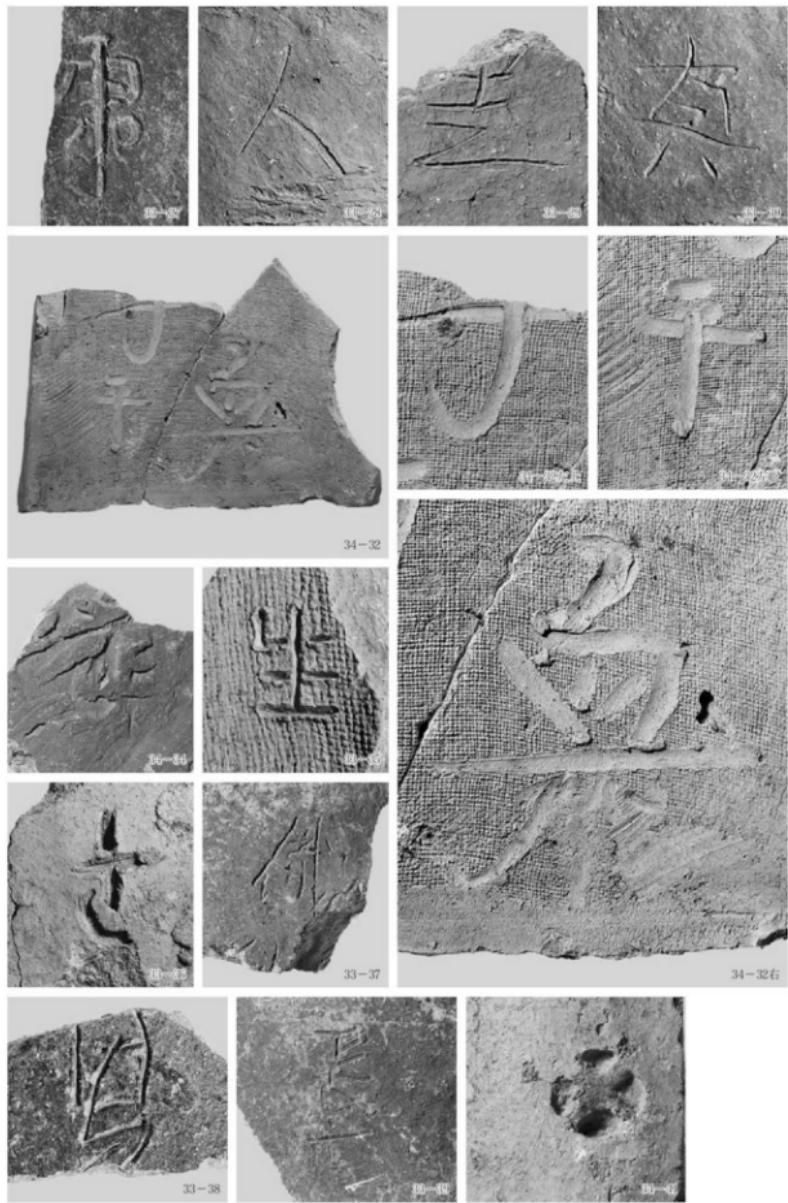
30-4



30-5



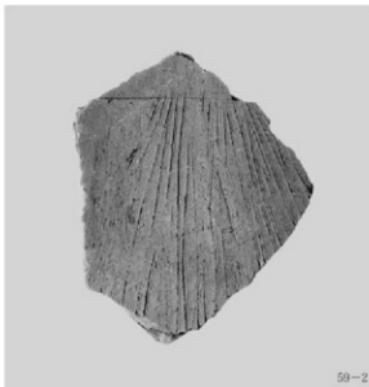
鬼瓦 (31-1) · 筵目瓦 (32-2) · 文字瓦



文字瓦など



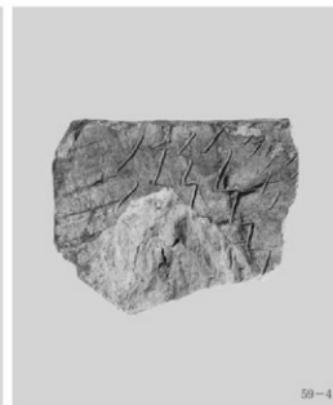
59-1



59-2



59-3



59-4



59-5

箋描きなど



H-17·18·19·21·23号住居跡出土土器



11・14・15・19トレンチ出土土器



19トレンチ出土土器・切石

抄 錄

フリガナ	サンノウハイジ
書名	山王庵寺
副書名	平成19年度調査報告
卷次	
シリーズ名	山王庵寺範囲内容確認調査報告書
シリーズ番号	II
編著者名	池田史人・綿貫綾子・栗原和彦
編集機関	前橋市教育委員会 文化財保護課
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三保町二丁目10-2
発行年月日	西暦2009年2月23日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置 (旧日本測地系)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
サンノウハイジ 山王庵寺跡	前橋市總社町 總社2408番地 ほか	10201	19A135	36°23'53"	139°02'06"	20070911 ~ 20071226	405m ²	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な検出遺構	主な出土遺物	特記事項
山王庵寺跡	寺院跡	古墳～奈良・平安	金堂跡・回廊跡・建物跡 (版築土) 2棟、瓦涵り、 堅穴住居跡14軒、溝跡5 条、土坑23基、ピット40 基	瓦(軒丸・軒平・丸・ 平・鬼瓦)、土師器・須 恵器・灰釉陶器・薙羽 口・鉄滓・金属製品	金堂跡：上部白色粘土・ 下部黒色土の版築。基壇 規模は、東西22m、南北 16.4m以上。回廊跡：西 面回廊を検出。回廊東西 規模79.7m。
		中世以降	土坑1基		

山王廃寺範囲内容確認調査報告書II

山 王 廃 寺 平成19年度調査報告

平成21年2月17日印刷

平成21年2月23日発行

編集・発行／前橋市教育委員会文化財保護課

印刷／朝日印刷工業株式会社